
イナズマイレブンX PROJECT NOAH

葦川 翔一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブンX PROJECT NOAH

【Nコード】

N2086S

【作者名】

葦川 翔一

【あらすじ】

日本中を震撼させた、エイリア学園による中学校連続爆破事件から1ヶ月。

事件の解決を記念して、また中学サッカー界の更なる発展を祈って、フットボールフロンティアを上回る大規模な大会：『フットボールフェスティバル』が開催されることとなった。

田堂 守を中心とする雷門サッカー部は、闇野 カゲトラ新メンバーを加えて大会に参加し、全国のライバル達との熾烈な戦いに身を投じる。

一方静岡の海岸では記憶喪失の少年が発見され、東京では有名サッカークラブが何者かに襲われていて…

サッカー協会・記憶喪失の少年・大会の裏に隠された、謎の陰謀。

別々に生まれた幾つもの物語が複雑に絡み合い、やがて一つの巨大な流れへと昇華していく、イナズマイレブンのもう一つの物語。

世界設定

- 世界設定 -

エイリア学園編から1ヶ月が経過した世界。冒頭部分のみエイリア編終盤の描写あり。当然原作とはパラレル扱いだが、強引に原作と結びつけるならエイリア編から世界編までの『空白の3ヶ月』の間が起こった出来事。

日本国内での物語なので外国勢はあまり登場しない…と思われるが、留学生設定で一部のキャラが登場する可能性あり。

この世界のサッカーは『日本サッカー協会』によって管理されており、町中のあちこちにガチャマシンが設置されている。

また、特訓に必要な『熱血ポイント』、他校の選手の引き抜きに必要な『友情ポイント』が存在する。

秘伝書も秘宝堂などで販売され、サッカー選手ではない一般人でも購入可能。手軽に必殺技を習得でき、超次元サッカーの醍醐味を味わうことが出来るアイテムとして人気。

エイリア学園の事件が切欠で超次元サッカーの知名度があがり、日本中でブームが起こっている。

一部：というかかなり『FANTASTIC WORLD』から流用したキャラ・設定有り。というかこの小説から『FANTASTIC WORLD』に流用したのだけ。

第0話 Aの始まり

『 これまでの、イナズマイレブン2は…』

雷門中学校サッカー部のキャプテン・円堂 守。

転校生の豪炎寺 修也と共に、私立のマンモス校…そのゴミ溜めである弱小サッカー部を見事優勝に導く。

だが、数々のライバルチームとの激戦を制し、日本一になったのも束の間、今度は宇宙から来た侵略者を名乗るエイリア学園との戦いにその身を投じる。

数々の出逢いと別れ。脅威の侵略者達との熾烈な死闘。それらを乗り越え、円堂達地上最強のサッカーチーム・イナズマキャラバンはエイリア学園最強のザ・ジエネシスを打ち破った。

そして、今…イナズマキャラバンは最後の戦いに挑んでいる。相手は嘗ての仲間達。エイリア石の力に溺れた、負け犬達。涙を飲んで散っていった、敗者達。

研崎 竜一によって仕組まれた残酷な戦いは、佳境を迎えていた…

* * *

試合は後半戦。3・0でダークエンペラーズがリードしていたものの、綱海を起点とした雷門の反撃により、同点に追い付いた。

だが3-3になったは良いが、まだダークエンペラーズは余力を残している。

疲労困憊の雷門とは対照的に、余裕綽々のダークエンペラーズ。その強力なシュートの数々に、1人、また1人と倒れてゆく雷門イレブン。立向居に代わり、円堂がGKに入った。戦いはいよいよ終盤。倒れ伏す雷門中に、勝機はあるのか…

「負けてなるものか…」

水色の髪を揺らしながら、風丸 一郎太は唇を噛み締めた。

何のためにエイリア石の力を入れたのだ？

勝つためではないのか？

勝つため、勝つためだ。

力を得ることの素晴らしさを、感じるためだ…！

「追加点だ、染岡、西垣！」

DFの西垣がオーバーラップしてくる。続いて、染岡も不敵に笑いながら風丸の元へ駆け寄る。

ボールを中心にし、風丸、西垣、染岡の3人がボールを蹴り上げた。紫色のペガサスが、産声を上げる。

「……ダークペガサス……！！……」

暗黒の天馬、ゴールを強襲する。立向居を負傷退場に追いやった、ダークエンペラーズの最強シュート。本職に復帰した円堂に襲い掛かる…！

円堂「『ゴッドハンド』……！！」

対する円堂が放ったのは、雷門中を代表するキーパー技。黄金の輝きが、天馬を受け止め、激しく火花を散らす。

円堂「ああああー!!」

闇色の天馬と黄金の神の手のぶつかり合い。完全に天馬の威力を殺した神の手が弾けた時、風丸らの武器となっていたボールは、円堂の手中に収まっていた。

競り勝ったのはその気合い故か。それとも…円堂の仲間を救いたいという想いからか。

兎に角、『ムゲン・ザ・ハンド』をも打ち破るダークエンペラーズの最強シュートを、低ランクの必殺技で止めるといふ、不可思議な出来事が起きたということには変わりはない。それには常識では説明のつかない、神憑りのな力が働いていたのかもしれない。円堂がよく言っていた『勝利の女神』とやらが、円堂に微笑んだのだろうか。

「何故だ…何故だ…何故だ何故だ何故だああッツ!!」

激昂する風丸。

否定された気がした。エイリア石に手を出してまで、自分が求めたものを。何者にも負けない喜びを、力を。速さを。テクニックを。それら全てを、円堂は打ち砕いた。

いつだってそうだ。あいつはいつだって、気合いや根性で勝つてしまふ。皆を惹きつける魅力。何だって笑い飛ばす、持ち前の明るさ。負けても負けてもへこたれない、打たれ強さ。どんなにハードな特訓にも逃げない、サッカーに対する純粋な愛。

自分は、円堂みたいにはなれない。あんな風に、明るくはなれない。怖かった。自分の居場所が無くなっていくような気がして。

どんどん強くなっていくエイリア学園。益々レベルアップしていく雷門。負けても負けても臆さない、仲間達。例え負けても、練習の手応えを得て満足しているチームメイト。例えエイリアに及ばずとも、仲間1人1人の実力には差はあれど。確実に強くなっていく戦友達。

そんな中、1人取り残された自分。埋められない力の差。越えられない壁。

焦燥感、絶望感、疎外感。

何度叫びたくなったかわからない。

悲しくて哀しくて。

苦しくてもどかしくて。

エイリアどころか、仲間すら力及ばぬ悔しさ歯痒さ。

だがエイリア石は、それら全てを、風丸の心に巣くった陰鬱たる感情の総てを消し去ってくれた。

強くなりたいたいという欲望を満たしてくれた。

このスピード、このパワー。誰にも負けない。

エイリア学園を倒すために戦ってきた自分が、まさかエイリア最後の戦士になるとは何たる皮肉か。いや、そんなことはどうでもいい。雷門に負けない力を手に入れたというのに。

その力を、こいつは…

「何でいつもお前は、俺を…！」

風丸の言葉には反応せず、ボールを投げ返す円堂。

それは風丸の足元に転がり、彼の右足に当たって跳ねた。

「来い。お前の全てを受け止める！」

円堂みたいになりたかった。太陽のように眩しく、強く。でもなれなかった。今この場に立ち、円堂と敵同士として対峙しているのが、その証拠。

もうわからない。何が正しくて、何が間違っているのか。

俺は正しい。俺は間違っている。俺は正しい。俺は間違っている。俺は、俺は…！

「うわあああああ！！！」

蹴り出される、ボール。

全身全霊…風丸の全力のシュート。

「うおおお！！！」

それを止める円堂。グローブを打つ強い刺激に顔をしかめつつ、再び風丸にボールを投げ返す。

「まだまだ！来い、風丸！」

そう言って構える円堂は、いつになく真剣だった。

次の一手には、俺やダークエンペラーズの、全ての力を注ぎ込もう。俺達の『答え』を、見つけるために。

「勝負だ、円堂…！」

風丸が合図すると、染岡、西垣が後方から走り寄ってくる。彼らも

また、答えを求めていた。何が正しいのか、その答えを…

「『『『ダークペガサス』！！！！』』」

3人の足が交わり、ボールが天高く蹴り上げられた。

漆黒の天馬が低く嘶きながら、その翼を大きく広げる。

狙うは、円堂 守。目指すは、雷門のゴール。

空中で滞空するボールに3人がオーバーヘッドキックを放ち、ペガサスがゴールへ特攻する…

「それがお前達の『全力』なんだな…なら俺も、全力で応える！」

高く突き上げた右手に、黄金の氣が集まっていく。

やがてその氣は虹色に変わり、七色に輝く神の掌が生み出された。

「『ゴッドハンド』！！！！」

ぶつかり合う、闇の天馬、虹色の神の掌。

見る者を怯えさせる禍々しき闇と、見る者を魅了する神々しき光。

円堂の掌に、シュートの重みがのし掛かって来る。今までで一番強いシュート。

やがて円堂の体が、後ろに押され始めた。踏ん張ってはいるのだが、足がどんどん後ろへ引きずられていく。ゴールラインを割るか割らないかという所まで圧された時、再び円堂は力を込めて前進しようとした。

「俺が風丸をエイリア石に走らせてたんだ…俺があいつが悩んでることに気づかなかったから…だから俺が救うんだ！風丸も、みんなも！！！」

この悪夢を終わらせるために。後少して、この悲しい闘いに終止符を打てるんだ。

みんなで笑って、またサッカーをするんだ…！

不意に、体が軽くなった。

さっきまで支えるだけで精一杯だったシュートを、前進して受け止めることが出来た。そして、光の輪が弾け、七色の神の手が消えた時…ボールは円堂の手の中にあつた。

「何!？」

本当に受け止めてしまった。風丸やみんなの全力を。

円堂がボールを、頭上に掲げた。ふらつく足で必死に踏ん張って。

彼の体の周りを、緑色の電撃が帯電している。円堂の体中を駆け巡る電撃は、徐々にボールに集まっていき、それが極限まで高まった後、一気に爆発した。緑色のエネルギーがピッチ一面に広がる。

「思い出せ、みんな!！」

円堂の叫びに呼応するかのように、緑色の電撃が風丸達の心を打つ。ビリビリ、と…心地良い刺激が全身を駆け抜ける。

そして電撃に打たれた者達の脳裏に蘇るのは、円堂と共に過ごした鮮やかな記憶…

『サッカー、やろっぜ!』『サッカーやろっぜ!』『サッカーやろっぜ!』『サッカーやろっぜ!』『サッカー』

声が、聞こえる。みんなをやる気にさせる、円堂 守の熱い声が…

『みんな、サッカーやろうぜ!』

… 円堂 守とその仲間達『イナズマキヤラバン』の活躍により、エイリア学園による中学校連続爆破事件は終結した。そしてエイリア学園編最終から1ヶ月後。

新たな物語が、始まる…

* * *

- 静岡県 -

富士市田子ノ浦。

波はまるで、この秋空のように穏やかだ。高波一つない。飽くまでも静かに、優しく。砂浜を洗っている。

耳を澄ませば、彼方から、微かな潮騒が聞こえてきそうだ。それくらい穏やかな海。

一見何の変哲もないように見える…が、一カ所だけ、明らかに平常ではない部分があった。

浜辺に流れ着いた幾つものゴミの中に、白い腕が生えている。細波によってゴミが洗われる度、その白い腕の持ち主も見え隠れする。

冷たい海の底を彷彿するマリンブルーの髪。

白いシャツと、透けるような真っ白い肌。

左側を砂浜に、右側を波に包まれている小さな顔は中性的で、傍目から見ると性別は判断出来ない。

そして一番目を引くのは…陸に向かって伸ばされた、右手に握り締めた物。

それは焦げ茶色の封筒。

差出人の名前や住所は滲んでしまっているが、辛うじて宛名は残っている。

封筒の表面に大きく書かれた名前は、『出雲 天馬』。

死んだように眠ったままの彼が行き着く先は、廃部寸前のサッカー部。何の因果か、彼もまた超次元サッカーの戦いに巻き込まれることになる…

第1話 新たな戦い

某所にある巨大な屋敷で、紅蓮の焰が産声を上げたのは深夜2時頃のことだった。

勢い良く暴れまわるそれはあつと言う間に屋敷を蹂躪し、辺りを白昼の如く明るく照らした。

その屋敷は住宅地から離れた小高い丘に建てられていたため、幸い他の家々に燃え移ることはなかったが、屋敷そのものは完全に猛炎の餌食となつてしまい、手の施しようがなかった。

「家が…燃えている…」

パジャマ姿の少年が、燃え上がる自宅を眺めている。

正に茫然自失。あまりに突然の出来事に、泣くことも叫ぶことも出来ない。近くに民家がある訳ではないし、電話も火の中。消防車も呼べない。

…それにしても。何という恐ろしい偶然だろうか。

少年は思いを巡らせる。

彼の血縁関係者は、事故自殺他殺病死問わず次々と死んでいる。驚く程の早死に体質なのだ。

少年の父は、少年がまだ幼い頃から次から次へと死んでいく親戚や先祖の話をしていた。しかしまさか本当に、しかも自分を除いて全員死んでしまうとは。

早死にする血族で、自分だけ生き残れたというのは、自分はその早死に体質を受け継いでいないのか。

まあそんなことはどうでもいい。

彼の家族は燃え盛る我が家の中。もう皆死んでいるだろう。

「やれやれ…これからどうやって生きていけば良いのかな。」

家族だろうと、死んだ人間に対する感傷に浸るなど無駄なこと。そんなことよりも未来に目を向けるべきだ。

住む場所もなく、金もない。生きていけば、衣食住の問題がつきまとう。親戚一同は皆早死にしている。仮に生きていても、連絡がつきそうな者は1人もいない。

所謂孤児だ。このままでは1人野垂れ死ぬことになる。

面倒だから、いつそのこと僕も死のうか。

少年が炎に向かって、一步踏み出した瞬間…

「待ちたまえ。」

突然右肩を掴まれた。まるで少年が死のうとすることを知っていたかのように、1人の男が現れ、少年の自殺を阻止した。

驚いた少年が振り返ると、そこには面長で黒いサングラスを掛けた男が立っている。

長い顎が特徴的なその男は、小さく笑みを浮かべた。

「お前はまだ死ぬべきではない。お前の力を、私に貸して欲しい。」

男は『影山』と名乗った。

炎を背にして立っている少年。彼と向かい合う影山の姿は、赤く照らされている。

「お前の力が必要なのだ。この腐りきった超次元サッカー界を変え
るには。」

「『超次元…サッカー』？」

聞いたことはある。だが、今まで全く興味がなかった。必殺技と呼ばれる有り得ない能力の数々で、互いに傷つけ合う汚らしい行為だと思っていたからだ。故に、最初は断るうとしていた少年だが、『サッカー界を変える』という単語が気になった。

「それは楽しいのかい？」

「ああ。少なくとも、お前の退屈した毎日を変えることは出来る。」
ただ無駄に生きているだけの人生ゲームにも飽きていたところだ。この男の口車に乗ってみるのも悪くないかもしれない。もし騙されていたのならその時は自ら命を絶てば済むのだし、もし楽しいのならとことんまで楽しめばいい。

「わかった。力を貸すよ。影山さん。」

男に向かって手を差し出す。影山は満足そうに微笑むと、少年の手を取って歩き出した。

屋敷が完全に崩落したのと同時に、2人は燃え盛る朱の世界を離れ、漆黒の闇へと溶け込んだ。誰にも悟られることなく、ひっそりと。

雷門中が福岡にて、ザ・ジェネシスと遭遇した頃の出来事である。

* * *

エイリア学園編最終から、1ヶ月後。もう世間は、元の落ち着きを

取り戻したようだ。まだ全てが元通りになった訳ではないが、エイリア学園によって破壊された学校も大分建て直され、既に多くの中学校は授業を再開している。

それは東京都にあるこの私立中学も例外ではない。

エイリア学園による襲撃事件があったために暫くの間生まれかけた空白。それを埋めるために、教師陣は各々の意向とは関係なく、急ピッチで授業を進めている。

何しろ3年生は受験を控えている。早く必修課程を終わらせて、私立高校の入試に向けて勉強をさせたいところ。運動会も文化祭も返上で、少なくとも二学期分の学習範囲だけでも終わらせなければ。教師達の苦勞とは別に、生徒も悲鳴を上げている。

運動会、文化祭、1年生は校外学習、2年生は宿泊学習が消えた。

3年生の修学旅行は6月にやっていたからいいものの、もし二学期に予定されていたら御破算になっていた可能性が高い。せつかくの勉強しなくても済む行事なのに、それら全てを勉強に費やすのは酷い話だ。

こうなると、エイリア学園に学校を破壊されなかった地域が羨ましい。

『学校が壊されたから勉強出来ない』と行って遊び呆けていられたのは、3年生にとってはかなり致命的なことだった。

授業が出来ない分、自分達で勉強しなければならぬ訳だが、学校生活から解放されて遊びまくる者も少なくない。稲妻町の近辺でも、かなりの数の学生が補導されたらしい。また、エイリアの同志を名乗ってあちこちで事件を起こす者もいたと聞く。刺激を求めて目を光らせている思春期の学生にとって、今回のエイリア事件は格好の的だったという訳だ。

そんな都会の喧騒から離れていた田舎の学校は、のんびりと授業を行っていた。都会では遅れを取り戻すべく猛スピードで生徒の頭に知識を詰め込んでいるのだが、それとは関係なくひたすらのんびり、ゆっくりとだ。

学校が破壊され、多くの地域の中学校は『臨時休校』の状態が続いており、休校が解除された今は猛スピードで授業を行っているのだが、その被害は日本を救った雷門サッカー部にも及んでいた。思えば彼らも、学校を休んで戦っていた訳で。

中学生である以上、学校教育を受ける義務もあり。今日もまた、各教科の確認テストを受けねばならず、皆が悲鳴を上げていた…

全国共通と思われるチャイムが、学校中に響き渡る。6時間目終了を告げるそれが鳴り響くと同時に、円堂 守は教室を飛び出した。

「よっしゃあ、部活部活!!」

「こら円堂!不合格だったら来週追試だからな!」

「わかってまーす!!」

手を振りながら廊下を全力疾走する円堂。英語担当教師はポリポリと薄くなつた頭頂部を掻き、溜め息をついた。

「あの熱意を少しは勉強に向けてくれたらなあ…」

階段を飛び降り、職員室から出てきた若い教師とぶつかりそうになりながら、昇降口を飛び出す。

「うわっ!」

昇降口で談笑していた野球部の寺井と、新聞部の蝉丸に激突。2人は勢い余って噴水の中に落っこちた。

水飛沫を上げて水中に沈む2人。寺井の持っていたグローブが噴水によって吹き上げられている。

「あーっ、俺の新しいグローブが…」

「ご、ごめん…後で弁償するから！」

平謝りに謝ってその場を後にする。

一年生の校舎を横切り、真っ直ぐ行くと…サッカー部の部室が見えてきた。

「あれ？」

誰かが部室の前に立って、中を覗き込んでいる。茶色い髪。中肉中背。何処かで見たとのことのあるヤツだ。いや、何処かで見ただなんてものじゃない。今日も教室で会話したではないか。

円堂「東じゃないか！どうしたんだ、何か用か？」

部室の前にいたのは、クラスメートで幼馴染みの東 京（あずま きょう）。

東は円堂に気づくと、手を上げながら近づいてきた。

東「やあ円堂。あのさ、ちょっと頼みがあるんだけど良いか？」

円堂「ん、何だ？」

東「俺もさ、サッカー部に入りたいなーって思ってさ。良かったら俺もサッカー部に入れて欲しいんだけど…」

それを聞いた円堂は顔を俯き気味にして肩を震わせ始めた。

東「え、円堂？」

円堂「ううう…うおおああっ！あずまー！！お前もサッカーの良さが解ったんだな！そうかそうか、じゃあ早速サッカーやろうぜ！ほらほら早く部室に来いよ…」

東「ちよ、ちよっと待ってくれ、まだ先生に入部届出してないから…」

円堂「んなことは後で良いって！みんなにも紹介したいしさ、早く来いよ！！」

東「あ、ああ…」

こうして、雷門サッカー部に新しい仲間が増えた。

円堂に続き、続々と他の部員も部室にやって来た。豪炎寺に鬼道。

一之瀬に土門。風丸とマックス、影野、シヤドウ。染岡と目金は数学の補習、半田は日直の仕事があるのでまだ来られないようだ。

一年生組もまだ来ていない。

あの4人は仲良しだから、大方壁山がトイレに入っているのを待っているのだろう。

東も交えて談笑しているところに、漸く一年生達が現れた。

部室のドアを開けて最初に顔を覗かせたのは、チームのムードメーカーである栗松 鉄平。

栗松「キャプテン、入部希望者を連れて来たでヤンス！」

円堂「入部希望者…？」

壁山「そうツス。さ、五郎、入るツスよ。」

壁山に伴われ、おずおずと姿を現したのは、少林と同じくらい小柄で、黒目がちの大きな瞳が特徴的な少年だった。

円堂「君が入部希望者か？名前は？」

「僕は多摩野 五郎といます。僕も是非、皆さんと一緒にサッカー

「がしたいのですが…」

円堂「ああ大歓迎だぜ！よろしくな、五郎！」

握手を交わす円堂と五郎。

聞くところによると、五郎は壁山と同じクラスでよく一緒に行動しているそうだ。前からサッカー部に興味があつたのだが、少し内気な性格のため、中々見学に来られなかつたらしい。

円堂「しかし嬉しいな、まさか2人も仲間が増えるなんてさ。」

鬼道「全くだ。お互いに技術を磨く意味でも、部員は多い程有り難いからな。」

腕組みをして頷く鬼道。

これで部員は1年生が5人に2年生が13人の計18人。かなりの人数だ。

円堂「ま、取り敢えず殆ど揃つたし、そろそろ部活やろうぜ。東と

五郎も一緒にさ！」

東「ああ！」

五郎「宜しくお願いします！」

ユニフォームに着替えた部員達が、部室を出ようとする。ボールを小脇に抱えた円堂がドアノブに手を掛けると、何やら女子達の楽しいげな声が近づいて来る。

1人は1年生マネージャーの音無 春奈。もう1人は2年生の木野 秋のようだが、他にも誰かいるらしい。あまり覚えのない声が聞こえる。

誰の声だろうかと円堂が考えているとドアが勢い良く開けられ、音無が中に飛び込んで来た。

音無「あ、皆さんお揃いみたいですね！なんとさつき、我が雷門サッカー部に新マネージャーが入ってくれたんです！それも2人ですよ！ダブルですダブル！！Wマネージャーです！！」

音無という名前とは対照的に、口喧しくまくし立てる。元々ハキハキした、明るい性格の彼女だが、今日はやたらテンションが高い。

鬼道「春奈…解ったから少し落ち着け。」

実兄の鬼道が窘めると、音無は決まりが悪そうに舌を出した。

木野「さ、2人とも入って。」

音無が落ち着いたのを確認して、木野が2人の新マネージャーを部屋へと招き入れた。ゆっくりと部屋に入ってきた1人を見て、東が驚きの声を上げる。

東「お、大谷さん！？」

大谷「あれ、なんで東君がサッカー部にいるの？」

新マネージャーその1。大谷 つくし。彼女も東と同様に、円堂のクラスメートである。

大谷「初めまして、大谷 つくしです。前からサッカー部に興味があったんだけど、今日思い切ってマネージャーになりました。よろしくね。」

円堂「ああよろしくな、大谷！…で、そっちの君は？」

皆の視線がもう1人のマネージャーへと向かう。一番後ろでドアノブに手を掛けたままの彼女は、皆に注目されて恥ずかしそうに俯い

てしまった。

「私は久遠 冬花…先日転校して来たばかりなのでまだこの学校のこととはよくわからないけど、皆さんのお役に立てるように頑張ります…」

人と話すのが苦手なのか、ずっと俯き気味で話していた。彼女が漸く顔を上げた時、円堂はふと、彼女の顔に見覚えがあることに気がついた。

円堂「冬っぺ？」

冬花「え？」

円堂「君、冬っぺだろ？小学校の頃よく遊んだじゃないか！俺だよ俺、『サッカーの守君』！！」

興奮気味に話す円堂の勢いに圧され、一步後退りする冬花。

きょとんとした顔で円堂を見つめる彼女は、円堂のことを知らないようだ。

冬花「…すみません、人違いじゃありませんか？私、あなたのことよく知りません。」

円堂「え？」

今度は円堂が驚く番だ。

円堂「うそ…君、冬っぺじゃないの？」

気まずい空気が流れる。

無理もない、絶対に本人だと確信して話し掛けたのに、円堂の知る少女とは別人だったのだから。

音無「じゃ、じゃあ皆さん、そろそろ部活やりましょうか！さ、壁山君達も出て下さい！」
壁山「ちょ、俺まだおやつ食べてないッスよ。せめて一袋だけ食べさせて欲しいッス…」

音無に背中を押され、壁山は名残惜しそうにポテトチップスの袋を手放した。

この気まずい雰囲気はどうにか突破しようという、音無の粋な計らいで、皆は気を取り直して部室を出て行く。冬花や大谷も木野と一緒に部室を後にした。まずは木野に倣ってマネージャーの主な仕事を指導してもらうらしい。夏未はまだ生徒会長としての仕事が残っており、今日は来られそうにない。

円堂「絶対冬つぺだと思っただけだなあ…」

まだ納得がいかない円堂は、椅子に座って一人腕を組んでいた。

土門「あれ、円堂も早く来いよ。キーパーがいなくちゃ、シュート練習が出来ないだろ？」

ひよろりとした長身の男が部室に入ってきた。

円堂「ああ悪い悪い。今行くよ。」

いつもよりテンションの低い円堂。土門は彼の肩をポンと叩くと、慰めるようにこう言った。

土門「まあ、人間誰だって間違いはあるさ。気にするなよ、サッカーの守君」

円堂「うーん…」

まだ納得のいかない様子だが、漸く迷いを振り切ったらしく、円堂は部室を飛び出して行った。

その頃、雷門サッカー部のMF・半田 真一は、夕焼けに照らされた廊下を一人歩いていた。

思いの外、日直の仕事が長引いてしまった。というのも、半田の相手は日直の仕事をサボって帰宅。残された半田は黒板の掃除に机の整頓に日誌の記入といった諸々の仕事を一人でこなさねばならず、部活に行くことが出来なかった。たった今職員室に日誌と出席簿を置いてきた彼は、やっと部活に行くことが出来るという訳だ。

日誌を置きに行く途中で、染岡と目金の悲鳴を聞いた。確か数学の補習だとか。

度の強そうな銀縁眼鏡を掛け、如何にも理数系教師といった出で立ちの、数学担当教師の怒声も聞こえる。神経質の見本みたいなあの教師は、生徒がちゃんと内容を理解したのか、隅から隅までチェックしないと気が済まない。恐らく染岡達は、全問正解するまで合格出来ない確認テストの無限地獄に捕らわれているのだろう。

「」愁傷様……」

2人の味わう苦しみを思うと、気が気でない。2人のことを笑えない。半田も今回の単元テストは合格ラインギリギリだった。下手すれば自分も染岡達と運命を共にしていたかもしれない。

職員室から出て昇降口へ向かおうとすると、階段脇の掲示板の前に突っ立っている少年がいた。

紫色のリーゼント。後ろから見ると、鳥が羽ばたいているように見える。この世界の中学生は奇抜な髪型をしている者が多いが、その中でも一際目立つ超次元ヘアースタイルだ。

目つきは悪い。眉毛を剃っているから、余計人相が悪く見える。

転校生だろうか？エイリア学園に学校を破壊されてから、あちこちで転入する生徒が増えている。それはこの雷門中も例外ではなく、サッカー部の闇野カゲトをはじめ、エイリア事件を契機にこの学校に転校してくる者は多い。自由な校風と都内でも有数の進学校だからだろう。これまで通っていた学校が破壊されたことを口実に、かなりの数の転校生がやって来た。

まあ、実情は生徒の出来不出来の差が激しいのだが。

既に学校内での点取り合戦に敗れ、腑抜けの烙印を押された者達は、好き放題に暴れている。

このリーゼントも、恐らくはそういう部類に含まれるタイプだろう。

…とそこまで半田が考えていると、不意にリーゼントが此方を振り向いた。

「…なんだ teme は。なに見てやがる。」

何やら殺気立っている。やはり見ていたのはまずかったか。

半田「い、いえ、何でもありません。さよならー!!」

慌てて頭を下げ、ダッシュで自分の下駄箱まで駆け抜ける。間違つて隣の女子の靴を履きそうになり、慌てて自分のロッカーを開ける。上履きを2回落とし、スニーカーを左右履き違い、傘立てに足を引っ掛けて転びながら、半田はリーゼントから逃げ出して行った。

「…フン。」

大慌ての半田を見送りながら、リーゼントは鼻を鳴らした。続いて、掲示板の記事へ目を戻す。雷門中の新聞部が書いた生徒新聞だ。

リーゼントが熱心に見ているのは、部活動の記事。雷門サッカー部の活躍が書かれている。キャプテン・円堂 守のインタビューも載っていた。

「サッカーか…」

小さく声に出してみる。これまで全く興味がなかったスポーツ。自分とは一生縁のないと思っていた競技。

喧嘩しか能がない自分には不向きだとは思っが…やってみるのも悪くないかもしれない。

リーゼントは胸ポケットから櫛を取り出すと、せっせと髪を整え始めた。

- 生徒会長室 -

雷門中学校生徒会長・雷門 夏未は、纏め終えたレポートの束と、留守中に溜まっていた書類の山を机の両脇に押しつけ、大きく伸びをした。やっと仕事も一段落だ。理事長である父親から学校の業務を一任されているのは誇るべきことだが、最近はやたらと仕事が多くて困る。

これでは当分部活に顔を出せないかも…と頬杖をつきながら溜め息をついていると、パソコンに一通のメールが届いた。

「あら？何かしら…」

新着メールの項をクリックし、本文を開く。
びっしりと書き込まれた文章の多さに辟易しつつ、一番上から一字一句読み落とさぬよう目を通していった。

『中学サッカー大会開催のお知らせ』と銘打たれたそのメールは、
中学サッカー協会から送られてきたものだった。それによると、エ
イリア学園事件の終結と中学サッカー界の発展を祈って、大規模な
サッカー大会を開く…ということらしい。

エイリア学園によって破壊された学校も大分建て直され、殆ど元の
落ち着きを取り戻したと言ってもいい。大会を開催するなら丁度良
いタイミングだ。

この大会は事前に参加申し込みを済ませた順に、1024チームが
参加出来る。だが雷門は、FF全国大会優勝やエイリア学園を倒し
た功績を讃えられ、申し込みさえすれば無条件で参加が確定する。

「後で円堂君と相談してみましよう。まあ…彼のことだから絶対参
加するって言うのだろうけど。」

円堂の嬉しそうな顔が目には浮かぶようだ。部室でみんなに大会のこ
とを伝えようか。それとも、円堂を直接此処に呼び出して言おうか。
円堂の笑顔を独り占めするなら後者が良いが…と、そこまで考えて
顔を赤らめる自分がいる。

誰も見ていないのに照れ隠しの咳払いを一つして、更にメールを読
み進める。

「あら？」

マウスを動かしていた手が止まった。

『但し参加する場合』、と注意書きがある。

要約すると、今の雷門は強過ぎるからハンデとして、転校してきたメンバーは以前所属していたチームに戻れ…という話だ。

つまり、豪炎寺、土門、一之瀬、鬼道はそれぞれ前の所属チームに戻らなければならない。そしてそのチームが大会に参加する場合、豪炎寺達とは敵同士になる。まあ戦力的には他のチームと同等になるだろうが…主要メンバーが雷門を離れるのは少々心許ない。

そういえば、シャドウこと闇野 カゲトはどうなのだろう。彼も転校生であり、前は別のチームでサッカーをしていた筈。彼まで抜けるとしたらかなり厳しい気もする。兎に角、大幅に戦力が削がれることは間違いない。

それでも円堂は参加すると言っただろうか。

嘗ての仲間が敵になるとしても。

「明日部室で聞いてみましょう。豪炎寺君達の意見も聞きたいし…」

夏未はパソコンの画面から目を逸らすと、再び残りの仕事を片付けるべく作業を開始した。

第2話 チーム離散

翌日、担任に入部届を提出して許可を得た東と五郎は、正式に雷門サッカー部の一員となった。

部室にて改めて自己紹介をした2人はサッカー部の仲間入りを出来て嬉しそうだ。入部して間もないため、ユニフォームはまだ作られていないが。当分は学校の体操着を来て部活をすることになりそうだ。

東達の挨拶の後、サッカー部の面々も軽く自己紹介をした。昨日は結局、染岡と目金は補習地獄から抜け出すことが出来ず、今日は朝から抜け殻のようになっていた。今にも倒れそうな染岡が手短に挨拶を済ませた後、夏末が皆の前に進み出た。

夏末「みんな、ちょっと話があるのだけど良いかしら。」

円堂「ん？何だ夏末。」

夏末は少し躊躇いがちに目を伏せた後、昨日サッカー協会から届いたメールのことを皆に話した。

「『フットボールフェスティバル』？」

円堂が不思議そうに聞き返す。

ノートパソコンをいじっていた音無も、サッカー協会のホームページを見て感嘆の声を上げた。

音無「おお…キャプテン、なんだか凄そうな大会ですよ。参加総数は中学校とクラブチームを合わせて1024チーム！『真の日本最強を決める大会』らしいです！」

マックス「なーんかイマイチ捻りのない名前だね。フットボール

フロンティアの方がまだかつこいいかも。」

体を反らせたマックスがつまらなそうに感想を述べる。彼の視線は部室の壁に貼られた『フットボールフロンティア』のポスターに向けられている。もう今年の大会は終わったというのに、まだ貼つてあるポスター。そういえばこんな大会に出たんだよね…と過去の思い出に想いを馳せているようだ。

夏末「サッカー協会から参加してみないかってお誘いのメールがあったのよ。何でも国内最大級の大会になるらしいけど…円堂君、参加してみる？」

円堂「ああ！するする！！ぜってー参加する！！！」

メラメラと闘志を燃やし始めた円堂に、クスリと笑みを零す。

かなり嬉しそう。ここのところ他校との練習試合はしていたけど、公式大会には参加していない。というか、夏のフットボールフロンティア以降サッカーの大会は行われていない。何故か、超次元サッカーは公式大会が少ないのだ。毎年夏頃に行われる、フットボールフロンティアだけが他校と戦うことが出来る唯一の大会だ。だからフットボールフロンティアは大いに盛り上がるのだが。超次元サッカーファンが熱く燃え上がる一時の祭り。

つまり、フットボールフロンティア以外に公式大会が行われること自体異例。毎年一度しか行われない筈なのに、そのたった一度の大会よりも規模が大きい宴が開かれるなんて。

円堂「夏末、俺達は申し込むだけで参加出来るんだらう？ならしよっぜ！また色んなチームと戦える…」

夏末「参加しても良いのだけど、サッカー協会側から一つ条件があるらしいの。それは…」

「俺から話そう。」

夏未が話を続けようとしたが、横から鬼道が口を挟んだ。普段、彼は誰かが話している時に割り込んだりしない。話が終わるまでじつくりと聞き、自分の考えを纏めてから話に加わるタイプだ。その彼が他人の話を遮るとは…

鬼道「今度開かれるフットボールフェスティバルに雷門中が参加する場合、俺や豪炎寺のような転入組は以前の所属チームに戻らなければならぬ。戦力調整のためにな。そして…」

ゴーグルの奥に潜む切れ長の目がチラリと土門を捉えた。土門も鬼道の言わんとしていることを察したらしく、片目を瞑ってみせた。

鬼道「俺と土門は、一時的に帝国学園に戻る。帝国のメンバーとして、フットボールフェスティバルに参加する。佐久間達の要望もあつてな。」

土門「いやあ、いつ言おうか迷ってたんだけどさ。どの道雷門が参加するなら帝国に戻らなきゃいけない訳だし。丁度良かったぜ。」
円堂「そうか…2人とも帝国に…」

突然の発表に、驚きを隠せない円堂。続いて豪炎寺も、徐に口を開いた。

豪炎寺「俺も昨日二階堂監督から、木戸川に来ないかとメールで誘われた。」

どうやら木戸川も参戦するらしい。もし豪炎寺が木戸川に戻るなら、武方三兄弟だけでなく更なる戦力が加わることになる。元より雷門も参加するなら戦力の減少は免れない訳だが、ずっと一緒に戦って

きた戦友達がチームを離れるのは少し寂しい気もした。

木野「どうするの円堂君。それでも参加する？」

皆の視線が、円堂に集まる。嘗ての仲間がライバルになるのなら、雷門の戦力は大幅に下がる。しかし…それでも戦いたい。まだ見ぬ全国の猛者達と。エイリア事件以後、雷門イレブンの活躍に感化された各地のライバル達は、それぞれが特訓を積んできたらしい。今の日本のサッカー界は、超次元サッカーブームも相まって過去最大級のレベルの高さだと聞く。

強い奴らと戦いたい。たとえ雷門の戦力が下がるとしても。一筋縄では行かない戦いになるとしても、だ。

円堂「答えは決まってるさ。参加するよ。フットボールフェスティバルに。」

彼の答えに、他の部員達も表情を明るくした。

風丸「お前ならそういうだろうと思ったよ。」

染岡「全国のライバルと戦えるのか…腕が鳴るぜ。」

五郎「来年のフットボールフロンティアまで出番はないと思ってたけど…僕も公式戦に出られるんですね！」

東「ワクワクするな…俺の超次元サッカーデビュー！」

新入部員2人も、初めての大会に胸を躍らせる。

そうだ。豪炎寺達がいなくなっても、新たな仲間がいる。実力は未知数だが、共に全国の頂点を目指す仲間が。

* * *

- 稲妻町駅前 -

数日後、以前のチームに戻るメンバーを見送るべく、雷門サッカー部は稲妻町の駅に来ていた。

円堂「次に会う時は敵同士だな。」

鬼道「フツ、もし雷門と戦う時は、手加減はしないぞ。」

豪炎寺「お前達と戦うまでに、俺はもつと強くなっておく。新たなシュートで円堂に勝ってみせる。」

既に豪炎寺は、新必殺技のヒントを掴んでいるらしい。『爆熱ストーム』を超える更なる必殺シュートの存在を仄めかし、不敵に笑ってみせた。

円堂「ああ！楽しみにしてるぜ！」

握手を交わす円堂と豪炎寺。思えば彼らが出会わなければ、雷門サッカー部は腐敗したままだった。彼らの出会いが、全てを変えた。伝説を蘇らせた。そんな運命のストライカーとの別れ。次に会う時は、互いに成長していることを誓う握手を交わした直後、ホームに銀色の電車が滑り込んできた。四角い細長の箱が、唸りながらホームに侵入する。幾つもの口が開き、中から乗客が吐き出される。

「じゃあ…さよならだ。」

鬼道の声を合図に、移動組の者達が車内へと足を踏み出した。

豪炎寺は木戸川清修に。

鬼道と土門は帝国学園に。

一之瀬はアメリカに留学する前に一時期所属していた、明紋FCに。4人はそれぞれのチームへ向かうべく、電車に乗り込んだ。

円堂「じゃあなみんな！」

車内の4人に力一杯手を振る、円堂。彼らに乗せた電車が彼方に消えるまで、ずっと手を振り続けていた。

「行っちゃったツス…」

壁山がしんみりと呟く。

やはり頼りになるメンバーがいなくなるのは心細いようだ。

栗松「俺達だけで勝てるんでヤンスかね？」

穴戸「キャプテン、なんか不安ですよ…」

次々にまくし立てる1年生達。豪炎寺は頼りになるエースストライカー。鬼道はチームを動かす司令塔。一之瀬は鬼道を支えるボランチ。そして土門は、ゴール前で敵の侵入を阻むセンターバック。チームの背骨のラインを形成する4人が、見事に消えた。1年生が不安になるのもわかる。このままでは雷門は空中分解するかもしれない。

円堂「何言ってるんだよお前ら。だからみんなで強くなるんだろ？ さ、早く帰って練習しようぜ。豪炎寺達に会った時、強くなってあいつらを驚かせてやるんだ！」

これはチャンスだ、と円堂は考えていた。チームの主要メンバーがいない今、1年生や控えに回った2年生達もスタメンで出場しなけ

ればならない。だがこの選手層の薄さが、控えの選手達のレベルを上げる良い切欠になるかもしれない。

要らない選手なんて1人もいない。全員で戦ってこそその雷門サッカー部なのだ。そのことを部員達に再認識させるための戦い。

田堂「（そうだ、夏末に頼んで他の学校と練習試合をさせてもらおう。大会が始まる前に、新体制のチームの調整をするのも悪くないな。」

新たなチームで挑む大会。

嘗ての仲間がライバル。

目指すは優勝、1024チームの頂点に立つこと。

田堂達の『全国への挑戦』が、始まる…

第3話 出雲とボールとサッカー部（前書き）

出雲 天馬編その1です。

第3話 出雲とボールとサッカー部

- 静岡県 -

富士市の海岸で発見された身元不明の遭難者。

地元の病院で検査したところ、記憶喪失に陥っているらしい。警察や医師が調べてわかったことは、この漂着者が男であること。年齢は12〜13歳であること。2週間近く海中をさまよっていた…というところくらいだ。そして彼が持っていた茶封筒だが、中身は空っぽだった。漂流している間に海中に消えたと考えるのが妥当だろう。差出人の名前も、滲んでしまっただけで判別出来ない。

この少年は全くの正体不明だ。ただ一つ手掛かりがあるとすれば、それは茶封筒の表に書かれた『出雲 天馬』という名前くらいか。何故かその文字だけ、奇跡的に消えずに残っていたのだ。他の文字は全て滲んでしまっていたのに。

まあそれよりも奇跡的なのは、約2週間もの間海中をさまよっていたにもかかわらず、この少年が無事だったことだろう。本人は特に体調を崩している訳でもなく、至って正常だ。2、3日入院すれば全快すると担当医は言っていた。少年自身も記憶は失っているが受け答えはすることが出来、言語障害などの異常は見られない。

この少年が何処から来て、何故海中を漂わねばならなかったのか。持っていた封筒の中身は？名前は？住所は？

全くの正体不明。正に『unknown』といったところか。記憶を喪ったが故に、一つも情報がない。しかし記憶が無いとはいえ、いつまでも名無しのままでは不便だ。この少年が生活していく上で、名前が必要だろう。

「あの…僕、この名前が欲しいです…」

検査に来た担当医や看護師に、少年はたどたどしい口調で告げた。片手に持った、茶封筒を見つめながら。

「うーん… よし、じゃあ君の名前は『出雲 天馬（いずも てんま）』だ。」

過去の記憶が戻るまでの、便宜上の名前。それは、少年が漂着した際に持っていた、封筒に書かれた名前から拝借したものだ。少年の唯一の持ち物。中身の入っていない空っぽの封筒。そこに書かれた何者かの名前を、この少年は気に入ったらしい。担当医はその日のその瞬間から、カルテに『出雲 天馬』と記入するようになった。

やがて少年 出雲 天馬は退院し、記憶喪失の自分を診察した心理学者の元へ引き取られた。そして失われた記憶を探しながら、社会生活に馴染めるようにと、近くの中学校へ転入することとなった。

* * *

出雲が中学校に転入してから、2週間が経過したある日

「だあつ！部活やろうぜ部活うう〜」

校庭の隅にひっそりと立てられたプレハブ小屋から少年の声が聞こえてくる。彼の声はプレハブ小屋…否、彼らのサッカー部室を震動させ、正面のドアに掛けられた『部員募集』の立て看板を地面に落とした。

だが、部室の中からはそれ以降大声もしなければ、誰かが出て来る

様子も無く。

声を上げた少年…二ノ前 始（にのまえ はじめ）は、目の前でだらけている仲間達を見て溜め息をついた。

始「つたく…今日も俺1人で球蹴りかよ…」

これが此処、富士市立桜咲木中学校超次元サッカー部の日常。以前は30人を超える部員を抱えた名門校であったが、10年前に起きた不祥事を契機にどんどん部員が減っていき、10年経った今はたった10人しかない、廃部を間近に控えた弱小チームへと成り下がっていた。しかもその不祥事のせいでサッカー協会から公式大会の無期限出場停止処分を言い渡されており、ここ10年はフットボールフロンティアには不参加。そのためか、部員達のやる気は無く、他の部活に馬鹿にされても憤る者はこの二ノ前 始だけという…至極残念な部活であった。

始「なあ百、久し振りに2人でパス練習でもやろうぜ。」
「やだ。」

ロッカーにもたれ掛かって読書をしている長髪の少年に話し掛けるが、手をひらひらと振って拒否される。

彼は九十九 十一（つくも といち）。一応桜咲木中サッカー部の司令塔である。

『百』というのは、彼の渾名だ。九十九のフルネーム『九十九 十一』の『十』を『+』にすると『九十九 + 一』になることに由来する。つまり、九十九 + 一 = 『百』という訳だ。

始「だーっ…俺達はサッカー部なんだぞ！サッカーやんねえでどー

すんだよ！」

ロッカーに八つ当たりしながら嘆く始。彼が殴る度にロッカーがぐらぐらと揺れ、九十九が顔をしかめる。

「うるせえぞ、二ノ前。」

ロッカーを殴る音がピタリと止んだ。部室に置かれた机の上に両足を乗せ、椅子の背もたれに体を預け、顔に乗せた漫画雑誌の下から始を覗み付けながら：サッカー部のキャプテン・代田 満（よだみつる）の低い声が、始を大人しくさせた。

代田「やりてえなら表に出て、1人でやってな。」

有無を言わさない重々しい口調。彼の苛立ちを代弁するかのように、黒いポニーテールが不機嫌そうに揺れている。

始「けど代田サン、俺達10人いるんだから5VS5くらいは出来るじゃないスカ。」

しかし始も負けてはいない。心を落ち着け、精一杯の反撃を試みる。対する代田は気怠そうに雑誌の下から覗かせていた瞳を、またパタパタと雑誌で覆い隠してしまっただが。

始「代田サンだって前はやる気だったじゃん。県下最強キーパーって呼ばれてたくらいだし……」

反応はない。そのうち寝息でも立てるのではないかと思える程、代田は静かに座っていた。

始「何だよ… 『鳴神サン』がいた時はめっちゃ凄かったのに…」
ピクンと、代田の体が揺れた。顔に乗せた漫画雑誌が床に落ち、真っ白で彫りの深い面長の顔が現れた。

代田「あ…?」

始「このままで良いんすか、代田サン！」

もう、代田の顔には雑誌は乗っていない。椅子に預けていた上体を起こし、じつと始の顔を見つめている。

始「『あの事件』以来一度も練習試合やってないし、部活だってまともにしてないし…」

代田「黙れ。」

『あの事件』という単語が出た途端血相を変え、始の胸倉を掴んで黙らせた。その手は心無しか震えている。静まり返った部室。既に室内には部員全員が集まっていたが、彼らの視線はみな、代田と始に集中していた。

代田「二ノ前：お前にもわかってるだろ。『あいつ』が消えた今、俺達が本気でサッカーをやる意味なんて無えんだよ。」

そう言っただけで代田は掴んでいた襟を離した。苦しそうに首元をさすった始だが、きつと代田を睨んだまま下がろうとしなかった。

始「わからないよ。俺達は『鳴神サン』のためにサッカーやってた訳じゃないんだ。部員だってあと1人入れれば練習試合くらい出来るんだし…」

「それに、」と始はシヨルダーバッグをこそごと探り、輪ゴムで留められたポスターを取り出した。輪ゴムを外してポスターを広げ、それを代田の鼻先に突き付ける。

『フットボールフェスティバル開催！』と大きく書かれたポスターには、生き生きとボールを蹴るサッカー少年達の姿がプリントされていた。代田はポスターのインクの匂いを嗅ぎ取りながら、自分にもこんな風にサッカーを楽しんでいた頃があつたな、と思いを馳せた。

始「この大会は参加制限が無いから、公式大会無期限出場停止処分の俺達だつて参加するチャンスがある。俺達でも上を狙えるんすよ！」

熱く語る始の勢いに圧されたか、代田が一步後ろに退いた。珍しく代田が圧されている。他の部員も、いつも以上に熱い始に感化されたらしく、少しフットボールフェスティバルに興味を持ち始めたらしかった。チラチラと始の持つポスターを盗み見る者もいる。元々サッカーが好きな少年達なのだ。漸く公式戦に参加出来る機会が出来たのだから、気にならない筈がない。

多かれ少なかれ、大半の部員が始の持つポスターに目を奪われていた。

代田「ふざげんな。この大会、俺達桜咲木は不参加だ。第一、部員も足りねえしな。」

始「嫌です。部員を1人入れれば正式に参加することが出来る…こんなチャンス、多分1回きりしかない。俺はこのチャンスを掴みたいんだ…！」

代田「数合わせの為の素人入れたつて勝てる訳ねえだろ。『あいつ』の代わりになる奴もいねえし…」

苛立たしげにロッカーを爪先で揺らす代田。その瞳は悲しげに伏せられていた。

そう…『あいつ』はもうこのチームにはいない…
彼の代わりになる者も、いない…

始「それでも俺は諦めないぜ。絶対参加するんだ、この大会に。」

代田「そんなに参加したかったら」

いい加減、始と言いつ争うのも疲れてきたのか、代田がある条件を出した。仮にも県下最強キーパーと呼ばれた自分が有利な、条件を。始を黙らせて、フットボールフェスティバルに参加することなくひっそりと引退するために。

代田「今すぐあと1人部員を連れて来て、俺と勝負しな。負けたらお前の希望通り、フットボールフェスティバルに参加してやるよ。」
始「マジッスか!?!」

代田「ああ。連れて来るなら今から30分以内にな。」
始「よっしゃ!行つてきまーす!」

それ以上のことは何も聞かず、始は一目散に部室を飛び出した。他の者は、彼の単純さに呆れている。30分以内に新入部員を見つけ…出来る訳がない。こんな学校のお荷物と呼ばれる部活に、入ってくる奴なんか、いない。

九十九「(やれやれ…代田サンも無理難題を言いつけたものだ…)」

出来ないとわかっていて、代田はそんな条件を出したのだ。始を黙らせるために。単純な始は直ぐに自分の負けを認めるだろう。そうなれば今回の話はうやむやに終わる。そこまで見越した上での提案だったのだ。

見ると、代田は小さく笑っている。自分の勝利を確信した、笑みを浮かべている。

* * *

一方始は…

始「部員どこだ〜？」

部室から飛び出し、辺りを見回す。校庭は他の部活が練習している。今の時期、運動部で入っている部活を変える者はまずいない。とすれば、校舎に残っている帰宅部の連中を誘うか、文化部の生徒に掛け持ちを頼むか、だ。

取り敢えずまだ時間はある。始が校舎に向けて足を踏み出したところ…

視界の隅に、小柄な体格の少年の姿が入った。艶やかなマリンスブルの髪が風で揺れている。サッカー部の部室を眺めているらしく、木の陰からじつと始や部室の方へ視線を送っていた。

始「（誰だあいつ…）」

見かけない顔だ。同学年も他学年も、大抵の生徒の顔は知っているつもりだったが、あの少年の顔は見た記憶がない。転校生だろうか。兎に角、何でもいい。今は仲間が欲しい。あいつを引っ張っていけば、代田も認めてくれるだろう。

始「なあ君、俺らの部室見てたよな。もしかして入部希望者か？」

にこやかに走り寄ると、少年はびっくりしたように体を震わせた。

「え、えーと…その… そ、そうです…」
始「そうかそうか！よし、じゃあ早速部活に来てくれよ！」

少年の手を引き、部室に引つ張っていく。目指す場所は目と鼻の先。部室を飛び出してからまだ4、5分しか経っていない。代田の驚く顔が目に見えよう。

バタンと勢い良くドアを開け、少年を中に連れ込む。
案の定、代田はあんぐりと口を開けて、始と少年を見詰めていた。

始「代田サン、連れて来たツスよ！新入部員を！！」

本当はまだ入部を希望しているだけで、新入部員という訳ではないが、今はそんなことより、代田に認めさせることが重要だった。

代田「チツ、マジで連れて来たか。…なら仕方ねえ。お前ら2人も、着替えてグラウンドに来な。」

始「部活やるんすか！？」

代田「ばーか。ミニゲームすんだよ。俺とお前らでな。」

続いて代田は、部室にたむろしていた何人かにも声を掛けた。彼らも始達と同様にゲームに参加させるらしい。

そして始達は、グラウンドに集まった。

暫くぶりに着たユニフォームに感動する始。突然のことに困惑する部員達。ユニフォームも体操着も持っていない少年は制服に借り物のスパイクという出で立ちで立っている。

「おいおい、今日は俺達ラグビー部がグラウンドを使う日だぜ。弱小サッカー部は部室でくすぶってな。」

ミニゲーム用の小さなゴールを引っ張り出した代田に、ラグビー部の強面達が文句を言いに来た。

代田「うるせえな。直ぐ終わるから、少し待つてろ。」

五月蠅そうに彼らを睨みつける。桜咲木中の3年生の中でも、結構存在感のある代田に睨まれては、ラグビー部の連中も何も言えない。やむを得ず、グラウンドの隅でストレッチを始めた。

代田「うるせえ外野はいなくなつたな…」

小さく独り言を呟き、始や少年の方に向き直る。

代田「さて…ラグビー部も待たせてることだし、とつとと終わらせるか。今から10分間ミニゲームをやつて、お前ら2人が俺らから1点でも取れたら、お前らの勝ち。取れなかつたら俺達の勝ちだ。」
始「俺達が勝つたらフットボールフェスティバルの参加を認められるんスよね？」

代田「ああ。約束は約束だからな。だが俺達が勝つた場合、大会の話は無しだ。それは忘れるなよ。」
始「わかつてますよ。」

部室にいた全員が、グラウンドで事の行く末を見守っている。読書をしていた九十九も、代田と始の勝負に興味を示したらしい。

始サイドは、少年と始の2人のみ。代田サイドは、代田にゲームの参加を頼まれたDFが3人。キーパーには代田自身が入り、通常のものよりも簡素で小さなゴールの前に立っている。

代田「九十九、審判を頼む。」

九十九「え、俺ですか？ …わかりました。」

突然の指名に驚いたが、仕方なく引き受ける。部室から持ってきたホイッスルを首から下げ、手には先程まで読んでいた文庫本の代わりに、ストップウォッチを持っている。

始「そういえばお前、名前は？」

「天馬：出雲 天馬です。」

始「俺は二ノ前 始。よろしくな！」

出雲「よろしくです…。」

答えながら、どうしてこうなった…と出雲は自分の運命を嘆いた。元々出雲は、サッカー部に入るつもりなどなかったのだから。偶々通りかかったサッカー部室から聞こえてくる怒声に、何事が起きているのかと少し好奇心を起こしただけだ。始の勢いに吞まれてつい頷いてしまったが、サッカーに興味がある訳ではなかったし、入部するつもりもなかった。

出雲「大丈夫、かな…。」

聞くところによると、自分は海中を1週間以上さまよっていたらしい。無論記憶がないから実感が湧かないが、それでもほぼ無傷だった自身の体に驚いている。

だが、それでも極度の運動はまだ控えるようにと、彼を引き取った心理学者の『センセイ』に言われていた。

出雲「やるしか…ないかな…。」

九十九がホイッスルを口に運んだのを見て、仕方なく腹をくくった。何もサッカー部に入部すると決まった訳じゃない。今この瞬間を乗

り切ることだけを考えよう。

「ピイイッ！」

ゲームがスタートした。桜咲木中サッカー部の命運を分かち、戦が。

始「よつしゃ、行くぞ出雲！」

出雲「は、はい…！」

一気に駆け上がる2人。彼らはゴールを守る必要がない分、かなり大胆に攻めていく。といつてもサッカー未経験の出雲は密集地帯を避けているが。

ボールをキープしていた始の目の前に、2年のDF・不破 雷童（ふわ らいどう）が立ちはだかる。彼はその巨体を生かして始のシュートコースを消すと、更に間合いを詰めてきた。

始「出雲！」

たまらず出雲にパスを出すか、苦し紛れのそれは紫色のリーゼントが特徴的な葉狩 勲（はがり いさお）にカットされてしまった。

葉狩「不破！」

右足を振り抜き、不破にボールが渡る。後はDF3人でパスを回して、時間が過ぎるのを待てば良い。

簡単なゲームだ。始の反乱はあっさりと終わった。

始「くそお、負けてたまるか…俺は戦いたいんだ、全国の強豪と…！」

がむしゃらにボールを追いかけるが、奪うことが出来ない。試合経験が乏しく、ブランクがある筈の不破達がこれほどまでに完璧にパス回しが出来るのは、訳がある。彼らの最後方で成り行きを見守っているDFの要・清村 テル（きよむら テル）の的確な指示が、始達の行動範囲を限定し、不破らのパスを繋がり易くしているのだ。

葉狩「諦めな二ノ前。もうこの部活じゃまともなサッカーなんて出来ねえんだよ。」

不破「その通り。お前も早く目を覚ましな……」

駄目押しとばかりに、不破の強烈なスタンディングタックルが始に炸裂する。巨体に跳ね飛ばされた始は砂塵を巻き上げ、グラウンドをゴロゴロと転がった。

派手に砂埃の中突っ込み、仰向けに横たわった始は荒い呼吸と共に震える手で砂を握り締めた。

始「痛え……けど、思い出したぜ！」

この砂の匂い。転んでも転んでも立ち上がって、ユニフォームがどんなに汚れても構わずにボールを追い掛けていたあの頃を。立ち上がる、始。

まだ立てる。まだ戦える。

試合終了のホイッスルが鳴るその瞬間まで、諦めない……

始「目え覚ますのはお前らの方だ！お前らだって、サッカーがしたくて入部したんだろ！？入部した時の気持ちを思い出せよ！」

葉狩「何……？」

一瞬、始の熱弁に心を奪われた葉狩がボールをトラップし損ねた。雄叫びを上げながら始がスライディングを放ち、ボールを弾き飛ばす。

葉狩「しまった！」

弾かれたボールの受け手は、不破でも清村でも代田でも…無論、始や葉狩でもない。コロコロと転がるボールは、出雲の足にぶつかって意志を持ったかのように跳ねた。

それが足に触れた瞬間、バチバチと出雲の全身を何かが駆け巡った。ボールに込められた始の思いや、勝ちたいという意志が出雲に活力を与える。意識が研ぎ澄まされ、グラウンドに立っているのは自分一人というまっさらで聡明な感覚に支配される…

不破「へへっ、チャンスだ！」

傍から見れば出雲はぼんやりと佇んでいるようにしか見えない。彼の内面で起こっている不可思議な変化には、誰も気がつかない。不破の豪快なショルダータックルが、出雲を襲う…のだが、その攻撃は虚しく空振りに終わった。体勢の崩れた不破は勢い余って砂塵立ち込める砂の海にダイブする。一瞬で不破の行動を見極め、咄嗟に身を交わしたのだ。

不破「え？」

始「何だ…？」

スライディングしたままの始も、抜かれた不破本人も、何が起きたのかわかっていない。呆氣にとられた彼らに小さく舌打ちをしつつ、葉狩が出雲に向かっていく。

葉狩「不破の奴、あんなチビに抜かれるなんてよ…」

このリーゼントは、勝つためならダーティーなプレーも厭わない肝の据わった男である。

今回も、出雲の体格を判断し、線の細い彼の向こう脛にスパイクの攻撃を浴びせかけた。何しろ相手は丸腰だ。ユニフォームも着ていなければレガースもしていない。無防備な脛に一撃当てれば、こいつもひとたまりもないだろう。

葉狩「（お前にゃ怨みは無えが…二ノ前を黙らせるためだ、悪く思うなよ…！）」

狡猾な一撃が、出雲に襲い掛かる…筈だったのだが。

出雲は狙われた右足でボールを蹴り上げ、それを盾にして攻撃を防いだ。そればかりではなく、華麗なヒールリフトで動揺した葉狩の脇を突破してしまった。

不破、葉狩があつという間に抜かれた。当人達は何事が起きたのかわかっていないようだが…最後列で見ていた代田には一連の出来事が全て把握出来ていた。それも、彼らに見合った対処法で抜かれていたのだ。

パワータイプで力任せな不破に対しては、小さな動きで自滅させ、出雲の力を過小評価していた葉狩に対しては、彼の狡猾なプレーに真っ向から対応し、反応に困ったところを素早く突破する。ほんの数分しか相対していないにも関わらず、彼らの特徴をよく捉えている。

しかし2人を抜いたのは良いが、まだ代田の守る砦の前には清村テルが控えている。代田とは小学校低学年の頃からサッカークラブで一緒にプレーしてきた仲間だ。2人のコンビネーションで失点を

防いできた、桜咲木の二枚の壁。

清村「お手並み拝見だぜっ…！」

遂に清村と出雲が対峙する…

第4話 出雲と魔法とあいつの夢

ゴール前で対峙する2人の少年。

片や静岡県最強キーパーを補佐する沈着冷静なディフェンダー。

片や記憶を失った、サッカー未経験の転校生。

全く違う境遇の両雄、向き合う…

その距離、徐々に縮まっていく…！

清村「（抜かせるかよ…こんな得体の知れない奴に…）」

嘗て桜咲木中サッカー部が、まだ他校と練習試合をしていた頃。

守備陣を統率していたのがこの男…清村 テルだった。副キャプテンであり代田を支えていた彼は、サッカー部の中核として機能していた。

味方DFが突破されれば、すぐにカバーに入り。

敵がロングシュートを放てば、シュートブロックで失点を阻み。

豊富な運動量と視野の広さを誇るカバーリングの名手。

そんな彼が今回倒すべき相手は、フットボールフェスティバル出場を賭けて始が連れて来た少年。

始にパスを出さずに自力で突破を仕掛けてくるプレースタイルから察するに、個人技で圧倒するタイプの選手らしい。

丁度良い。パス回しのしつかりした敵を相手にするより、こういう1人よがりなプレーをする奴の方が対処し易い。

清村が間合いを取る。目指す敵は眼前に迫っている。上手く前後に動いてシュートコースを消し、尚且つ始へのパスにも気を配る。少年…出雲の方は、そうした清村の執拗なディフェンスに少々戸惑ったようだが、意を決して強引に突破してきた。

清村「（いや…こいつはフェイントっ…!）」

左に抜けると見せかけて、右に抜けようとする出雲。だが清村は騙されない。

この程度のフェイントなら今までに何度も見てきた。騙される筈がない。

出雲の進路を阻み、これ以上進ませまいとする。それでも出雲は体を左右に動かして清村に揺さぶりをかける。しつこいくらいにフェイントを仕掛ける彼に、清村も少々苛立ちを覚えた。

清村「（なんだ？馬鹿の一つ覚えみたいに同じ動作ばかり…）」

そして気づく。これは陽動作戦だと。執拗な同じ動作に、清村が冷静さを失って正当な判断が出来なくなるようにするための…謂わば、自滅への伏線。

先の不破、葉狩の2名同様、清村に対しても的確に弱点を突いてきている。

冷静さを失うと途端に視野が狭まり機能的な動きが出来なくなる、清村の弱点を。

だがそれでも清村が有利なのは、不破達が出雲の戦術を暴露してくれたことだ。

相手が弱点を突いて突破してくるのなら、そこを突かれないよう意識を集中すれば良い。

フェイントなんぞには騙されない。意識は常にボールに向ける。下手に動けば抜かれる、痺れを切らして出雲が自分から攻撃してくる所を狙うのだ。

…そして遂に、出雲が動く。何しろ残り時間は少ない。勝つためには、自分から動かかねばならない…

清村「今だ！」

そして清村も、右に動いた出雲に向けて足を突き出す。ボールを弾いて彼の進撃を食い止めるために。

だが。

清村の右足は虚しく空を切る。

何故？

出雲の体は、確かに右にある。
股抜きされた訳でも、ボールのみが左から巻いて出てくる訳でもない。ならば…

何故…？

その答えは、頭上にあつた。
真上からボールが飛んでくる。太陽と重なったそれは清村の目を潰す良い目眩ましとなり、彼の右側から出て来た出雲の足元に吸い付くように収まった。

清村「しまった…！」

こうして最後の壁も突破…
残るはキーパー代田、ただ1人…！

代田「まさか清村まで抜かれるとはな…！」

久しぶりに嵌めたグローブの感触を確かめつつ、大きく構える。恐らく時間的にも1回シュートを撃てるかどうか…という所だろう。つまり出雲のシュートを止めれば俺達の勝ち、止められなければ始達の勝ちということだ。止めさえすればこの忌々しい茶番も終わる。元々代田が言い出したゲームだが、この勝負を持ち掛けたのは絶対に勝てるという打算があつたからだ。

そもそも30分以内に部員を見つけてくるという無理難題を課した段階で、始の抵抗は終わると思つていた。ミニゲームは、万が一始が新人部員を連れてきてしまった時の保険…新人部員は素人だろうから潰すのは容易く、始のシュートも絶対に止められる。そういう自信があつたからこそだ。

だが実際は、ものの5分と経たないうちに始は新人部員を連れてきた。しかもいざゲームをしてみれば、そいつは手練れのDF3人を容易く突破し、ゴール前まで迫ってきている。かなりピンチだ。

しかし、そんな危機が迫る状況でも、心のどこかで勝負を楽しんで

いる自分がいた。久しぶりにワクワクしている。嘗てのようにボールに触れられる高揚感。自分の中に湧き上がったこの感情に戸惑いながら、しっかりと出雲の動きを観察する。

出雲はゆっくりとドリブルしてくる。少しぎこちなく、テンポも速くなったり遅くなったり様々だ。ボールの方も、この頼りない主人に若干愛想を尽かしている節さえある。それでも侮めることは出来ない。どんな魔法を掛けてくるのか。気を抜くことが、出来ない。

始「決める、出雲オ!!」

出雲「行き…ます…!!」

少し躊躇っていたものの、遂に出雲がボールに向けて足を振りかぶった。左足を軸にし、振り上げた右足を勢い良く振り下ろす。代田が最も集中する瞬間。出雲の一蹴りでサッカー部の命運が決まる。彼の動きに、始が、代田が、他の部員が、果てはラグビー部までもが、目を奪われる…!!

そして。出雲の右足は、振り抜かれた。しかしボールは地面に陣取ったまま、動かない。

「何だ空振りかよ…」

「だっせー!!」

部員達のヤジが飛ぶ中、代田は一度気を緩めかけたが、再び構えた。

代田「(空振り? 違う…あれはキックフェイントだ。奴の攻撃はまだ続いているっ…!!)」

そう。出雲の右足は、確かにボールを蹴らなかった。しかし…今度

は軸足であった筈の左足が、間髪入れずボールを蹴り出した。

代田「（おい、嘘だろ？あんな素人みたいな奴がラボーナキックだと！？）」

出雲のラボーナキックにより蹴り出されたボールは、ゴールを奪うのに十分なパワーとスピードを備えて飛んでいく。代田の頭上へと飛ぶボールに追いつこうと、精一杯飛び上がる代田。

しかし後一步及ばず。ボールは代田の両腕をかいくぐり、砦を射抜かんとする。

代田「駄目か…！？」

だがそこで奇跡が起きた。

ゴールに嫌われたか、出雲のシュートはネットに突き刺さることなく…バーに当たって跳ね返った。

「コントロール無さ過ぎだろ…」

「惜しい！」

再び部員達のヤジが飛ぶ。

代田自身も、自分の予想を上回るシュートが外れたことに安堵し、僅かに口元を緩めた。しかし数秒後、その微笑は凍りつくこととなる。

代田「なん…だと？」

ラボーナキックも外れたシュートも、代田を騙すための伏線に過ぎず。全てはこの一瞬のため、ゴールをこじ開けるため…！

バーに当たって跳ね返ったボールの行く先に待機する出雲。空中に滞空した状態で、思い切りボレーシュートを放つ…

代田「何イ!?!」

代田も出雲のマジックに引き込まれてしまった。気を抜いてはならないと、代田自身が一番わかっていた筈なのに。先の3人同様、出雲の魔術には抗えなかった。ズブズブと、体が泥に埋まっていくような…そんな錯覚に陥る。足掻いても足掻いても、彼のマジックから逃れられない…!

今度こそ彼のシュートは、ゴールを捉えた。

無情なる一閃が、サイドネットを揺らす。そしてボールが地面に落下した瞬間、ホイッスルが鳴り響いた。

このサッカー部の命運を賭けたゲームは、出雲と始の勝利っ…!

始「よっしゃあ!?!」

歓喜の始、出雲に飛びついて喜びを分かち合う。

見ていた部員達も、出雲のスーパープレーの数々に心を打たれたらしく、歓声を上げている。

始「これでフットボールフェスティバルに出られるぜ!」

嬉しそうに走り回る始を見て、代田はがっくりと両膝をついた。砂埃で膝が汚れるのも構わず、ネットに収まったボールを見つめる。

代田「(あいつ…ボールが跳ね返る地点がわかってたみたいだ…)」

バーに当たって跳ね返ったボール。出雲はボールが跳ね返る前から、

その落下地点で構えていた。つまり最初のシュートが外れたのは偶然ではなく、初めから狙ってやったことなのだ。ラボーナキックでは代田に防がれると読んで、フェイントにフェイントを重ねた、ということらしい。

しかし、と代田は体を震わせる。

代田「あのラボーナキックの時点で、奴のシュートは俺の両腕をかいくぐっていた。下手な小細工をしなくても、奴にボールが渡った段階で俺の負けは決まっていたのか…」

自嘲気味に笑みを漏らす。

県下最強キーパーが聞いて呆れる。まさかこんな初心者にゴールを奪われるなんて。出雲が強いのか、俺が弱くなったのか…

暫くまともに部活もやっていなかったし、体が鈍ってしまったようだ。兎に角、情けないゲームだった。

しかも、戦う前に大見得を切った以上、約束通りフットボールフェスティバルとかいう大会に出ざるを得ない。戦友・『鳴神』も消えた今、試合をする意義もないのに。目指すべき高みも、ないのに。こんなに衰えた体でゴールを守るのも惨めなものだ。大会に参加しても早々と負けるのがオチだろう。

「なあ、代田よ。」

そんな彼に話し掛ける、副キャプテンの清村。

清村「あの出雲って奴がどんなに強かろうと…負けは負けだ。腹を括ろつぜ。」

代田「…わかってる。」

わかってはいるが…戦友のいない桜咲木で、試合に臨む価値があるのか。未だに答えが見つからない。

こんな寂れたサッカー部で…目指すべき世界は、あるのだろうか…

そんな代田の気持ちを察したかのように、清村は彼の肩をポンと叩いた。

清村「代田、俺達で叶えてやろうぜ。『あいつ』の夢を…」

代田「あいつの、夢…？」

その言葉に思いを馳せる。

2年前。代田や清村、『あいつ』が中学に入学したばかりのことだ。彼らが入学した時点で既に桜咲木中サッカー部は廃れてしまっており、フットボールフロンティアにも参加出来ない状態だった。幸い練習試合は他の学校よりも多くやっていて、部員が少なかったこともあって代田達3人はすぐにスタメンの座を勝ち取った。

『あいつ』はある日の練習試合の後、こう言ったのだ…

俺さ、いつの日かフットボールフロンティアに出たいんだ。

今は出場停止かもしれないけど…このサッカー部を立て直してさ。全国の頂点に立ちたいんだ。

日が暮れ始めた校庭で、真っ赤な夕焼けを背にした『あいつ』はそう語った。思えば『あいつ』ほど、サッカーを愛した少年を代田は知らなかった。

彼が無類のサッカー好きだったからこそ、代田も清村も、その熱意に心を打たれたのだ。彼がいたからこそ、公式試合に参加出来ない不自由なチームでも、みんな真面目に部活に取り組んできた。

全国制覇。今なら、その夢を叶えられるかもしれない。

『あいつ』が叶えられなかった、全国の頂点に立つという夢。嘗て桜咲木中サッカー部が目標としていた、その夢を。

代田「ああ…やってみるか。『あいつ』の　鳴神の夢を叶えるために…」

始「ほ、本当ツスカ！？やったああ！！！」

喜び駆け回る始。

「（それに…）」

出雲と対峙した瞬間。

代田の中で、『何か』を感じた。キーパーとして、相手と向き合った時の高揚感、緊張感。体中の血液がざわめきだすような、心地良い緊迫感を感じた。出雲にサッカーの醍醐味を思い起こさせられたのも、運命かもしれない。

遂に代田、決断する。

1024チームが頂点を目指して戦う国内最大級の宴・フットボールフェスティバルへの参戦を。桜咲木中サッカー部、再始動…！

謎の転校生・出雲　天馬のマジックが、代田の心を揺さぶる。封印されたサッカーへの情熱を呼び覚ます。

天馬自身にとっても、代田を中心とする桜咲木イレブンにとっても…

忘れられない物語が、幕を開ける。

第5話 五郎の過去

静岡にて、出雲 天馬の物語が始まったのと同じ頃。雷門中では円堂達が練習に明け暮れていた。

- 雷門中 -

「半田さん！」

少林の高い声が響き、蹴り上げられたボールがピッチを横切る。フィールドの左サイドに陣取り、ボールをトラップした半田は向かってくる穴戸を交わして前線にクロスを上げた。

半田「染岡！」

染岡「おうよ！」

まるで半田からパスが来るのを予期していたかのような、絶妙なタイミングで……

東を押しつけ、飛び上がる。

染岡「行くぜ円堂……真・ドラゴンクラッシュ……！！」

空中で右足を振りかぶると、染岡の足の動きに合わせて蒼竜が唸り声を上げた。

凜猛な竜は蹴り出されたボールに纏わりつき、円堂に襲い掛かる。スピード感溢れるシュートが空を切り裂く。

ボールをトラップせずにダイレクトで蹴った分、威力は増している。既にエイリア学園との戦いの中で『ワイバーンクラッシュ』なる新

必殺シュートを会得していた染岡だが、彼の初の必殺技であるこの技を、この1ヶ月でレベルアップさせていたのだ。

円堂「うおおおっ…！」

右手を額の前に翳し、体を落とす円堂。すると彼の体中を眩い氣が旋回していき、円堂の左胸…即ち心臓へと集まっていく。徐々に光は大きくなり、やがては円堂全体を包み込む、巨大な塊へと変わっていった。

円堂「『マジン・ザ・ハンド改』…！」

眩い輝きの中で、右手を前に突き出すと、黄金の魔神が具現化された。

厳格かつ荘厳な風格を持つマジンの掌が、染岡の必殺シュートを受け止める。

蒼竜のオーラが消え、ボールの回転力が無くなった時、円堂と染岡の勝負の決着はついていた。

染岡「フン…やるじゃねえか、円堂！」

円堂「へへっ、まあな！」

笑いながらボールを前線に放り投げる。それをキープするのは風丸。迫り来る影野や壁山を交わしながら、丁寧にボールを繋いでいく。今、雷門が行っているのは鬼道が帝国時代にやっていたというオーソドックスな実践練習だ。

キーパーは1人。片方が攻撃を仕掛け、もう片方はそれをひたすら防ぐ。

一定の制限時間を決めて、その時間内でゴールを守りきればディフェンス側の勝ち。点を決めればオフェンス側の勝ちという訳である。

ディフェンス側は目指すべき相手ゴールが無い分、如何にしてオフ
フェンス側にボールを渡さないように出来るか、そのことだけに集中
出来る。

またオフフェンス側は、守るべき味方ゴールが無い分、如何にして厚
いディフェンスを突破して得点を決めるか…それだけに専念出来る。
オフフェンスとディフェンス。両方に適した練習といえよう。

何しろその練習のおかげで、鬼道を始とする帝国イレブンは、攻守
のバランスが取れたチームへと成長出来たのだから。

また、今は主要メンバーが抜けて選手層が薄くなってきている。適
度にオフフェンスとディフェンスを交換することで、どのポジション
にも対応出来るようになっていた。

「染岡さん！」

栗松から放たれたボール。雷門の点取り屋としてゴールを決めよう
と構える染岡だが、突然真横から飛び出した小柄な影が、彼へのパ
スをインターセプトしてしまった。

雷門サッカー部新メンバーの1人・多摩野 五郎である。

栗松「おお！五郎もやるでヤンスね！」

五郎「う、うん…」

小さな体を懸命に動かしてのドリブル。同じく小柄な少林が立ちふ
さがり、スライディングを繰り返すが…これも軽く交わして、ボ
ールを風丸に回した。

おお、と周りから歓声上がる。

かなり慣れた動きだ。

まだ聞いていなかったが、サッカー経験者なのだろうか？

ゴールから見えていた円堂が首を捻る。

円堂を筆頭に、一同は五郎のスキルの高さに感嘆するばかりだったが、1人だけ…皆と違う感想を抱いた者がいた。

染岡 竜吾だ。

彼は五郎のプレーをじっと見詰め、遠い記憶に思いを馳せるように目を細めた。

「（あいつ…どこかで会ったことがあるな…）」

同じ中学校なのだから、授業の合間に校舎内のどこかで会うことは何度かあったが…それだけではない気がする。もっと前…どこか別の場所で、会っている。

「ほお…中々面白い練習をやってるじゃないか。」

聞き覚えのある声を聞いて、円堂達がそちらを振り向くと、雷雷軒の店主兼雷門サッカー部の監督である響木 正剛の姿があった。

円堂「響木監督！」

響木は小さく片手を上げると、ゆっくりとした足取りでグラウンドの方へ近づいてきた。円堂達も練習を一旦中断して、響木の下へ集合する。

木野「お店の方は留守にして平気なんですか？」

響木「ああ。少しばかり留守にしたって構わんさ。どうせいつも閑古鳥が鳴いてるからな。それに、今日は…」

そこまで言って一度言葉を切ると、響木は校門の方を見やった。

響木「おい、いつまでもそんな所にいないで、こっちに来て挨拶しろ。」

「…はい。響木さん。」

響木に促され、校門の脇にある回復ポイントの陰から、1人の少年が姿を現した。紫色のリーゼントが特徴的で、目つきが悪い。見るからに不良タイプの男だ。彼は円堂達の視線を浴びながら、ポケットに手を突っ込んだ尊大ぶった態度で歩いてきた。

彼が近づいて来るにつれ、目を凝らしていた半田の顔が徐々に引きつる。

特徴的な紫リーゼントを見た時、以前会ったことのある顔だと思っていたが、円堂達の前に立った瞬間…その疑惑は確信に変わった。

半田「げっ！あの時のリーゼント…！」

以前週番の仕事を終えた半田が、部活に行く途中で出会った不良だ。まさかこいつがサッカー部に入るなんて…

響木「お前達の中には知っている者もいると思うが…転校生の飛鷹征矢（とびたか せいや）だ。こいつも雷門サッカー部の一員として、フットボールフェスティバルに参加することになった。仲良くしてやってくれ。」

円堂「はい！よろしくな、飛鷹！」

あっさり飛鷹の入部を歓迎した円堂が、彼に右手を差し出す。飛鷹は差し出された手をじっと見詰めていたが、その右手を握り締めることなく視線を反らした。

飛鷹「…よろしくお願いします。」

それだけ言うと、飛鷹は学ランの内ポケットから櫛を取り出し、丁寧にリーゼントを整え始めた。

マックス「なーんか取っ付きにくいヤツだね。」

両手を頭の後ろで組んで、マックスがつまらなそうに言う。

少し重くなった空気を取っ払うように、円堂が両手を叩いて練習の再開を促す。

キャプテンの指示を受け、再び雷門イレブンがピッチに散った。

活気溢れるグラウンドをじっと見詰める飛鷹に、響木が優しく語り掛ける。

響木「飛鷹。お前のその足は、きっとあいつらを助ける力になる。

円堂達に、力を貸してやってくれ。」

飛鷹「わかっています。漸く俺が見つけた、本気で打ち込めるスポーツかもしれないから…。」

2人の会話を聞きながら、ベンチに座っていた音無は首を捻った。

音無「（響木監督はどうして飛鷹さんと知り合ったんだろう…？）」

例え飛鷹が転校生で、雷門中の生徒だったとしても、教師でもない響木が知り合うことが出来るとは考えにくい。とすると、学校の外で知り合ったのだろうか。

* * *

円堂「よし、今日の練習はここまでだ！」

栗松「ひい…中々疲れたでヤンス…」

タオルを首に掛けた栗松が、がつくりと膝をついた。

新入り2人も、入って間もないというのにいきなりハードな練習に参加して、すっかり息が上がってしまったようだ。

大谷から手渡されたドリンクを飲みながら、東がグラウンド脇の芝の上に横たわった。

東「結構疲れるな、サッカーって…」

今まで帰宅部だった東には少しきつ過ぎたか。

だが、フットボールフェスティバルに参加する以上、少々ハードな練習になるのは致し方ない。何しろチームの要となる選手が消えているのだ。東や五郎、飛鷹がどのポジションに入るかはわからないが、少しでも皆のレベルに追い付いてもらわなければならない。

壁山「そんじゃ、さよならッス〜！」

練習を終え、早々に着替えを済ませた壁山と栗松が部室を出て行った。帰りに商店街の方で遊んでいくらしい。

他のメンバーも三々五々家路につき、残ったのは円堂をはじめ僅か数名になった。

円堂「染岡。ちょっと河川敷に行かないか？」

染岡「ん？…ああ、ガキ共と一緒に練習するって訳だな。良いぜ。」

円堂がモタモタしているうちに、みんな帰ってしまった。本当は他の連中とも一緒に練習したかったのだが…

グラウンドは午後からラグビー部が使うことになっている。サッカー部だけがあまり長々とグラウンドを使うことは出来ない。

練習し足りない時は河川敷で小学生達と一緒にボールを追い掛けているのだ。

だが、染岡と円堂2人だけというのは寂しい。円堂が部室の隅でサッカー雑誌を読んでいた五郎にも声を掛けた。

円堂「五郎、お前も一緒に行かないか？」

五郎「え？僕はやめておきます…」

染岡「いや、お前も来いよ。ちょっと話もあるしな。」

断ろうとした五郎だが、先輩に言われては行かざるをえない。仕方なく、円堂や染岡に従った。

- 河川敷 -

円堂「お、やってるやってる！おーい、まこ！竜介！ー」

早速ボールと戯れる小学生達を見つけた円堂が、手を振りながら土手を駆け下りていく。

染岡「へっ、相変わらずサッカーのことになると目の色が変わるな。」

五郎「本当にサッカーが好きなんですな…」

相槌を入れる五郎に一瞥をくれた後、染岡は話を切り出した。

染岡「五郎。お前、俺と前に会っただろ？」

五郎「え？いつですか？」

染岡「2年前、新宿の運動公園でやった桜庭カップのトーナメントの時だ。お前、時雨坂SCのMFだったよな。」

ギクツと体を震わせる五郎。その顔は心無しか固く強張っている。

2年前：即ち、染岡が小学6年生、五郎が5年生だった時のことだ。染岡は小学生の頃からサッカーをやっていたが、彼の小学校時代最後の大会が、その桜庭カップだった。

染岡「俺もあの時大会に出てたんだよ。稲妻キッカーズのFWとしてな。まあ三回戦で負けちゃったけど。」

照れくさそうに頬を掻く染岡。

彼の言葉に、五郎はハツとしたように染岡を見上げた。稲妻キッカーズという名前に、聞き覚えがあったからだ。五郎の所属する時雨坂SCとは同じブロックに入っていた。もしお互い勝ち進めばAブロックの準決勝で当たる相手だった。

五郎「そうです…染岡さんの言う通り、僕は小学生の時、時雨坂SCでサッカーやってました。」

染岡「やっぱりな…経験者だもんな、通りで上手い筈だぜ。けど、何で黙ってたんだ？隠すようなことじゃねえだろ。」

サッカーをやっていたことは認めたが、問い詰めても五郎はそれ以上のことは語らなかつた。土手の下で起こっている歓声とは裏腹に、土手の上の2人は奇妙な沈黙の空間に支配されていた。

染岡「…まあ、話したくなかつたら話さなくて良いけどよ。せっかく来たんだから、あいつらに混じって俺達もやろっぜ。」

何も語らない五郎に優しく言い、染岡が先に土手を降り始めた。

五郎「あの…」

そんな彼の背中に、五郎の声が被さる。

染岡は足を止めて、彼の方へ向き直った。

染岡「なんだ。」

五郎「…いえ、やっぱり何でもありません。」

何か言いかけた五郎だが、言葉をぐつと飲み込んでしまった。そして話を変えるようにバッグからスパイクを取り出すと、染岡を追い越して一目散に駆け下りて行った。

まこ「行くよ、円堂ちゃん！」

如月 まこをキャプテンとする稲妻KFCの面々が、円堂に向かってシュートを放っている。

小学生で、しかも女子とは思えない力強いキック力を武器とするまこのシュートは、受け止めた円堂の掌を痺れさせる程の威力を有していた。

円堂「良いシュートだ、まこ！」

まこ「まあね。普通のシュートで円堂ちゃんを圧せるなんて、あたしのキック力もなかなかのもんでしょ？」

自慢気に胸を張るまこ。女子ながらもこの界限ではガキ大将的存在である彼女は、円堂も唸らせる程の高い実力を持っている。実は、2年前の桜庭カップで優勝したのは稲妻KFCであり、決勝点を決

めたのはこの女キャプテンである。

その小学生離れしたキック力は小学サッカー界ではちょっとした話題の種であり、若干11歳にして将来を有望視されているという…実は案外凄い少女なのだ。

尤も、昨年の大会では決勝で敗れてしまい、準優勝に終わったのだが。

王者の座は南東京で猛威を奮う五ツ葉KSCなるチームに奪われ、大会得点王の栄誉も五ツ葉KSCのFW『宇都宮 虎丸』にとつて代わられてしまった。

以来、まこよりもその宇都宮 虎丸の方が注目されるようになった。だから今年こそはリベンジを果たさんと、まこをはじめ稲妻KFCの面々は意気込んでいるのだ。

染岡「おい円堂。俺達も混ぜてくれよ。」

円堂「遅いぞ2人共。よし、染岡と五郎も入れて、みんなで試合だ！」

言うが早いか、円堂が前線にボールを放り投げる。

小さな体でそれをトラップし、間 竜介がゴール前に走り込む。素早く詰める、寺坂と北垣。

寺坂「すすませないぞ！」

竜介「へん！行けっ、染岡あー！」

キックする…と見せかけて、ボールを足の甲に乗せ、フワッと蹴り上げる。

虚を突かれた北垣の向こうに、染岡が構えている。

染岡「お、生意気にキックフェイントか。」

呼び捨てにされたことは敢えてスルーし、もう1人の『竜』から託されたボールに蹴りを叩き込む。

大翔「まけないぞ！『プレッシャーパンチ』！！」

気合いを入れ直すかのように頭に被った鍋をぐっと被り直し、大地を蹴って飛び上がる。

上空から落下することで威力の増したパンチングが、ボールの勢いを殺してしまった。

大翔「やった、とめたぞ！」

染岡「お前、中々やるじゃねえか。」

竜介「『やるじゃねえか』じゃないよ、染岡あ。稲妻KFCの点取り屋が折角あげたチャンスボールなのに……」

染岡「悪い悪い。次は決めるさ……！」

何だかんだで染岡も結構楽しんでいる。小学生達の戦意を削がないよう、適度に手加減をしつつ、土壇場では本気を見せて突破する。我が強く短絡的なプレーが多かった男だが、これまでの激戦で他人を気遣う余裕が生まれたようだ。

海人「ねえ、こっちのお兄ちゃんも凄いよ！」

センターサークル近辺でどよめきが起こっている。

五郎だ。ボールを器用にリフティングしながら、KFCの選手達を近づかせない。なんと、あのまこをも手玉に取っているのだ。

染岡「（これだけの实力を持つ奴が、なんでサッカーから遠ざかっていったんだ……？）」

五郎は今年入学したばかりで、転校してきた訳ではない。サッカー部に入らずつと帰宅部だったらしい。つまり、中学校に入学してから約半年間サッカーから離れていたことになる。一体何故…

その答えは、橋の上を通りかかった2人の少年が教えてくれた。

「お、アレ五郎ちゃんじゃね？」

「あー！それっぽいな。」

橋のガードレールに身を預け、五郎を見てニヤニヤと嘲笑する2人組。やがて2人は土手を降りていき、グラウンドの円堂達の所へ歩いて来た。

「よお、五郎ちゃん。ガキ相手に球蹴りか？」

突然現れた乱入者に、皆の動きが止まる。

円堂「なんだ？お前達は。」

不安げに顔を見合わせる小学生達を安心させようと、円堂が2人の前にずいと進み出た。

「んー？俺らは五郎クンの『元』チームメイトツスよ。ね、五郎クン。」

2人組の片方、水色髪の少年が、にこやかに笑いかけた。五郎は気まずそうに目を伏せたまま、彼らと目を合わせようともしない。

五郎「し、汐崎君、今田君…」

汐崎「名前覚えててくれたんだね！嬉しいなあ…『駄目五郎』クンのことだから、てっきりもう忘れちゃったと思ってたけど。」

快活に笑いながら、水色髪：汐崎 怜央（しおざき れお）が五郎を見下ろす。身長が高く、俗に言う『イケメン』に分類される彼は、汚い物を見るような蔑んだ視線を五郎に浴びせかけた。

汐崎「それにしても、またサッカー始めたみたいだね。やめた方が良くないかな。キミってダメダメ君だし。とてもじゃないけど中学サッカーにはついていけないよ。」

円堂「さっきから好き勝手言ってるけど、五郎はダメダメ君なんかじゃないぞ！こいつのプレーは凄いな！俺達の仲間を馬鹿にするな！」

汐崎を睨みつける円堂。

染岡も同調するように汐崎らに近づくと、握り拳の関節をボキボキと鳴らした。

汐崎「買い被り過ぎッスよ。こいつ、練習じゃまともなプレーが出来ても、試合だと実力が発揮出来ない臆病者ッスから。」

そう、五郎は本番に弱い。

そのために練習では出来たプレーが、試合では出来ない。パスミス、トラップミス、空振り…ミスミスミス、失敗のオンパレードだ。

付いた渾名が『駄目五郎』。最初は『たまごろう』と呼ばれていたのだが、やがてあまりにミスを繰り返すのでとうとう『駄目五郎』と呼ばれるようになった、という訳である。

そして、チームメイトからいじめを受けるようになり、とうとう練習に参加出来なくなった彼は逃げるように時雨坂SCを辞め、今ま

でサッカーから離れていたのだ。

それを得意気に暴露する汐崎。五郎は恥ずかしさと悔しさで顔を紅潮させ、俯いていた。

染岡「てめえ、いい加減にしろよ！」

五郎のスパイクに画鋏が仕込まれた事件を語り始めたところで、遂にキレた染岡が汐崎の胸倉を掴んだ。

汐崎「あれ？良いんですかねえ…かの有名な雷門サッカー部の部員が、何の罪もない一般市民に手を上げちゃって。部の不祥事は学校の不祥事。これ、中学校の常識ツスよね。」

染岡「ぐっ…」

悔しいが、汐崎の言っていることは正しい。

答えに詰まった染岡が掴んでいた襟を離すと、わざとらしく頸元をさすってみせた。

汐崎「駄目五郎くん、キミ弱いんだからさ…俺らみたいに帰宅部選んどきゃ良いんだよ。部活なんてかつたるいし。」

五郎は言い返せない。忘れたい過去を、隠したい過去を明かされて、悔しさを滲ませている。その様子がおかしいのか、汐崎は更にネチネチと嫌味を吐き続けた。

円堂「やめろ。これ以上五郎を馬鹿にしないでくれ。練習の邪魔だ。」

静かに、熱く…円堂が怒る。ボールを地面に置いて、何時になく真

剣な表情で汐崎を睨みつけている。

染岡以上に凄みの効いたその眼差しに恐れを成した汐崎は、小さく舌打ちをするともう1人…今田を連れて退散した。

第6話 五郎&染岡、新たな必殺技

肩を震わせる後輩に触れようとして。染岡は一瞬躊躇った。プライドを傷つけられた五郎の気持ちだが、分かる気がしたから。

それまで伸び伸びとプレーしていたのに、忘れたい過去を暴露されて…聞いている染岡まで不快になったのだから、言われた当人は相当傷ついたに違いない。

円堂「五郎…」

五郎「先輩、僕もう帰ります。さようなら。」

俯き気味に、円堂やまこ達とは目を合わせようとせず、五郎は円堂が二の句を継ぐ前にその場を立ち去ろうとした。

「待てよ。」

逃げるように足早になった五郎を呼び止める、声。

声の主は、染岡だ。

五郎がビックリして彼を見上げると、染岡は怒りと悲しみの入り混じったような表情を浮かべていた。

染岡「お前、あんなこと言われて悔しくないのかよ。」

五郎「それは…悔しいけど…」

染岡「なら逃げるな。お前を馬鹿にしたあいつらを見返すくらいの力を、つけてみる。」

五郎「そんなこと言ったって…」

口ごもる五郎。早くこの場を立ち去りたい、そんな風に思っていることだろう。

だが、染岡はそれを許さない。五郎の實力は本物だと、知っているから。メンタルの弱さを克服すれば、五郎は化ける。この少ない人数でフットボールフェスティバルを勝ち抜くにあたり、雷門を勝利に導くキーパーソンになる。そんな彼に、こんなところで朽ちて欲しくはなかった。

「染岡君の言う通りだな。」

五郎や染岡、円堂達の後ろから、今の重苦しい雰囲気には似つかわしくない、のんびりとした声が聞こえてきた。びっくりした一同が振り返ると、そこには小豆色のジャージを着た、如何にも温厚そうな中年男性が立っている。

まこ「会田のおじちゃん！」

驚嘆するまこ。何時の間にか現れた男性に、目を丸くする。この男こそ、稲妻KFCの監督にして…雷門サッカー部の伝説の11人・『イナズマイレブン』のDF。名を会田 力（あいだ ちから）という。

今はすっかり当時の面影はなく、自身も腰を痛めているのでサッカーをすることは出来ないが、その観察眼は雷門OB随一のものを持っている。彼の采配のおかげで、稲妻KFCは常勝チームへと成長出来たのだった。

会田「五郎君…といったな。」

五郎「は、はい…」

会田「君、ポジションは何処だね？」

五郎「MF…だけどフィールドプレイヤーだったら何処でも出来ません。」

会田「属性は？」

五郎「か、雷属性です…」

雷属性。エイリア学園事件の最中に発見された、2つの新属性の一つだ。林、風属性に強く、山、火属性に弱い。雷門では現在、半田と五郎が雷属性、影野とシャドウがもう一つの新属性である陰属性であることが確認されている。

会田「必殺技は何を覚えている？」

五郎「ブロック技の『後ろの正面』だけです…」

ふむ、と会田は真ん丸い顎に手をやり、弛んだ皮膚をいじっていたが、ふと思いついたように五郎の目を見つめ、こう切り出した。

会田「五郎君：必殺シュートを覚えてみないか？」

五郎「え？」

突然の誘いに、困惑を隠せない。面食らった五郎に対して、会田はニコニコしながら続けた。

会田「さつき君のプレーを見たが、中々突破力があるようだし、シュート技の一つくらい覚えていても良かろうと思っただけ。おまけに雷属性の君とは属性一致でSBが可能だ。DFとして試合に出ても使うことが出来る、結構実用的な技なんだが…どうだね？」

結構どころか、実用的過ぎる。

それが染岡の、正直な感想だった。自分の属性と技の属性が一致しているというだけでそれなりに安心感はあるし、SBが可能であれば円堂の負担を減らすことも出来る。

チラリと五郎を窺うと、彼もその必殺シュートを習得すべきか否か

迷っているようだった。

しかし、染岡が口を挟むべき問題ではない。必殺技を使えるようになるかどうかは、本人が自力で解決しなくてはならない試練だ。

心の葛藤を乗り越え、厳しい鍛錬を積んで会得した必殺技ほど、愛着が湧くものである。

かくいう染岡自身も、豪炎寺を超えたい一心でひたすらボールを蹴り続け、会田の助言により必殺シュートを完成させた思い出があるのだから。

迷う五郎。だが、やがて意を決したように唇を真一文字に結ぶと、会田に向かって頭を下げた。

五郎「お願いします。僕にその必殺シュートを教えてください！」

会田「うむ。では早速始めよう。」

円堂「俺も協力するぜ、五郎！」

張り切ってゴール前に立つ円堂。

会田は折りたたみ式の椅子を持って来ると、ピッチの隅にそれを置いて座った。

会田「よし、まずは思い切りボールを蹴ってみなさい。」

五郎「はい！」

少し後ろに下がって助走をつけ、ボールを蹴り飛ばす。勢いのついたボールは回転しながら円堂に向かって飛んで行った。

円堂「うおおお！」

真正面からボールを捉え、受け止める。五郎のシュートをまともに受けるのは初めてだったが、彼はまこ程では無いにしろ、中々のキ

ツク力を持っていた。

会田「ボールを蹴る時に、もう少し体を捻ってみなさい。」
五郎「はい！」

先程の沈んだ顔は何処へ行ったのか、五郎は今までに見せたことがなくらい真剣な表情で返事をした。

染岡の言葉に感化され、会田の教えをひたむきに守り。自分をバカにした連中を見返すために。

会田の指示は次第に細かくなっていった。体の振りを早く。軸足はしっかり踏ん張って。ボールの中心を正確に捉える。腰をもっと捻れ。注文が多いが、それらを一つ一つクリアしていくうちに、五郎は自分の力が上がっていくような心地良さを感じた。

そして、練習を始めてから一時間が経過した。

五郎「ハア…ハア…」

会田「五郎君よ。君がチームメイトに馬鹿にされていたのは、君の心の弱さが原因じゃないかね？」

五郎「う…」

会田「君の実力は、染岡君達と言う様に本物だ。自分を信じて、ボールに自らの魂を込めなさい。体中から溢れ出る気をボールに注ぎ込んだ時、君の必殺シュートは完成する…！」

会田の言葉が五郎の胸を打つ。魂を込めて。氣を注ぎ込むのだ、ボールに。自分を信じて…自分の力を信じて…！

五郎「うおおお…！」

気が小さく、常におどおどしていた彼からは想像出来ないような気合いが、五郎の口から漏れた。そしてその小さな体から発せられた気が、五郎と同じく小さくて黒い生き物を具現化する。

その生き物は、最初は形が無くうねうねと蠢めいていたが、やがて背中に鋭いギザギザを生やし、真ん丸い2つの目を形作り、金色に光るイナズマ型の髭を伸ばして甲高い唸り声を上げた。

円堂「これは…」

染岡「俺と同じ…竜だと!?!」

そう。五郎が作り出したその生き物は、染岡と同じ竜。ただ染岡のそれと違うのは、五郎の竜は体色が漆黒であることと、使用者本人と同じく小さめで、愛嬌のある顔をしているところだろう。

五郎「これが僕の…必殺シュートだああ!!」

体を捻り、軸である左足を踏ん張って、右足を振り下ろす。ボールを蹴り出すと同時に黒竜がウインクして飛び出していく。黒竜を纏ったシュートは帯電しながらゴールに向かう。

円堂「ぐあああっ!!」

両手を添えてしっかりと受け止めたかに見えたが、ボールの勢いは止まることを知らない。円堂の掌を離れてゴールネットに突き刺さった。

ズン、という重い音がして、円堂が気がついた時には、ボールはネットに収まって回転していた。

円堂「す…凄えや五郎!完成したんだな、お前だけの必殺シュートが!」

五郎「やった…やりましたよ円堂先輩、染岡さんも！」

会田「今のが、ワシが授けた必殺技…その名も『コロドラシユート』だ！」

五郎「『コロドラシユート』か…」

染岡「へっ、お前にピッタリの技じゃねえか。俺も負けちゃいられねえな…」

会田「よし…五郎君。今の感覚を忘れないうちにもう一度だ！」

五郎「はい！」

* * *

その後も日が暮れるまで特訓は続いた。五郎はすぐにシユートの感覚を覚えたらしく、『コロドラシユート』は最早すぐにも試合で使うことが出来るくらい、体に馴染んでいた。

稲妻KFCも彼の努力に感化され、親が迎えに来るまで3人の中学生と夢中でボールを追い掛け続けた。

やがてチーム1の甘えん坊・寺坂 響が母親に手を引かれて帰って行ったのを皮切りに、1人、また1人とピッチから姿を消していった。

まこ「会田のおじちゃん、お兄ちゃん達、じゃーねー！」

小脇にボールを抱え、顔中泥だらけのまこが手を振っている。円堂らが手を振り返すと彼女は夕日に照らされながら商店街の方面へ姿を消した。

まこがいなくなると、後には円堂達3人と会田が残った。

会田「それじゃあ、そろそろワシも帰るとするか。」

五郎「じゃあ僕も。」

会田、五郎もそれぞれ家路に着いた。円堂も、タイヤで特訓するために鉄塔へと向かう。これで、残りは染岡だけになった。彼は帰宅しようと思わず、目の前に転がったサッカーボールをじっと見つめている。

染岡「『コロドラシュート』、か…」

まさか五郎までもが、必殺シュートを習得するとは。

しかもその威力は、染岡の『ドラゴンクラッシュ』を越えている。

染岡の中で、何かが沸々と湧き上がっていく。

豪炎寺、吹雪のいない今。雷門のエースストライカーはこの俺だ。

その地位は、守らなければならない。

俺も五郎のように、新たな必殺シュートを使えるようにならなければ…

染岡「うおりゃああ!!」

五郎の必殺シュートを見てから、足の疼きが止まらない。彼に影響されたためか、自分もボールを蹴りたくてたまらなくなったのだ。

彼によって蹴り出されたボールは、空を切り裂きながら飛んでいく。だがそれはゴールに突き刺さることなく、バーに当たって弾かれた。

染岡「くそ…もう一度だ!」

再び足に力を込め、ボールを蹴り飛ばす。今度はもつとコースを外れ、ゴールに掠りもしないで原っぱに落ちた。

染岡「くそ…くそっ…!!」

『ドラゴンクラッシュ』に『ワイバーンクラッシュ』…これらの技を強化するだけではダメだ。もっと強い技を覚えなければ。

彼はひたすら、ボールを蹴り続けた…

* * *

その頃。

稲妻町の隣にある中学校では、サッカー部が紅白戦を行っていた。

「ほら、DFライン上げろ！」

「戻りを早く！」

「そいつのマークを外すなよ、フリーにしたら終わりだぞ！」

陰険な雰囲気の中学校だが、見た目とは裏腹に結構活気がある。

キャプテンマークを腕に巻いた少年が、ピッチの外から仲間には指示を出している。顔に一つ目の書かれたバンダナを巻いており、目隠しのようにになっているが、ピッチ上のゲーム展開は見えているようだ。

「幽谷さん、ちょっと良いですか？」

マネージャーと思しき、顔中に包帯を巻いた女子が、キャプテンに話し掛ける。幽谷と呼ばれたキャプテンは振り向くと、彼女が持っていた封筒に目をやった。

幽谷「ああ麻美か。なんだこれは？」

「雷門中学からの練習試合のお誘いです。さつき地木流監督が、キ

ヤプテンに渡すようにと…」

幽谷「雷門だと？」

幽谷は封筒を受け取ると、表に書かれた名前を読んだ。差出人は確かに雷門中だ。『尾刈斗中サッカー部様』と書かれている。

そう…ここは都立尾刈斗中学校。都内でも1、2を争うおどろおどろしい学校だ。生徒もどちらかといえば色白で、がり勉ばかりが揃った都立印照中とはまた違った意味で運動が苦手な生徒が多い。事実、毎年全国で行われる体力テストでは、都内の中学校の中でビリから2番目の成績を誇っている。(因みにビリは秋葉名戸学園)。運動部も弱小ばかりだが、サッカー部に関しては例外だ。毎年のフットボールフロンティアでは、地区予選止まりであるものの上位の成績を修めている。

また、近々開催されるフットボールフェスティバルの参加も決まっている。

今日はそのフットボールフェスティバルに向けて、1日練習を組んでいたのだ。

幽谷「雷門か…」

「どうします？練習試合の誘いを受けるか否かは、キャプテンにお任せすると監督は言っていましたか…」

尾刈斗中サッカー部マネージャーの麻美 伊井子(まみ いいこ)が指示を仰ぐ。

同じ1年生なのに、彼女は誰に対しても敬語で話す。

顔に巻きつけた包帯はその控え目な性格の表れなのだろうか。

包帯を外せば案外美人だろうなあ…などと思考が脱線していると、麻美がきつい視線を飛ばしてきた。早く決めろ、と言いたいらしい。

幽谷「よし、やるか。」

フットボールフロンティア全国大会で優勝した雷門なら、相手にとつて不足なしだ。何より、彼らにはフットボールフロンティア開催前にも一度負けている。

負けっぱなしでは悔しい。リベンジするには丁度良い機会である。

麻美「わかりました、では監督に伝えてきます。」

ペこりとお辞儀して、マネージャーが校舎の中に消えた。

残った幽谷は選手達を集合させると、雷門中との練習試合の旨を伝えた。

「えー、やだよ雷門と練習試合なんて…」

早速ブーイングが起こった。口を尖らせて練習試合を拒否しているのは柳田 しげる。彼と比較的仲の良い靈幻 道久も同調する。

幽谷「そ、そんな…」

大会に向けてやる気満々の仲間達だから、案外素直に承知してくれると思っただが、そう簡単にはいかないらしい。

柳田と靈幻の反対意見にたじたじの幽谷。1年生故にこんな時どうしたら良いのか皆目見当もつかない。

「うるせえな。そんなに出たくねーなら、てめえらは家でイナズマでもやってな。」

あまりうるさいので、それまで沈黙を守ってきた2年生部員の木乃伊 魔美が声を荒げた。普段は無口で、あまり喋らない彼だが、こ

の時ばかりは一部のチームメイトのやる気の無さに、遂にキレたよ
うだ。

霊幻「何熱くなってるんだよ木乃伊…」

凄みを利かせる包帯男に驚きつつも、木乃伊と同じクラスの霊幻が
反論を試みた。

木乃伊「黙れクズブタ。相手が雷門だからってビビってんじゃねえ
よ。何も化け物を相手にする訳でもねーだろうに。」

霊幻「うっ…」

木乃伊「柳田、てめえもだ。皆が一丸となって頑張ろうって時に、
つまんねえブーイングで水を差すんじゃねえ。」

柳田「すみません…」

部員達を一喝した木乃伊は、再び口を閉じるとグラウンドの隅っこ
にある木にもたれかかって腕を組んだ。

シーンとなった空気を変えようと、三途が幽谷に話題を振った。

三途「それで？いつ練習試合をやるんだい？」

幽谷「今週の土曜日。場所は雷門中。9時にキックオフだから遅く
とも8時半には向こうでアップをしないと…」

三途「ふーん…」

納得したように頷くと、額に付けた三角形の布を縛り直し始めた。

幽谷「今度の練習試合はフットボールフェスティバルの前哨戦だ。
大会で使う戦術を積極的に試していくから、そのつもりで頼む。」

「へーい。」と月村 憲一が手を上げる。

彼の隣では武羅度 牙がトマトジュースを飲んでいた。

戦術、メンバー、必殺技…何もかもが新しくなった新生尾刈斗中。それを率いていくという責任感に、重圧に…押し潰されそうになりながら、幽谷は腕に巻かれたキャプテンマークを握り締めた。

待ってる、雷門。

お前達を倒し、フットボールフェスティバルに参加する自信をつけるんだ。

確かにまだまだ成長途上だし、1年生の自分は、キャプテンとして部を率いるには頼りないかもしれないが…それでも勝つ。雷門に。そして、全国の頂点を目指す。

幽谷「(待ってる雷門…)」

* * *

夕日も沈み、辺りは闇に包まれ始めた。街灯に光が灯り、街は夜の漆黒を受け入れつつある。

河川敷には、もう子供達の姿はない。散歩する老人や、家路を急ぐ部活帰りの少年の姿もない。時折橋の上を、車が通るだけである。そんな夜の静寂を打ち破る轟音が、河川敷一帯に響き渡った。

大地を抉り、ゴールネットに突き刺さるサッカーボール。シュートの際に起こる炸裂音と共に、ドラゴンの唸り声も聞こえる。それは、『ドラゴンクラッシュ』の蒼竜のもでも、『ワイバーンクラッシュ』の飛竜のもでもなかった。

染岡「うおおおっ！！」

力一杯蹴り出したボールが、またしてもネットを揺らす。何度目だろうか。今日だけでも何十…いや何百とボールを蹴った気がする。無論疲労感はあるが、それを上回る達成感が、染岡を支配していた。

染岡「やった…遂に編み出したぞ、俺の新必殺シュートを！！」

感極まり、大地に両膝をついて雄叫びを上げる。

遂に身につけたのだ…染岡の、新たな力…！

まだ耳に残っている。新たな竜の産声…その勝ち鬨の雄叫びが…

- 鉄塔広場 -

円堂「そうか…連絡ありがとな、夏未。」

タイヤで特訓をすと言つて鉄塔広場に來ていた円堂は、ベンチに座つて携帯電話を耳に当てていた。

電話の相手は、マネージャーの雷門 夏未。頼んでおいた練習試合の申し込みが、相手から承認されたという内容の電話だった。

練習試合を申し込んだ相手は、尾刈斗中。フットボールフロンティアが始まる前に、練習試合を行った学校だ。あの時も夏未が試合を申し込んでくれた。今と違うのは、雷門サッカー部を廃部にするために練習試合を組んだということだ。

本来ならば帝国学園との試合に負けて、雷門サッカー部は廃部になるはずだった。だが伝説のストライカー豪炎寺の乱入というハプニングにより、帝国学園は試合を放棄。雷門の逆転勝利という結末に終わった。

勝ったといえば勝ったが、それは雷門の実力ではない。帝国側が勝てた筈の試合を放棄しただけだ。あのまま続けていれば20-1で間違いなく帝国学園が勝っていただろう。

今度はちゃんと実力で勝敗を決めて、雷門サッカー部の処遇を判断する。そのために、帝国戦後沢山届けられた練習試合の申し込みの中から、尾刈斗中を選んだのだ。

毎年フットボールフロンティア地区大会で上位に食い込む実力の高さ。帝国さえいなければ、野生中と共に地区予選優勝争いを繰り広げるであろうチーム。

辛うじて勝てたが、豪炎寺の機転が無ければあの催眠サッカーを破れたかどうかは怪しいところだ。

豪炎寺の観察眼が『歪む空間』の弱点を見抜き、相手ゴールを割ることが出来た。しかし彼がいなかったら？染岡のワンマンプレーでチームワークが乱れ、『ゴーストロック』の毒牙にかかって敗北していただろう。

そういう意味でも、尾刈斗中はフットボールフェスティバルの前哨戦に相応しい相手。主要メンバーが抜けて戦力が下がった雷門が、どれだけ上を目指せるかを計るための理想的な相手。

新体制となった雷門サッカー部が優勝するためにも、尾刈斗との練習試合で何か手応えを掴まなければ。

円堂は携帯電話を脱いだジャージの上に置くと、再びタイヤを揺らした。

反動がついて戻ってきたボールを受け止める。

掌から全身に伝わる衝撃を堪え、もう一度タイヤを投げ返す。

円堂「俺も新たな必殺技を身につけないと……！」

彼もまた、染岡と同じく五郎の『コロドラシュート』に魂を揺さぶられていた。

点を取られれば取られるほど、チームの寿命は削られていく。点を取られないようにするには、キーパーが強くなれば良い。相手の強力なシュートを受け止めるための、新たな必殺技を身につければ良い……！

ガードを上げるためには、タイヤを使った特訓が一番手っ取り早い。田堂は日が暮れてからもずっと、タイヤを相手にキーパーの特訓を続けていた。

第7話 夢への発進

そして遂に、その日はやってきた。

雷門中と尾刈斗中の練習試合。

フットボールフェスティバル開催を目前に控えた、両チームの最終調整……！

試合会場である雷門グラウンドでは、既に雷門側がアップを終えており、マネージャーや1年生達が会場の準備をしていた。校舎に備え付けられた時計が午前8時30分を指し示したのと同様に、尾刈斗中が、保護者の運転する車に分乗してグラウンドに現れた。

円堂「遂に来たか……」

彼らが車から降り、グラウンドに足を踏み入れた途端、どす黒いオーラが辺りを包み込んだ。加えて、先程まで快晴だった空も暗く淀み、今にも雨が降りそうなくらい曇ってくる。

壁山「ヒイイイ！俺、トイレに行ってくるッス〜！」半田「こら、逃げるな！」

逃げようとする壁山だが、ユニフォームの背中を半田に掴まれて動けない。

懐かしいそのやり取りに、観客席ではクスクスと笑い声が起こった。

風丸「どうかしたか？円堂。」

尾刈斗中の練習風景をじつと見つめる円堂に、風丸が話し掛ける。

円堂「いや…あいつら、前よりも動きが良くなってるなあって思ってます。」

確かに、尾刈斗の選手達はウォーミングアップとは思えないくらい気合いが入っている。1年生キャプテン・幽谷の指示も冴え渡っており、一筋縄では行かない力強さを感じさせた。

やがて尾刈斗のアップも終わり、両校が監督の指示を仰ぐためにそれぞれのベンチに散った。

響木「さて、今回の試合だが…」

チラ、と対戦相手の一団に目をやり、言葉を続ける。

響木「マネージャーに聞いたところ、前回の敵は催眠術を使ってきたそうだが、今回もまた同じ手を使ってくるとは限らない。試合開始後10分は様子見だ。丁寧にパスを回して、相手の出方を待て。」

いつもなら円堂達の判断に任せて自分はベンチにふんぞり返っている響木だが、今日は何時になく慎重だ。

大会出場を目前にして負けてしまえば、選手達の志気を削ぎかねない。新体制チームの自信をつけるためにも、此处は何としても勝ちたいところ。

響木「スタメンは前日に伝えた通りだ。だが、相手の戦術次第ではフォーメーションもメンバーも変えていく。それと…」

雷門中の新メンバー、東と飛鷹に目を向けた響木は、優しく彼らに

語り掛けた。

響木「お前達はまだ入部したばかりだし、サッカー未経験だ。まずはベンチから、試合の雰囲気を感じていくといい。」

飛鷹「はい。」

東「は、はい！」

響木監督の周りに出来た扇形の隊列。その外側にいた染岡は、監督の指示を受けている尾刈斗中サッカー部の面々を見ていた。

どいつもこいつも、薄気味悪い奴らばかりだ。中には、前回の試合では姿を見せなかった者も何人かいる。

新入部員だろうか？

何しろエイリア事件以後、超次元サッカーブームに乗ってサッカー部に入る者も少なくない。あそこにいる何名かも、そうしたチームに煽られて入部した類の者達だろう。

やがて両チームの選手達が、ピッチの中央にて整列し始めた。

観客は尾刈斗が到着した頃の倍くらいに増えている。

久し振りの雷門の練習試合とあって、生徒だけでなく町内の人々の関心も大きいらしい。

地木流「はじめまして、尾刈斗中サッカー部監督の地木流と申します。練習試合のお誘い、ありがとうございます。」

響木「雷門の響木です。今回はお互い成果が得られるよう、良い試合にしましょう。」

両チームの監督が握手を交わし、メンバー表を交換する。雷門のスタメンに目を通した地木流監督は、「ほお……」と声を漏らした。

地木流「なるほど……FWの豪炎寺君、司令塔の鬼道君が抜けたため

に、こんな面子になってしまった訳ですか。ま、せいぜい頑張ってくださいよ。」

雷門で怖いのは、豪炎寺と鬼道のみ。他の選手は恐れることはない。

地木流「（この勝負、我々の勝ちだ…！）」

* * *

雷門中の生徒や、尾刈斗中の生徒。それに町内のサッカーファンの住民達。

雷門グラウンドは、今までにないくらい多くの観客で埋め尽くされている。

そんな観客の群れから離れ、校門にもたれかかる2人の少年がいた。2人は黒いジャージに身を包んでいる。片方はひよろりと背が高く、ジャージ越しにも腰が異様に細いのがわかる。もう片方は、ゴーグルで目元を隠し、ドレッドヘアを後ろで束ねた何とも変わった格好をしている。そしてそんな風変わりな2人組のジャージの背中には、赤い『TEIKOKU』の文字。

そう…彼らは帝国学園サッカー部のメンバー。

鬼道 有人と土門 飛鳥。

彼らもこの試合を見に来ていた。嘗てのチームメイトの活躍を、その目で確かめるために。

土門「なあ鬼道。試合が始まる前に挨拶しに行っても良かったんじゃないか？」

鬼道「必要ない。今の俺達は帝国の一員だ。安易に会うことは許されない。それに、俺達や豪炎寺のいない今の雷門が、どこまで戦えるのかを見られればそれで充分だ。」

土門「お、何時になくキビシいねえ！」

ニヤニヤ笑いながら、土門が鬼道の肩をバシバシ叩く。この2人、雷門での共闘を経てだいぶ仲がよくなった。前回雷門が尾刈斗と練習試合をした頃なんて、土門は鬼道に対して敬語で、頭が上がらなかったのに。

今の彼らは良きチームメイト。そして…雷門にとっての、手強いライバルである。彼らは雷門でプレーしていたが故、彼らの弱点を知り尽くしている。

天才ゲームメイカー・鬼道 有人。

アメリカ帰りのファンタジスタ・土門 飛鳥。

彼らが加わることで、帝国学園は更に強くなった。

鬼道「（見せてみる円堂、そして雷門中。お前達の実力を…！）」

* * *

両校の選手がピッチに散らばり始めた。

キックオフ予定の9時まで、あと2分少々。

雷門サイドのベンチでは、例によって囲碁将棋部のあの男がマイクテストを行っている。

角馬「あー、あー、今日は晴天なり今日は晴天なり…！」

音無「ちょ、ちょっと、部外者は勝手に座らないでくださいよ！それに今日は晴天じゃないですし！」

角馬「まあ良いじゃないですか、雷門の実況といえは小生、角馬圭太を置いて他にいません。いつもの如く実況させて頂きます！」

音無「ハア…！」

思わず溜め息が漏れる。

この男、実況はうるさいし唾は飛ばすし、音無は少々苦手だ。自分よりこいつの方がよっぽど『やかまし』なのではないか。

音無「木野先輩、もうちょっとそっちに行ってもらって良いですか？」

木野「え？ええ、構わないけど……」

木野が仕方なく席をずらすと、すかさず音無もそちらに詰めた。何が何でも、角馬とは距離を置きたいらしい。

角馬「さあ、我が雷門中と尾刈斗中の練習試合が、遂に始まるようにしています！」

音無やマネージャー達が自分から距離を取り始めたことに気がついていない角馬が、とうとう実況を開始した。先程まで音無が座っていた部分に、盛大に唾が飛ぶ。

角馬「フットボールフロンティア全国大会にて、雷門を優勝に導いた豪炎寺 修也をはじめ、何名かのメンバーを欠いた雷門中ですが、今回は新たな部員をチームに迎えて試合に臨むようです。対する尾刈斗中も、キャプテンの幽谷を中心に、11番武羅度、10番月村など、強力な攻撃陣が揃っているとの情報が入っております。どんな試合になるのか、いよいよキックオフです！」

・雷門中VS尾刈斗中

雷門中（F・ベーシック）

F W 染岡(11) シャドウ(17)

M F 半田(6) 少林(7) 五郎(18) マックス(9)

D F 風丸(2) 壁山(3) 影野(4) 栗松(5)

G K 円堂(1)

ベンチ 穴戸(8) 東(19) 飛鷹(20) 目金(12)

尾刈斗中(F - ポルターガイスト)

F W 幽谷(9) 武羅度(11)

月村(10)

M F 木乃伊(7) 八墓(8) 人狼(16)

D F 三途(2)

堀米(15) 不乱(4) 須加(13)

G K 鉦(1)

ベンチ 黒上(12) 屍(5) 柳田(3) 靈幻(6) 白幽
(14)

風丸「な、何だこのフォーメーションは…」

以前戦った時とは違うフォーメーションに驚愕する。いつも同じ陣形とは限らないのだから、驚く必要はないが、『F・ゴーストダンス』の名残が全く感じられないその特異なフォーメーションに風丸は度肝を抜かれていた。

幽谷の1トップだった最前列にはMFの武羅度も加わり、1・5列目には月村が陣取っている。

DFは三途を先頭に後ろに3人。

3 - 1 - 3 - 1 - 2。あまり見かけない奇抜な組み合わせだ。だが、後には退けない。どんなチームだろうと、倒すのみ。

円堂「気合い入れていくぞ、みんな！」

「「「おお!!」「」」

午前9時。審判のホイッスルが鳴り響き、尾刈斗の先攻でキックオフ。

幽谷からボールを託された武羅度が、丁寧にドリブルしながら上がっていく。口元には朝方飲んできたトマトジュースが付いている。

それをペロリと舌で舐めとると、口いっぱいトマトの酸味が広がり、それが武羅度の闘争本能を覚醒させた。

武羅度「ククク…ウエイク、アープ！」

それまで顔色が悪く、この試合にも乗り気でないといった風だった男が、トマトの味によって覚醒。雷門の左サイドを切り裂いていく。

半田「うわああっ!!」

突き飛ばされ、倒れる中途半端。だが笛は鳴らない。ファールも恐れぬ強引なプレーにより、1人、また1人と突破される。

栗松「ぐえっ！」

最後列を守っていた栗松が地面に尻餅をつき、遂にペナルティエリ
アへの侵入を許してしまった。

武羅度「キバっていくぜ…！」

武羅度を中心として、ピッチ全体：いや雷門中全体が闇夜に包まれ
た。空には三日月が昇り、それに照らされた武羅度がボールと共に
飛び上がる。

武羅度「『ダークネスムーンブレイク』…！」

闇夜に潜むバンパイア。血のように真っ赤なトマトジュースを滴ら
せた男が逆さ吊りのようになりながら空中で静止している。
呆気にとられる雷門イレブンを余所に、彼の右足から生えた漆黒の
翼が、気味の悪い羽音を響かせながらボールを蹴り飛ばした。

赤黒いオーラを纏いながら、ボールは一直線にゴールへ向かってい
く。対する円堂が右手を額の前に掲げると、心臓から解き放たれた
気が体中を旋回し、徐々に円堂の右手に集まる。そして、右手に集
められた気が眩い輝きを放つほどまで大きくなった瞬間、勢い良く
光の迸る右手をボールに叩きつけた。

円堂「『マジン・ザ・ハンド改』…！」

背後に現れた魔神の手と、円堂の手が重なる。度重なる激戦を戦い
抜いてきた魔神の掌は、『ダークネスムーンブレイク』を受け止め
ることに成功した。

武羅度「何!？」

円堂「よし、今度はこっちの番だ!」

腕を振りかぶってボールを前線に放り投げる。

空中をさまようボールを我が物にしようと、雷門も尾刈斗も、互いに譲らない。ボールの落下地点で構える半田と八墓。頭一つ分高かった八墓が木乃伊へとボールをヘッドで落とすと、五郎がそのパスをインターセプトする。

円堂「ナイスカットだ、五郎!」

観客からも歓声が上がる。

心地良い歓声に包まれながら、五郎はボールをマックスに預けた。マックスはそれをトラップした後、自分のすぐ斜め前を走るシャドウにスルーパスを出した。

染岡「(落ち着け…まだ俺の出番じゃないんだ…まだ…)」

すぐにも飛び出して、パスを要求したいところだが、此処はぐつと堪える。まだシュートは撃たない。響木監督の指示通り、様子を見よう。

シャドウ「『真・ダークトルネード』!』!」

容易く尾刈斗の守備陣を突破したシャドウが、ペナルティエリア外からのミドルシュートを放つ。

闇のストライカー、闇野 カゲト。彼の右足に仄暗い炎が灯る。その炎はシャドウが空中で回転する度に大きくなり、見る者の目に残像を焼き付けた。

禁断の炎の一撃が、鉈に向けて飛んでいく。

鉦「『ケルビムクローV2』……！！」

振りかざした右手に、透き通った水色の鉤爪が形成された。先端部分が鋭く、フック状になったその技は、禍々しいオーラを発しながらボールを掠めとってしまふ。流石にシュートを決めるには距離が遠過ぎたか。

シャドウが舌打ちするのが聞こえた。

だが、今の一撃で尾刈斗の守備陣はシャドウを警戒する筈だ。何しろ簡単に突破され、ペナルティエリアの外からのシュートを許したのだから。

敵は、隙あらばどこからでもシュートを撃ってくる。

そういう強迫観念に支配された筈。

鉦もどこか警戒した様子でボールを須加に向けて転がした。更に須加から八墓へ、ボールは渡る。

半田「行かせるかあ！」

自陣へ進ませまいと、果敢に半田が立ちはだかった。

八墓「『人魂ドリブル改』……！！」

頭に付けた蠟燭がゆらゆらと揺らめき、八墓の体の周りを青白い人魂が駆け巡る。人魂は半田の目を眩まし、彼が気づいた時には八墓は遙か彼方へ走り去っていた。

自分が開発した新必殺技が成功して、ほくそ笑む八墓。だが彼は気がついていない。彼の背後から五郎が迫ってきていることに。

五郎「『後ろの正面』……！！」

八墓の背後から、五郎が膝カックンを放った。彼の技は八墓の膝の

後ろへ綺麗にヒットし、食らった八墓は回転しながらピッチに叩きつけられてしまう。

五郎「やった！」

小さな体を動かしてピッチを駆け抜ける。月村を交わし、木乃伊を交わし。慣れたボール捌きで尾刈斗の選手をきりきり舞いさせている。

須加「チツ、またこいつか…」

苛立ちを隠せない、尾刈斗の新メンバー。さつきからこいつにボールを奪われてばかりだ。

五郎「（シャドウさんにはマークが3人…）」

先程のシュートに恐れを成したと見えて、尾刈斗の守備陣はシャドウに3人のマークをつけてきた。
だがもう1人のFW・染岡はフリーだ。

五郎「染岡さん！」

染岡「おう！」

五郎からのスルーパスが、元祖・雷門の点取り屋に繋がる。
決めるのだ。新たな必殺シュート…雷門の武器を…！

染岡「これが俺の、新必殺シュートだ…！」

蹴り上げたボールの向こうから、蒼い竜が姿を現し、産声を上げた。竜は砂塵を巻き上げながらピッチを駆け回り、シュートモーシヨン

に入った染岡の体を囲む。

染岡「唸れ爆竜っ…！『ドラグーン…クラアッシュ』…！！」

染岡の足の動きに合わせて、竜が息を吸い込む。そして、彼がボールを蹴り出すと同時に蒼い息吹を放ち、息吹を浴びたボールと共に竜もゴールに向けて飛んで行った。

その見る者を圧倒する様は、蒼竜でも飛竜でもなく。

正に『爆竜』だ。

鉦「フン…『ケルビムクローV2』…！！」

右手を振りかぶり、水色の鉤爪を形成する。

透き通った綺麗な水色でありながらも、禍々しい気迫は尾刈斗ならでは。

その鉤爪が、爆竜を纏いし炸裂弾を受け止めんとする。

だが。

メキメキと爆竜が牙を立てる。鉤爪を食らいつくす勢いで、技を放っている鉦の右手を押し返している。

そして次の瞬間には、鉤爪を打ち砕いてゴールへと収まっていた。

役目を終えた爆竜が、勝ち鬨を上げながら消滅する。

爆竜が消え去った時、ネットに収まったボールも唸るようにビリビリと震えた。

シャドウ「フツ、あいつにもマークを付けた方が良くないんじゃないか？」

不亂「チツ…！」

角馬「ゴール！前半13分、雷門先制点です！」

染岡「よっしゃああ…！」

円堂「やったな、染岡！」

歡喜する雷門イレブン。

シュートを決めた染岡も、拳を天に突き上げて雄叫びを上げた。

半田「やった、やったぜ！」

まずは1点。

此処から更に点差を広げるのだ。

尾刈斗ボールで試合が再開される。

先制点を許した悔しさからか、色白の幽谷の頬に赤みが差している。頭に血が上ったとみえ、強引なドリブル突破を仕掛けてきた。

マックス「『クイツクドロウ』…！」両足の瞬発力を生かして、居合い抜きの要領でボールを掠め取る。技を掛けられた本人が気づかぬ程の素早さと正確性。器用さが自慢のテクニシャン、マックスだからこそ出来る必殺技だ。

マックス「半田！」

やや強引なスクエアパスで、逆サイドの半田にボールを渡す。左サイドから駆け上がる半田、徐々にゴールとの距離を縮めていく。

半田「（！ シャドウのマークが減ってる…）」

先程の染岡のプレーで、シャドウのマークが1人減っている。チャンスだ。3人は兎も角、2人ならばシャドウの突破力なら振り切れる。

半田「シャドウ！」

シャドウ「任せろ…！」

半歩先に出されたボールをキープすべく、シャドウが体を反転させてマークを振り切った。三途のマークは執拗かつ正確だったが、もう1人のマーク、堀米を上手く押さえ込むことで突破に成功する。間髪入れずに三途がボールを奪いに来る。ボールをトラップする隙はない。足の脛ですボールを蹴り上げると、ダイレクトで必殺技を発動した。

シャドウ「『真・ダークトルネード』！！」

暗黒のシュートが炸裂する。不意を突かれたらしく、今度は鉈は反応すら出来ずに2点目を許してしまった。

角馬「ゴール！雷門中、瞬く間に追加点を決めたあ！このまま雷門が逃げ切るのか、それとも尾刈斗が追い上げを見せるのか！？雷門VS尾刈斗の練習試合は、まだまだ盛り上がるぞ！」

角馬の勝手な実況と、盛り上がる雷門の生徒達。

ボールをセットした幽谷は、その耳障りな歓声に舌打ちを漏らした。

幽谷「好き勝手言いやがって。これだからアウエーは…」

月村「どうする幽谷。『アレ』を使うか？」

幽谷「いや。それには監督の指示を仰がなければ…」

「おら、どうした尾刈斗ー！」
「もうビビって動けねえのかよー！」

センターサークルにボールを置いたものの、動こうとしない幽谷達に野次が飛ぶ。チラツと地木流監督に視線を送ると、彼も雷門側の生徒たちによる罵声に、必死に耐えているようだった。

だが幽谷は知っていた。我慢の限界に達した時、地木流監督の人格が豹変することを。

そして今…温厚な仮面を外し、地木流がその本性を露わにするっ…！

地木流「ヒヤーツハツハツハー！豪炎寺君以外にこんなストライカーがいるとは予想外でしたよ、雷門中の皆さん…！雑魚がいつまでも、調子に乗ってんじゃねえぞ…！」

幽谷「始まったか…」

地木流「てめえら！そいつらに地獄を見せてやれ…！」

「…おう…」「…」

遂に動く、幽谷。

ボールを後方の三途にパスし、右手を高々と掲げた。

幽谷「始めるぞ、尾刈斗のサッカーを…！」

雷門側の選手達の顔から、笑みが消えた。態度を豹変させた監督と、2点取られても余裕の選手に、不気味さを感じているようだ。

幽谷「行くぞ…必殺タクティクス、『デモニックパーティー』…！」

高らかに、必殺タクティクスの発動を宣言する。だが雷門の選手は、

その単語に聞き覚えがない。それもその筈だ。必殺タクティクスが流行り始めたのはつい最近。ましてやエイリア事件後の補習やテストに時間を割いて、あまりサッカーをしていなかった雷門には、馴染みのない言葉であるのも至極当然。

幽谷を中心に、尾刈斗のオフENS陣が雷門陣内に切り込んできた。それと同時に、ピッチ上を深い霧が包み込み、ひんやりとした冷気が円堂達の肌を撫でた。

尾刈斗は幽谷 木乃伊 武羅度 月村 八墓の順でパスを回し、ゆつくり…ゆつくりと歩を進めてくる。

風丸「何が始まるんだ…？」

風丸が身構えたその瞬間、視界の隅を『何か』が横切った。驚いてそちらを見ると、真っ黒い影がケラケラと笑っている。

人間？いや、人の形をした何かだ。続いて、青白い人魂が風丸の周りを旋回し始めた。

「うわああっ！」

声のした方を見ると、地面から這い出した何者かの手が、少林の足首を掴んでいる。少林や風丸だけではない。フィールドに立つ雷門イレブン全員が、妖怪・亡霊の類に襲われていた。

シャドウ「くっ…一体どうなってるんだ!？」

影野「まさか…呪い…？」

呪い？いや。そんな筈はない。これはただの催眠術だ。

そう、催眠術…『ゴーストロック』と同じ類の、催眠術なのだ。

恐れることはない…正気を保てばこんなものは…恐るるに足らない…
しかし。幽谷をはじめとする攻撃陣を、止められない…頭では催眠術とわかつてはいるが、拭えぬ恐怖心…

気がつけば、雷門陣内は阿鼻叫喚…絶叫と咽び泣きの嵐…！

『ゴーストロック』以上の不気味さと恐怖が、雷門側を襲つ…

風丸「（駄目だ…ダメっ…！体の震えが止まらない…！）」

ズブズブと、底無しの沼に落ちていくような圧迫感。

足掻いても足掻いても、這い上がれない…爆発する恐怖心…負の感情を堰止めてきた心の壁が破壊…決壊…崩壊する…

誰も動かない、動けない…

円堂「おーい、どうしたんだみんな！」

そんな中、ただ1人無事なのは…G K・円堂。

武羅度「！？何故だ…何故あいつはこの技が通用しないんだ？」

幽谷「簡単なこと…あいつは鈍感だからな。あまりに鈍感過ぎてこの催眠術が通用しないのかもしれない。」

月村「なるほど…だが、他の仲間が動けないことには変わらない。とつとと点を決めるぜ！」

猛襲…尾刈斗オフェンス陣の、猛襲が始まるっ…！

例え円堂にはこの催眠戦術が効かずとも、大した問題ではない…何

故なら、他の守備陣は動けないからだ。

無防備なディフェンスをかいぐり、集中的にゴールを攻め続けられば…いずれこじ開けられる…雷門側の皆っ…！

影野「あ、脚が…」

壁山「動かないツスー！！」

絶叫する壁山を突破し、幽谷がゴールに迫る…！

円堂「来い！」

円堂と1対1になった幽谷。ゴール前で腰を落とすと、紫色のオーラを体に纏い始めた。

幽谷「ハアアア…！」

オーラが人の姿を形作る。

真っ黒いローブで体を包み、目深に被ったフードの中に、骸骨の仮面を付けた…そんな姿を。

死神だ。仮面の奥、2つの双眸には真っ赤な瞳が爛々と輝いている。両手には獲物の首を斬り落とすのお誂え向きな巨大な鎌を持っている。これを死神と呼ばずして何と呼ぶ？

獲物を求めて闇をさ迷い、鋭利な刃で肉を割き、血の海に沈める…地獄の使者。

幽谷が呼び出したのは、魑魅魍魎の中でも一際恐ろしい魔物。死神。死神は携えていた大鎌を振り上げると、幽谷の足の動きに合わせて冥界の鎌を振り下ろした。

鎌の刃筋と、幽谷のオーバーヘッドが重なった時、爆発的なエネルギーが生まれた。

幽谷「『スカル・ザ・ブレード』!!」

薄紫色の弾丸が空気を震わせる。死神の絶叫が響き渡る。

絶望の象徴と呼ぶに相応しい悲哀のシュート、円堂に襲い掛かる…!

円堂「『正義の鉄拳G2』!!」

足を高々と振り上げ、右手に正義のエネルギーを纏って突き出す。

グググ…と、円堂の体の中で氣が弾け、右手に向かって集まってくる。やがて右手から拳状のエネルギーが発現し、回転しながら幽谷のシュートを迎え撃った。

絶望の鎌と正義の拳。

相反する2つの輝きが、ピッチの上で激しくぶつかり合う。

「ああああ!!」

両者一步も譲らず。

否、次第に幽谷が押し始めてきた。

鋭利な鎌は鉄拳に亀裂を入れ。死神がその鎌を振るった瞬間、『正義の鉄拳』は粉々に碎け散っていた。

円堂「くっ…!!」

粉碎される、正義の拳。

円堂が後ろを振り返ると、ゴール前を彩るオレンジ色の氣の破片を掻き分け、死神のシュートがゴールネットに突き刺さっていた。

角馬「ゴール!! 尾刈斗中、遂に1点返した! 動くことが出来

ない雷門イレブンを後目に、無情なる1点をもぎ取った！これで2
- 1、勝負はまだわからないぞ！！」

試合開始早々2失点を許した尾刈斗中が、遂に牙を向いた。
必殺タクテイクス『デモニックパーティー』による催眠術に掛かっ
た雷門イレブんに、勝機はあるのか…？

第8話 ピッチの攻防

染岡「くそっ！」

催眠術から解放された染岡が、悔しげに顔を歪ませた。他のメンバーも幻覚が消えたらしく、頭を振ったりしながら立ち上がっている。

音無「あ〜っ！1点取られちゃいましたね…」

木野「しかも『ゴーストロック』以上の催眠術を掛けてくるなんて…」

残念そうに肩を落とすマネージャーの隣で、響木は必死に突破口を探していた。

敵の戦術が催眠術なら…何処かにある筈なのだ。魔の幻覚攻撃の攻略法が。

響木「（何処だ…何処にあるっ…！）」

ピイイッ！

角馬「さあ雷門ボールで試合再開！染岡と闇野の2トップが上がっていくぞ！」

雷門のFW2人が、尾刈斗陣内に攻め込む。ボールを保持するのはシヤドウ。染岡はシヤドウの数メートル先を走る。木乃伊のスライディングを交わし、シヤドウが右サイドを切り裂いた。

反対側を走る相方はフリーだ。

シャドウ「染岡！」

力強いキックで、旋回するボールが染岡の足元に収まる。

染岡「決める…俺が点を決めれば、その分円堂も楽になる…点差が開くっ…！」

催眠術の攻略法が見出せないなら、自分がバンバン点を決めれば良い。

豪炎寺や鬼道ならもっとマシな打開策を考えつくのだろうが、頭の悪い自分にはこれしか思いつかなかった。何より、点を決めるのがストライカーの仕事。ならば、これが俺に出来る最善の作戦だ…

染岡「くらえ！『ドラグーン』…！」

技名を叫ぼうとした瞬間、目の前に青ざめた少年の顔が現れた。

三途「ククク…君にパスが出るのはバレバレだよ！」

尾刈斗中DF、三途 渡。

その観察眼の高さはチーム内随一だ。

豪炎寺がいなくて、助かった。あのシャドウとかいうFWは、突破力はあるもののパスの出し方が下手過ぎる。フェイントの一つもない。さつきからチラチラと染岡を見ていたから、こいつにパスを出すのは簡単に想像出来た。此処まで予想通りに動いてくれると、痛快なものだ。

三途「所詮君らは二流なんだよ！『怨霊』ッ…！」

大地に掌を翳すと、染岡の周りの地面が紫色に染まり、無数の不気味な手が這い出してきた。沢山の謎の手は、染岡の足首を掴み、引っ張り、地獄へと引きずり込もうとする。驚いた染岡が逃げようと体を捻ると、手はボールだけを奪って消え去った。

三途「困るな、この程度の技でビビってもらっては…」

怯んだ染岡を放置して、中盤で構える人狼にボールを渡す。彼は唸り声を上げながら半田を突き飛ばした。

人狼「幽谷イ！」

再びキャプテンにボールが渡った。

始まる…と、雷門側の誰もが身構える。

幽谷「『デモニックパーティー』!!」

大半の予想通り、それは再び発動された。尾刈斗中の必殺タクティクス。

先程と同じく、幽谷から木乃伊へ、木乃伊から武羅度、月村、八墓とパスを繋いで、隊列をゆらゆらと変えながら攻め込んでいく。

『ゴーストロック』を上回る、不気味で厄介な催眠術。

しかもまだ具体的な打開策は見つかっていない。『ゴーストロック』ならば地木流監督の怪しい呪文が合図になっているのだが、『デモニックパーティー』は監督が合図をしている様子は見当たらない。

となると、この幻術はピッチ上の何者かが発動の鍵であるだろうが…またしても襲いかかる、『アヤカシ』の群れ…!

半田「うわああっ！」

次々と半田に掴みかかってくる、異形の男達。ピッチを制圧する、恐怖と絶望。

雷門イレブンが魑魅魍魎と格闘している間に、幽谷達はどんどん進行していく。

幽谷「『神隠し』！！！」

突然…ゴール前に、神社の赤い鳥居が現れた。何もないグラウンドにポツンと佇む、色褪せたそれはどこかアンバランスで、そこに構えるだけで言い様のない違和感を感じさせた。

煤けた鳥居の中に、幽谷が蹴ったボールが吸い込まれる。正に神隠し、吸い込まれたボールは出て来る気配はない。

それでも辛抱強く鳥居を睨んでいると、何の前触れもなく吸い込まれたボールが飛び出してきた。

それも、右側に構える円堂の反対側に。完全に逆を突かれた。

円堂「クツ、『正義の鉄拳』じゃ間に合わない。だったら…！」

体を素早く反転させ、ゴールポストを蹴って反対側に飛び込む。右の拳に纏ったオレンジ色のオーラが、ボールを明るく照らし出して…

円堂「『真・熱血パンチ』！！！」

勢い良くボールを弾き飛ばす。円堂の土壇場の好セーブで、何とかその場を凌いだ…が、誰も動けない。ボールをクリア出来る選手が、いない…！

そして当然のことながら、迫り来るオフエンス陣は幽谷だけではな

く。円堂が彼に気を取られている隙に、後ろから矢のように飛び出した男が、無人のゴールに同点弾を叩き込んだ。

角馬「ゴール！！尾刈斗中、月村のダイレクトシュートで同点に追いついた！」

陰のように幽谷の背後に周り、こぼれ球を容赦なくゴールに叩き込む。獲物を捉え、その喉笛を切り裂く狼のように。1・5列目で構えるシャドーストライカー、月村。

彼のシュートが決まったことで、徐々に活気づく尾刈斗イレブン…

響木「見つからんな…『デモニックパーティー』の弱点が…」

攻略法が見つからなければ、まず必殺タクティクスの発動方法を探ろうと思ったのだが、中々上手くいかない。発動条件さえ分かれば、自ずと対策も導き出せるが…

審判の合図で、試合が再開される。善戦していたかに見えた雷門だが、前半で2・2の同点に追いつかれてしまった。しかも、試合の流れは尾刈斗にある。彼らの術中に嵌ってしまった雷門イレブンは、どの選手も恐怖の表情を浮かべている。

そんな中、闘志を失わなかった染岡とシャドウだが、敵のディフェンスの前には手も足も出ない。

どうにかゴール前までは辿り着けるが、三途の執拗なマークと躊躇ないスライディングには歯が立たず。

そして三途 幽谷のロングパスで、再び『デモニックパーティー』の発動を許してしまった…！

またしても、ボールは幽谷から木乃伊へ、木乃伊から武羅度…というように、一定の間隔を置いて、同じ順番でパス回しが行われている。

だが、そんなことを今は気にしている場合ではない。

催眠術のせいでDFは殆どその役目を成さない。円堂は自分の力でこのオカルトチックな猛攻撃を突破しなければならないのだ。

円堂「どうすれば良い…」

『ゴッドハンド』でシュートを止めても、パスする相手がない。敵の得点が決まらなければ、味方は催眠術から解放されないのだから。ここは『正義の鉄拳』でボールを前線まで弾き、時間を稼ぐのが得策だ。もうすぐ前半も終了する。ここは同点のまま逃げ切るべきだろう。ハーフタイムになれば何か対策が考えられるかもしれない。

幽谷「これで3点目だ。『スカル・ザ・ブレード』!!」

禍々しさと不気味さを兼ね備えた、死神。

落ち窪んだ眼窩に血のような赤を湛えた彼は、気味の悪い含み笑いを漏らす。その笑いと幽谷の叫び声が重なった瞬間、紫色のオーラが幽谷と死神を包んだ。

死神が鎌を振り下ろし、幽谷の蹴りが炸裂する。ゴールを割らんと…幽鬼の如き必殺シュートが、迫る。

円堂「うおおお…『正義の鉄拳G2』!!」

突き出した右手に、勸善懲悪のエネルギーを纏い。

全てを貫く勢いでパンチングを放つ。

この技はさっき破られたばかりだが、円堂の最大のキーパー技はこ

れしかない。

これで止めるしか、ないのだ…

しかし円堂の決意とは対照的に、『スカル・ザ・ブレード』は『正義の鉄拳』の回転力を殺いでいく。回転を弱めた上で、徐々に鉄拳に亀裂を入れていく。

そして…回転する拳の中央を貫き、幽谷の必殺シュートは円堂ごとゴールに突き刺さった。

角馬「ゴール！！キャプテン幽谷のシュートで、尾刈斗中逆転！円堂の必殺技を破り、遂に勝ち越したア！！」

此処でホイッスルが鳴り、前半戦が終了した。

各々のベンチに引き上げていく両チームだが、尾刈斗イレブンの表情が明るいのに対して、雷門イレブンの表情は固く強張っていた。

染岡「くそがつ…！」

アクエリ スの入ったボトルを飲み干し、忌々しげにそれを握り締める。染岡の傍では、スタミナを切らした半田ががつくりとうなだれていた。

風丸「どうなってるんだ…あんな幻覚を見るなんて…」

壁山「まさか、本当に呪いなんじゃ…」

円堂「何言ってるんだ、呪いなんてある訳ないだろ。あの必殺タクテイクスには、秘密がある筈なんだ。誰か、何か気がついたことはないか？」

ぐるりと周りを見回すが、みな首を横に振るばかりだ。いや、ただ一人…顎に手をやって首を傾げる少女がいた。

「あの、守くん…」

声の主は、久遠 冬花。彼女は何か言いたそうに、円堂を見つめて
いる。

冬花「私ね、気がついたことがあるの。」

みんなの視線を浴びて、戸惑いながらも言葉を続ける冬花。

円堂「何だ、冬っぺ？」

冬花「尾刈斗中が催眠術を使う時って、必ず幽谷君が始動者になっ
てるの。それでね、その後は幽谷君が木乃伊君にボールをパスして、
木乃伊君が武羅度君にパスして…それを繰り返してたの。役に立つ
かはわからないけど、一応言っておこうと思って…」

風丸「言われてみれば確かに、『デモニックパーティー』を発動し
た後は同じ順番でしかパス回しをしてなかったな。それに横一列に
並んで、規則的に隊列を崩していた。もしかしてあの動きが、始動
の鍵になってるのか？」

冬花の意見に、風丸も同調する。ピッチに立った者の殆どが、冬花
と同じことに気がついていたらしく、風丸が口火を切ったのを合図
に次々に話し始めた。

目金「なるほど、『プラーシーボ効果』ですね…」

音無「ぶらしーぼ効果？」

鸚鵡返しのようにその単語を繰り返した春奈に、目金は眼鏡を指で
押し上げながら解説する。

目金「一定のパターンで揺れ動く物体を見続けると、極度の催眠状態に陥ってしまうという、催眠術の中でも最もポピュラーなネタですよ。今回の場合、我々は催眠術には掛かるまいと、ボールだけを見つめていました。却ってそれが、催眠術に引っかかる原因になっていたんですね。」

音無「う…もつと分かり易く説明してくださいよ…」

目金「規則的にパスされるボール。ゆらゆらと変えられる隊列。この2つが我々の視覚に催眠作用を齎し、幻覚を見せていたという訳です。」

栗松「そう簡単にいくでヤンスかねえ…」

目金「無論、ただ規則的にパスを回しただけでは幻覚も何も起きません。しかし、尾刈斗中の動きには一切の乱れがありませんでした。規則的なパス回しと、乱れのない隊列の変化：この2つを完璧に調和させることで、『デモニックパーティー』を完成させていたのでしょう。正に悪魔の狂宴…恐るべきタクティクスです。」

目金の得意げな解説が終わると、誰もが溜め息をついた。たとえ仕組みが分かってても、一度発動されたら手が着けられないのが現状だ。対策として考えられるのは、やはり幽谷にボールを渡さないことだろう。

響木「後半…以上のことを踏まえて、メンバーを変えていく。」

腕組みをして、徐に口を開いた響木。皆の表情が、再び強張る。

響木「半田に変わって目金。お前が入れ。」

「「えっ!?!」」

突然外されることになった半田と、試合に出ることになった目金の声が被さる。

他の者も同様に、目金の起用に対して目を丸くしていた。

半田「待つてください監督！俺ならまだやれます！」

響木「無理をするな。お前の体力はもう限界だ。試合に出たかったら、まずはスタミナをつけろ。」

半田「わかりました…」

目金「ちょ、ちょっと待つてください、半田君はともかく何で僕が試合に出るんですか!?!」

響木「『デモニックパーティー』の絡繰を見破ったのはお前だ。奴が必殺タクティクスを使おうとしたら、お前がそれを断て。」

有無を言わさない。確かにタクティクスの発動条件を見抜いた目金自身をピッチに投入すれば、催眠術を妨害し易い。規則性のあるパス回しを防ぐために、その発動条件を最も理解した男をぶつけるのは、戦略的にも正しい。

それを理解したらしく、目金も渋々頷いた。

響木「風丸を左サイドに移動し、目金を左のボランチに移動させる。」

風丸「!?!それじゃボランチだった五郎は…」

響木「五郎はセンターバック、壁山はサイドバックにずれる。これで数は合う筈だ。」

半田が抜け、左サイドに風丸が入り。左のボランチだった少林は右にずれ、そこに目金が入る。

DFは、風丸のいた左サイドバックに壁山、左センターバックに五郎が入った。

ポジションの左半分を大幅に変更した響木。果たしてその意図は…

* * *

角馬「間もなく後半戦がスタートし…おや、雷門は選手を交代するようですね。」

6番・半田に替えて、12番・目金が入ります！」

雷門中

半田(6)out 目金(12)in

意外な人選に、雷門側の観客がどよめく。

「えー、目金え？」

「あいつで大丈夫かよ…！」

目金 欠流といえば、雷門中2年生の中でも5本の指に入る運動音痴だ。

おまけに自信家で口が達者。『眼鏡が似合う人気者』と本人は言うが、こういった団体スポーツには向かないのではないか…というのがクラスメートの感想である。

だが、それは無関係の、戦場の外からの評価。彼らの勝手な評価を余所に、ホイッスルは鳴り響く。染岡とシャドウが、攻め込む…！

風丸「行くぞ、少林！」

少林「はい！」

彼らが攻め込むと同時に、左サイドに入っていた風丸と、ボランチの少林が幽谷のマークにつく。

『デモニックパーティ』の発動者が幽谷だと露見した今、彼にボールを出させなければそのタクティクスは不発に終わる。それを見

越した上での、響木の指示だった。

幽谷「チツ…」

迷わず自分をマークしてきやがった。どうやら敵は、必殺タクティクスが発動条件に気づいたらしい。そうでなかったら、真っ直ぐ幽谷に張り付いてくる理由がない。

憎々しげに、上がっていく他の敵選手を見つめる。

ボールを保持する染岡とかいうピンク坊主が、木乃伊を突破していた。

染岡「よっしゃあー！」

相変わらず、前半と同じくディフェンスの方はイマイチ機能していない。怖いのは『デモニックパーティー』だけ。そして、此方がボールを持っている限り、それは発動しない。おまけに守備陣は弱いつまぎている。

染岡「（いける…俺のシュートを決めてやるっ…！）」

1点返して、同点にしてやる。そんな意気込みを胸に、ゴールに迫るが…

「カカカ…悪いが進ませることは出来ねえなあ…」

気味の悪い笑い声と共に、堀米が飛び出してきた。彼の頭上には幾つかの力ボチャが浮いており、不気味なオレンジ色に輝いている。

堀米「『トリック・オア・トリートV2』…！」

巨大な力ボチャ軍団が染岡に向かって投げつけられた。彼や周りの地面に着弾したそれは大爆発を起こし、巻き込まれた染岡は地面に派手に叩きつけられた。

染岡「ぐああつ！」

ボールを奪った堀米が、それを須加に渡す。と同時に、ドンという大きな鈍い音と共に、ボールは勢い良くフィールドを寸断した。

大谷「凄い……」

ベンチに座っていた大谷が、自分の腹に触れる。ボールを蹴る音の大きさに、お腹が震えるような…振動を感じたのだ。太鼓や楽器の演奏など、大きな音を聞いた時に感じるあの感覚。つまり、それだけ須加のキック力が強いことを物語っている。

木野「びつくりした？これが超次元サッカーなの。派手な必殺技だけじゃなくて、地味で堅実なプレーが、必殺技の凄さを際立たせるんだ……」

木野はそう言って大谷に笑いかけた。

超次元サッカー部ではこんなことは日常茶飯事であると見えて、全く動じていない。

このサッカー部は。ずっとこんな熾烈な戦いをしてきたのだ。中学部活動の域を超える、激しいプレーの数々。そして、選手が如何に傷つこうと…目を背けることなくピッチを見つめ、彼らを支えるマネージャー。

一見無能なようでしたっけ指示を出すおっさん。

そういう厳しい部活で、マネージャーを務めることを決めた自分。

大谷「（私も頑張らなきゃ。マネージャーをやるって決めたんだから、少しでもみんなの役に立たないと…）」

須加の地面すれすれのグラウンダーパスは、幽谷に向けて放たれた物。だが幽谷にはメーカーが2人張り付いている。仕方なく、MFの八墓が割って入り、それをトラップした。

「こつちだ！」

木乃伊の声が響く。八墓は頷くと、彼にパスを出した。中盤でのパス回しに、業を煮やした風丸がボールを奪いに来る。その一瞬の隙を突いて、幽谷にパスが通った。ボールさえ貰えば、水を得た魚のように尾刈斗のサッカーは活気づく。少林を交わし、幽谷が『デモニックパーティー』を発動する…！

だが。

ピッチに降り立った眼鏡の天使が、それを許さなかった。

「今です！」

目金の眼鏡がキラリと煌めき。木乃伊に向けて放たれたパスをインターセプトする。

おお、と観客から感嘆の声が漏れた。思えば誰も、目金が活躍することなど…ボールに触れることさえないと思っていたのだから。

だが一番驚いたのは幽谷だ。やはり敵は気づいていた。尾刈斗の常勝手段…『デモニックパーティー』の秘密に。一定の間隔で行われるパス回しと、規則的なフォーメーションが、対戦相手を催眠状態に陥らせる。

一度気がつけば、防ぎやすいトリック。

現に、こんな見るからに運動が苦手そうな眼鏡にまで発動を阻止されてしまった。

目金「フフフ…これぞ正に『メガネカット』です！」

満面に笑みを浮かべ、自らのプレーに名前を付けている。

そして彼は風丸にボールを渡し、更に風丸から染岡にパスが繋がった。

左サイドからの速攻スタイル…これも響木の狙いだ。

幽谷は左サイドから上がって来ることが多い。『デモニックパーティー』の発動を阻止しつつ、即座に攻撃に転じるために、幽谷が攻めて来るであろう左サイドに選手を集中させ、スピードのある風丸にボールを運ばせることが出来る陣形にしたのだ。

響木「穴戸、東、飛鷹。お前達もアップをしておけ。」

ベンチから試合展開を見守る穴戸達に、響木が声をかけた。

穴戸「え？（どうして…『デモニックパーティー』も封じたし、雷門が追い付くのは時間の問題なのに…）」

試合に出られるチャンスが出来たのは嬉しいが、このタイミングでのアップの指示に首を傾げる。

そして響木の采配通り、早くも後半2度目のシュートチャンスが訪れた。

染岡「今度こそ決める…『ドラグーンクラアッシュ』!!」

爆竜、唸る。

使用者本人の雄叫びと、竜の産声が重なり、蹴り出されたボールに纏わりつきながら、蒼き爆竜はゴールを守る鉦に牙を向いた。

鉦「フン…」

しかしここで、尾刈斗の2つ目のトラップが発動する。

鉦の両手が怪しく動き、ゴール前の空間が歪み始めた。空間は次第に湾曲していき、遂にはぐにやりと捻れてしまう。

其処に吸い寄せられた爆竜は、断末魔の悲鳴を上げながら『捻れ』の中に巻き込まれて、消滅した。

染岡「何イ!?!」

鉦「これが『捻れる空間』…どんなシュートもこの技には無力…!」

ボールを手中に収め、ホッケーマスクの下から鉦のくぐもった声が聞こえた。

『捻れる空間』。かつて雷門を苦しめた、『歪む空間』の上級技だ。鉦は手にしたボールを落下させると、須加に向けてパスを出した。

来る…と、雷門の誰もが身構える。須加が先程見せた驚異的なロングパスが、再び空気を震わせるであろうと、彼の一挙一動に注目する。

しかし須加は、ベンチの地木流に一瞥をくねると、ボールをピッチ

の外に転がした。

シャドウ「ミスキックか…?」

角馬「尾刈斗中、選手を交代するようです。地木流監督、果たして何を狙っているのか!？」

尾刈斗中

武羅度(11) out 白幽(14) in

不乱(4) out 屍(5) in

木乃伊(7) out 黒上(12) in

次々と入れ替えられる尾刈斗の選手達。いや、ただ選手が代わっただけではない。フォーメーションも変化している。

3-1-3-1-2から5-3-2へ。

綻びが見られ始めた『デモニックパーティー』を捨てて、1点を守りきるための守備型の陣形に変えてきたのだ。

オリジナルスキル集

突然ですが、これから私の小説に出る予定のスキルを載せます。

「こんなスキルねーよ」と苦情が出るかもしれませんが、一応本作オリジナルということで、幾つか新スキルが登場することを御理解ください。

・てんさいはだ

主な所有者：出雲 天馬

属性の一致、不一致に関係なく1.5倍の威力で必殺技を使用できる。

・せいちよう！

主な所有者：沢山？

必殺技の成長スピードが通常よりも早い。

・タイマン！

主な所有者：飛鷹 征矢

コマンドバトル時、近くに何人キャラがいても1VS1の戦いになる。

・FWキラー！

コマンドバトル時、相手の登録ポジションがFWなら技が成功しやすくなる。

・MFキラー！

コマンドバトル時、相手の登録ポジションがMFなら技が成功しやすくなる。

・DFキラー！

コマンドバトル時、相手の登録ポジションがDFなら技が成功しやすくなる。

・GKキラー！

コマンドバトル時、相手の登録ポジションがGKなら技が成功しやすくなる。

・スタミナアップ！

主な所有者：風丸 一郎太
GPが減りにくくなる。

・バーニング！

主な所有者：炎ヶ原 真紅
1人だけ常にバーニングフェーズ状態で行動出来る。

・スナイパー

ボレーシュート、ループシュート、フリーキックが決まり易くなる。

・プラスパワー

主な所有者：染岡 竜吾、遠井 宇宙
得点を決める度にシュートの成功率が上がる。

・だんけつりよく

主な所有者：壁山 塀五郎
コマンドバトル時、必ず2人から3人で相手と対峙する。

・はんげき！

主な所有者：豪炎寺 修也、吹雪 士郎、闇野 カゲト
ピンチの時に1点決めると、技の成功率が上がる。

・テクニシャン

主な所有者：松野 空介、一之瀬 一哉
1人で発動する必殺技の成功率が上がる。

・デリートプラス

コマンドバトル時、相手のスキルの効果を無効化する。（作中では、相手の必殺技の追加効果を受けない）

第9話 思いを繋いで…

雷門側のスローイン。

風丸が投げたボールを染岡がトラップし、シャドウにクロスを上げる。

ゴール前をさ迷うボール。

足に暗黒の炎を宿し、飛び上がるうとするシャドウだが、飛び上がれない。見ると、新たに投入されたDFの柳田が、ユニフォームの裾を引つ張っている。

シャドウ「チツ…」

審判の目には止まらなかつたらしく、笛は鳴らない。

雷門の攻撃のチャンスだったが、惜しくもシュートには繋がらず。だが仮にシュートを撃てたとしても、鉈の必殺技を破れたかは怪しいところだ。

ボールをトラップした須加のロングパスが、再びピッチを切り裂く。パスの受け手は、白い布を頭から被った、お化けのような少年。武羅度に代わって得点する責務を担って投入された、白幽 漂である。

少林「ハイーツー!!」

カンフーの要領で、少林がスライディングを仕掛ける。しかしふわふわと掴み所の無い動きをする白幽はそれを交わすと、漂うようにして雷門陣内を掻き乱す。

栗松「これ以上は進ませないでヤンス！」

体をジグザグに動かしながら、大地と足の摩擦で熱を起こす。ジグ

ザグの軌跡を描いた炎が、栗松と共に白幽に襲いかかる…

栗松「『ジグザグフレイム』！！」

蛇行する炎の一閃。栗松が編み出したブロック技だ。

白幽「無駄無駄無駄…『シャドーダイブ』…！！」

暗雲が立ち込め、白幽の姿を覆い隠す。炎を従えた栗松が白幽の下へ走り寄った時、闇に紛れた彼は既に遠くへ走り去っていた。

ふわふわとした独特のステップで、雷門の守備陣を掻き乱す。トマトジューズを飲むと筋肉組織の活動が活発になる武羅度とは、また違った意味で特異なプレイヤーだ。

飛び跳ねるようにしてピッチを駆け回る白幽が壁山を突破する。あつという間に後は円堂を残すのみとなった。

白幽「『シャドーボール改』！！」

浮かび上がったボールに、悪霊のおぞましいエネルギーが蓄積されていく。

毒々しい紫色の、如何にもゴーストタイプといった出で立ちの波動弾が、白幽の蹴りを受けて円堂に向けて突き進む。

円堂「『マジン・ザ・ハンド改』！！」

左胸から放たれた眩い氣の塊が魔神を形成して、『シャドーボール』を受け止める。白幽の舌打ちを無視し、辺りを見回す。今度は『デモニックパーティー』を受けていないから、味方選手にパスを出せる。円堂は中盤で構える五郎に視点を定めると、大きくボールを放り投げた。

それをトラップして駆ける五郎。迫り来る尾刈斗の選手を、小柄な体格を生かして1人2人と交わしていく。

人狼「そこまでだぜ、おチビちゃん…『ウルフシャウト』!!」

ワォーン、という甲高い狼の遠吠えが、ずしりと五郎の腹に響き渡る。ビリビリと空気が振動し、鼓膜が破れるのではないかと心配になるくらいに耳を揺さぶった。

だがその遠吠えが五郎に与えたものは鼓膜を破らんばかりの大音響だけではなかった。

大きな音を怖がるという、生き物の原始的な感情。圧倒的…圧倒的な恐怖心が、呼び覚まされる…!

五郎「(こ、怖い…)」

体の震えが止まらない。

どうにか震えを止めようと、肘を抱き締めるが、ガタガタという震えは止まらない。止まることをしらない。

人狼「へっ、臆病者が。」

敢えなくボールを奪われる。取り返しに行こうとするが、今度は逆に小柄な体格が災いして競り負けてしまった。

五郎「(くっ…)」

臆さなければ。臆さなければ、ボールを奪われることはなかったのだ。

前線にボールを送り、あわよくば…放ちたかった。会田の助けと、

円堂や染岡の協力を経て完成させた必殺シュートを。
だが悔やんでも遅い。人狼が月村にキラーパスを出した。
尾刈斗が誇るシャドー 스트ライカーが、ゴール前に飛び出して来る。

月村「行くぞ…『真・ファントムシュート』!!」

ヒールで蹴り上げたボールに人魂を纏わせ、ダイレクトで蹴り飛ばす。

同じ必殺技でも、使用者によって微妙に差違がある。

モーションの一つ一つが素早い月村は、他の尾刈斗の選手に比べてシュートの発動時間も早い。

そのせいだろうか…円堂の反応も遅れてしまった。

技を放つ暇もない。シュートは徐々にゴールとの距離を縮めているのに、円堂はそれに追いつけない。一番発動時間の早い『熱血パンチ』でさえ、ボールに手が届かないのだ…

円堂「く…ダメだ、間に合わない…!!」

流石に円堂も、こればかりは失点を覚悟した。だが、シュートの前に立ちはだかる者が1人。

「ゴールは割らせないでヤンス!」

栗松だ。『ファントムシュート』の前に飛び出した彼の顔に、シュートが直撃する。辛うじて失点は防いだが、栗松は地面に叩きつけられてしまった。ボールはピッチを転がり、タッチラインを割る。ボールの行方を目で追い、失点を免れたことを確認した栗松はぐったりと倒れ伏した。

円堂「栗松!」

ゴール前でうつ伏せに倒れた栗松の周りに、雷門イレブンが集まる。栗松はというと、ボールをまともに受けて真っ赤に腫らした顔を上げ、小さく笑うばかりだ。

栗松「良かった…追加点を取られないで済んだでヤンス…」

円堂「ナイスガッツだ、栗松。」

身を挺してゴールを守った栗松を見て、円堂は腕に巻いたキャプテンマークを握り締めた。

円堂「俺が諦めちゃダメだ。このゴールは俺が必ず守りきる。栗松の分まで…」

必殺シュートを顔面に受けたダメージが大きい。栗松は影野とマツクスに支えられながらピッチを去って行った。

響木「よし、飛鷹。栗松の代わりに出てみる。」

飛鷹「…!？」

響木「実際にボールに触れて、超次元サッカーに慣れるんだ。それから…少林寺に代わって穴戸。」

穴戸「え？俺も!？」

突然の起用に驚きを隠せない。

だが試合に出られる喜びが、驚きを上回っている。

ピッチを去る少林と掌を重ねた後、綿菓子頭は勇んで戦場に乗り込んでいった。

雷門中

栗松(5) out 飛鷹(20) in

少林(7) out 穴戸(8) in

月村のスローインで試合が再開される。

ボールは幽谷に向けて投げられたが、それをカットしたのは少林に代わって投入された男。

ダイナミックな動きで中盤を制する少林と、ボールの動きを見極めて確実に敵を牽制する穴戸。攻撃のリズムを変えたことで、尾刈斗の攻撃に対応し易くなった。

穴戸「(響木監督は読んでいたのか…相手が個人技主体の戦術に切り替えてくることを…だからベンチ組にもアップを命じたんだ。)」

ドリブルしながら、穴戸は響木の読みに気づいた。「デモニツクパ―ティ―」を破られた途端、個人プレーに切り替えてきた尾刈斗。刻一刻と変わる戦況を、響木はしっかりと見極めていたのだ。

穴戸「染岡さん！」

絶好の位置でのスルーパス…だが、須加に阻まれてしまう。無理もない。

今の尾刈斗は、DFが5人。シャドウには常に2人、染岡にも3人のマーカーが張り付いている。

穴戸は機動力があるためにボールが繋がりやすくなったが、やはりゴール前での競り合いには負けてしまう。

須加のロングパスがピッチを飛び越え、前線の選手館の下へ落ちる。それを拾い、ふわふわとした動きで白幽がペナルティエリアに侵入してくる。立ちはだかるは、飛鷹。初めて試合に参加した彼のプレーに、誰もが注目する…

だが。

飛鷹の股を抜き、白幽は容易く彼を突破した。股下を潜り抜けるボールを眺め、飛鷹の目が見開かれる。

白幽「ハハハ、軽いなあ!!」

素早く影野がカバーに入る。スライディングでボールを弾き飛ばし、ルーズボールを風丸がキープする。

幽谷「(狙い目だな、あいつ。)」

さつき退場したら5番に代わって入ったリーゼント。

データがないだけにどんなプレーをしてくるか不安だったが、フェイントでもない単純なドリブル突破にも対応出来なかった。恐れる必要はないだろう。

あんな奴がDFに回るとは、雷門もなめた真似をしてくれる。却って仲間の普段が大きくなっているのだから。

柳田「『ドツペルゲンガーV2』!!!」

不気味な黒い霧が、ボールをキープした風丸を包み込む。霧の中から現れたのは、風丸自身。夢でも見ているのだろうか?確かにそこには、風丸と瓜二つの、水色ポニーテールの少年がいる。風丸そっくりの少年は、呆気に取られる本人からボールを奪うと、柳田にパスした。

風丸「しまった!」

柳田「豪炎寺と鬼道のいない雷門なんて怖くない……」

ボールは八墓が受け取り、ピッチを切り裂く勢いでドリブルしていく。

八墓「全くだ。あいつらがいなければ、雷門はただの弱小クラブ…」

八墓がキラーパスを出す。

再びボールは白幽に繋がった。

白幽「おまけにDFがザルじゃシュートも防げまい！」

わざと飛鷹に向けてドリブルし、強引なタックルで彼を弾き飛ばす。

白幽「『シャドーボール改』…！」

暗黒のオーラで包み込まれたシュートが迫る。狙うはゴールの右上。円堂の手が届かない、上の隅っこだ。

五郎「そうはさせない！」

足に雷を帯電させる。

いよいよ放つのだ。あの必殺技、『コロドラシュート』を。

しかし飛び上がろうとした瞬間、眼前に迫るシュートを見て臆したか…一瞬目を逸らしてしまった。

それが災いして体勢を崩し、地面に叩きつけられる。

五郎「うわっ！」

壁山「五郎！」

体の大きな壁山が頭でボールを弾いた。

窮地を防いだが…雷門は防戦一方。

ボールを奪ってもシュートに辿り着けない。守りに入ってもブランクのある五郎に初心者飛鷹が躊躇ってしまうことでピンチが続いている。

夏末「監督！飛鷹君も多摩野君も、まだ実践は早過ぎます。せめて風丸君をディフェンスに回して、壁山君達の負担を減らすべきです！」

遂に耐えかねた夏末が、響木にポジションチェンジを要求する。もう交代枠は殆ど使い切り、最後の1人である東は初心者。ならば守備陣の面子だけでも替えないと、失点は時間の問題だ。

五郎や飛鷹が防ぎに行っても、肝心な所で怯えてしまう。そして彼らが突破される度に、壁山と影野がカバーに走る。元々スタミナの無い壁山はもう体力も限界である。

響木「お前は…まだわからないのか。」

夏末「は…？」

響木「この布陣の意味が…まだ、わからないのか？」

わからない。わかる訳がない。失点の可能性が高く、得点の可能性が低いこの布陣に、意味があるのか…

円堂「どうしたんだ五郎、飛鷹。失敗を怖がってたら何も始まらないぞー！」

怯える五郎達を励ます円堂。

五郎「円堂センパイ…」

円堂「失敗したって気にするなよ！俺達が全力でカバーする。だから思いつきりやってみる！」

円堂の言葉が、飛鷹達の胸に響く。ビリビリと…イナズマが駆け抜けるように、響き渡る…！

白幽「何をごちゃごちゃ言ってる…！」

『シャドーボール』。暗黒の一閃が、再びゴールを強襲する。

飛鷹「く…やってやる…俺は飛鷹 征矢だ！！！」

うおおお、と気合いも充分。思い切りボールを蹴り返そうと足を振り上げる。

だが、タイミングが僅かに早かったか。振り上げた右足は虚しく宙を切り裂いたのみ。

飛鷹「（また失敗か…）」

ボールに触れる感覚がなく。思わず溜め息を漏らす。

しかし彼のプレーは不思議な現象を引き起こした。

飛鷹の蹴りの軌跡に沿って、空間に紫色の裂け目が生じている。『

シャドーボール』は其処に吸い寄せられ、必殺技の威力を完全に削がれてしまった。

白幽「何！？」

飛鷹「な…！」

勢いを失ったボールは飛鷹の足元に転がる。

歓声が起こり、仲間達の賞賛の言葉が飛ぶが、飛鷹の耳には入って

いない。

飛鷹「(何だったんだ…今は…)」

目を瞑っていたために良く見ていなかった。

何が起こったのか。蹴りを放ったは良いが盛大に空振りした筈。なのに気がついたら、自分の足元にボールが転がっている。

だが思案してる隙はない。

尚も敵は迫ってくる。

慌てて穴戸にボールをパスする。

黒上「無駄だ！」

木乃伊に変わってMFを務める黒上のインターセプト。そしてボールは月村にパスされ、またしても『真・ファントムシュート』がゴールに襲い掛かった。

五郎「今度は僕の番だ…」

後ろにはキャプテンがいる。

頼れるキャプテンが。その安心感…圧倒的安心感が、五郎に勇気を与える。戦うための勇気…どんなシュートにも怯えない勇気を…！

五郎「うおおお…『コロドラシュート』…!!」

右足に雷を帯電させ、向かってくるボールを思い切り蹴りつける。

五郎の背後に現れた小さな黒竜が、ウイंकをしながらボールに牙を剥いた。

重いシュートだが、歯を食いしばって右足を振ることで、蹴り返すことに成功する。黒竜を従えながらピッチを縦に寸断するボール。

五郎「やった：僕の技で、シュートをブロックしたぞ！」

「良いぞー五郎ー！」

「そのドラゴン可愛いぞー！！！」

観客からの声援を受け、気分が高揚する。

そんな五郎を見て、夏未にも漸くわかった。この一見すると無謀に見える、穴だらけの布陣の意味が。

夏未「頑なに飛鷹君達をDFに置き続けたのは、彼らにDFとしての責任感を与えるためだったのですね。」

響木「：自分達のせいで仲間の負担が大きくなっていることに気づけば、何が何でもゴールを堅守しなければならぬという：DFとしての自覚が生まれる。追い詰められたために、2人とも躊躇いが消えただろう。」

これが、響木の狙い。

思い切りの足りなかった五郎と飛鷹に実力を発揮させるために、わざとゴール前に2人を置いたのだ。

響木「あとは前線の2人だな：」

夏未「前線の：2人？」

夏未の視線の先には、黒竜を纏って飛んでいくボールと、敵にマークされながらそれを眺める2人のFWの姿があった。

ボールは雷を帯びながら鉦に向かって突き進んでいく。

突然の五郎の反撃に肝を冷やしたが、防げない技ではない。鉦は両手を動かしながら空間を歪ませた。

鉦「『真・歪む空間』：！」

『捻れる空間』程ではないが、この技も中々恐ろしい。ボールに纏わりついた黒竜を大人しくさせ、暗黒空間の餌食にしてしまったのだから。

ボールを手にした鉈は、得意気にシャドウ達に見せつける。取れるものなら取ってみろ、と言わんばかりに。

地木流「さあて、そろそろジ・エンドにしてやるか…てめえら！そいつらの息の根を止めちまいなあ！！」

後半も残り10分を切った。

雷門にトドメを刺すべく、尾刈斗の攻撃陣が最後の攻めに出る。

猛スピードでピッチを掻き乱す月村。幽谷が壁山の背後に出来たスペースに走り込み、ボールを受け取る。

笛は鳴らない。オフサイドは…無し。

幽谷「駄目押しの1点…くらえ！『スカル・ザ・ブレード』！！」

ゴール前で腰を落とし、氣を充填する。すると幽谷の体から発せられた紫色のオーラが、真っ黒いローブを身に纏った骸骨を形成した。化身とでも呼ぶのだろうか。幽谷が発した氣は、今までで一番強大な死神を具現化している。

死神の振るう大鎌と、幽谷のオーバーヘッドが重なった瞬間…薄紫色の弾丸が空気を震わせながらゴールへ向かって飛んでいく…！

円堂「ここで追加点を取られたら負けだ…必ず止める！『正義の鉄拳G2』！！」

振り上げた右足で大地を踏みしめ、右手に纏った黄金のエネルギーを突き出した。そのエネルギーは拳状になり、回転しながら『スカ

ル・ザ・ブレード』を迎え撃つ。

幽谷「無駄だ！その技は既に破られたのを忘れたのか！？」

円堂「わかってるさ…それでも諦めない。ゴールを守るために…」

究極奥義に完成無し。

絶え間なく進化を続ける、無限の可能性を秘めたる必殺技。進化するなら…今こそ応える。俺の覚悟に。仲間の期待に。『勝ちたい』という気持ちに…！

円堂「確かにお前達の言う通り、豪炎寺達がいなければ雷門は弱小チームかもしれない。だからこそみんなで力を合わせなくちゃいけない…全員で1点を取らなきゃいけない…だから！もう点はやらない。絶対繋げてみせる…！」

グググ…と、『正義の鉄拳』が『スカル・ザ・ブレード』を押し返し始めた。

それと同時に拳の回転数が上昇し、本体の色も赤みがかかっていく…

円堂「『正義の鉄拳G3』…！」

進化…土壇場での、究極奥義の進化っ…！

その力は遂に『スカル・ザ・ブレード』を打ち砕き、幽谷ごとボールを弾き返した。

円堂「よっしゃあ！」

幽谷「くそ…まだまだ！」

まだ諦めない幽谷。ルーズボールを拾うと、再び雷門陣内に突入する。

だが、もう試合の流れは雷門にあり。守備陣に取り囲まれてしまった。

壁山「そうツス、豪炎寺さん達がいなくなつて、俺達が頑張れば良いんすよ！」

幽谷の正面に立ちただかるは、雷門が誇る巨漢ディフェンダー・壁山。

壁山「土門さんがいないなら、」

影野「俺達がゴールを守ればいい……」

後ろから影のように近づいてきた長髪の少年が、幽谷からボールを奪い取り、前線にそれを思い切りクリアする。

M Fの位置に上がった風丸がボールを拾うと、尾刈斗のオフセンス陣がチエックに入る。

風丸「鬼道や一之瀬がいないなら、」

穴戸「俺達がボールを繋げばいい！」

穴戸との鮮やかなワンツーパスで、迫り来る人狼を軽く抜き去る。そして前線を走る染岡に狙いを定めると、大きくロングパスを放った。

染岡はマーカーを振り切るとそれを受け止め、ゴールを見据える。

皆の『想い』が込められたボール。G Kの円堂に始まり、皆が必死で繋いだボール。皆の意志を得点という形で具現化することが、ストライカーの役目。様々な感情が染岡の体中を駆け巡る……

染岡「豪炎寺がないなら、俺達がシュートを決めればいい。」

そうだろ、シャドウ…！

染岡の目は、ゴール前で轟めく尾刈斗の守備陣に埋もれた、もう一人のFWの方へと向けられた。彼は間違いなくそこにいる。攻撃の機会を伺っている。

俺からのラストパスを、待っている…！

染岡「『ドラグーンクラッシュ』…！」

爆竜、唸る。

空気を震わせる産声を上げ、解き放たれた爆竜はボールを追い掛けるように飛んでいく。ゴールを大きく逸れるようにして。

風丸「染岡、どこに蹴ってるんだ！」

円堂「いや…あれはシュートじゃない。パスだ…！」

そう。染岡の狙いは、ゴールを奪うことではない。

シャドウを取り囲む守備陣を蹴散らすこと。そして、彼にボールを繋ぐこと…

シャドウ「フ…そういうことか！」

『ドラグーンクラッシュ』によって、シャドウに張り付いていたマーカーが全員蹴散らされた。そしてボールは軌道を変え、シャドウの頭上へと突き抜ける。

その気まぐれな爆竜に追いつくために、暗黒を足に纏った闇のストライカーが飛び上がる。回転しながら…荒れ狂う爆竜の息吹に、自身の必殺シュートを叩き込む…！

シャドウ「『真・ダークトルネード』!!」

蒼き爆竜が、闇のエネルギーを注ぎ込まれて体色を変えた。透き通るような碧から禍々しき漆黒へ。

『ドラグーンクラッシュ』の持つスピードはそのままに、『ダークトルネード』のパワーを兼ね備え…ゴールを強襲する。

鉦「こんなものおお…!!」

『捻れる空間』が爆竜を、その異常な、異質な空間へと引きずり込む。

右手を突き出し、必死にボールを受け止めようとするが…ボールの圧力に耐えきれずに腕は悲鳴を上げた。

そして…

『捻れる空間』を突き破り、遂に爆竜はゴールに突き刺さった。鉦の頬を掠め、ボールがネットに吸い込まれる。

角馬「ゴオオオル!! 3・3、シャドウと染岡のシュートで、雷門同点に追いついたあ!」

地木流「バカな、何だあのシュートは!？」

驚きを隠せない尾刈斗サイド。歓声と驚嘆の交錯するフィールドの真ん中で、染岡とシャドウは手のひらを重ねた。

シャドウ「ナイスアシスト。」

染岡「…おう!」

パン!と乾いた音が響き渡る。漸く2人のパスが繋がった。

1人では駄目でも、2人で力を合わせれば。勝率は上がる。天才達
がない雷門だからこそ出来た連携技だ。

風丸「『ドラグーンクラッシュ』と『ダークトルネード』が合体し
た…」

目金「ボールの軌道をコントロール出来る『ドラグーンクラッシュ』
と高い威力を誇る『ダークトルネード』が重なることで、かつて無
いパワーが生まれた…、『ドラグーントルネード』と名付けましょ
う！」

いつもはベンチからだが、今回は珍しくピッチの上で命名している。
そんな目金をスルーして、雷門イレブンは2人のストライカーを賞
賛した。

円堂「よし、あと1点取るぞ！」

「『おう！』」「」

守備一辺倒。先程とは全く逆の試合展開だ。

攻める雷門。守る尾刈斗。

現在、両チームの得点は3-3。試合残り時間は2分弱。次の1点
が勝負を決めるといつても過言ではない。

だが1点を欲しながらも正確にパスを繋ぐ雷門と、戦術も必殺技も
破られ、冷静さを失った尾刈斗では力の差は歴然だった。

見る見るうちにゴールとの距離を縮めていき、染岡とシャドウのダ
ブルシュートが発動した。

染岡「『ドラグーン』…」

シャドウ「『トルネード』…！」

暗黒の爆竜が唸り声を上げながら、ゴールへ直進する。

鉈「ク…『真・キラーブレード』オオオ…!!!」

TP切れを起こしたと見えて、鉈は『捻れる空間』ではなく尾刈斗のキーパー技の中では最下級の必殺技を使ってきた。

先程までの余裕はどこに消えたのか。右手に水色の刃を纏った鉈は慌ただしく、正に『13日の金曜日』宜しく奇声を発しながら『ドラグーントルネード』に特攻した。

しかし最大のキーパー技で防げなかったシュートを、最下級の技で防ぎきれぬ筈がない。

ボールに対して滅多矢鱈に斬撃を繰り出す鉈だが、その刀身は次第に崩れていき…遂には爆竜の息吹を受けて跳ね飛ばされてしまった。

「まだまだあ…!!」

だが…キーパーが競り負けてもなお、諦めない男が1人。

「『スカル・ザ・ブレード』V2』!!!」

幽谷だ。土壇場で必殺技を進化させ、シュートをブロックするつもりらしい。

彼も負ける訳にはいかない…左腕に巻いたキャプテンマークに誓つて。

幽谷「(このチームで上を目指すためには、こんな野良試合1つにしたって手を抜けない…絶対に弾き返してやる…!!)」

この場面、この状況。

諦めない精神を身につけるには、絶好のシチュエーションではない

か。

同点で迎えた後半終了間際。此処で気を抜いて失点するなど、絶対にあつてはならない。

幽谷の信念に影響されたらしく、死神も鎌を持つ手に力を込める。爆竜を叩き斬り、引き分けに持ち込むために。

幽谷「うおおお……!!」

幽谷の足の動きに合わせ、死神が持つ鎌に力が込められる。だが……突然体中が軽くなり、受け止めていた筈のボールの勢いが消え失せた。

勝ったのか、弾いたのか？

ボールを……奴らの決勝点となるであろう、そのシュートをつ……!

しかし幽谷は見た。ボールを弾いた訳ではなかった。

弾かれ、叩き折られたのは死神の大鎌の方だった。

幽谷の気合いも虚しく、ボールは突き刺さる。尾刈斗の最後の砦に。

そして鳴り響くホイッスル。

一瞬、静寂に包まれるグラウンド。

次の瞬間……歓声が辺りを支配した。

角馬「試合終了! 4 - 3で、雷門の逆転勝利だあつ……!」

円堂「よっしゃあ……! 俺達の勝ちだ!」

歓喜に包まれる雷門イレブン。

ベンチから見守るメンバーも、感動にその身を震わせる。

鬼道「…フツ。『ドラグーントルネード』か…手強い相手になりそ
うだな。」

木陰から試合の一部始終を見守っていた鬼道は、尾刈斗中に引導を
渡した雷門の新必殺シュートを見て、小さく微笑んだ。

土門「フットボールフェスティバルで雷門と当たるのが楽しみだな
。」

鬼道「ああ。…さて、そろそろ帰るぞ。今日こそ俺達の必殺タクテ
イクスを完成させるんだ。」

土門「え…!? 今日もアレやるのかよ…。」

ジャージを羽織り直し、正門へと歩き出した鬼道を見返しながら、
げんなりした顔の土門がそれに続く。

2人の背中に刻まれた『TEIKOKU』の文字は、いつ叶うかわ
からない雷門との試合を待ち望むかのように…真っ赤に輝いていた。

整理して挨拶を済ませた両チームが解散しようとする、幽谷が近
づいてきた。

幽谷「雷門中…今回は俺達の負けだ。この負けは俺達自身の戒めと
して覚えておこう。だが次は負けない。もっと強くなって、全国の
頂点に立ってみせる。」

円堂「ああ、いつでも相手になるぜ！またサッカーやろうな！」

こうして、フットボールフェスティバルの前哨戦は雷門の勝利で終
わった。

だが只の勝ちではない。

円堂の気合い、DF陣の踏ん張り、MFの奮闘、マネージャーのサポート、監督の采配…そして、新たなFWコンビの共闘。全員で勝ち取った一勝なのだ。

天才達を欠いた新生雷門イレブンが勝ち取った初勝利。

それはこの先フットボールフェスティバルを戦っていく中で自信に繋がる筈である。

試合も終わり、観客達も徐々に引き上げ始めた。

しかしそれでもまだグラウンドを離れず、雷門サッカー部をじっと見つめる少年がいた。

帝国の2人組同様、木陰から試合を見守っていたその少年は、銀縁眼鏡を掛け直すと小さく息を漏らした。

「あれが雷門サッカー部…サッカー協会から調査指示が出ているチーム、ですか。」

黒い髪を撫で、独り言を呟く。

学ラン姿のその少年の襟元には、四つ葉のクローバーを象ったバッジがついている。

彼は一通り雷門の偵察を済ませると、他の観客らに混じって雷門中を去って行った。

第10話 開幕、フットボールフェスティバル

雷門中が尾刈斗中との練習試合を終えてから一週間後の土曜日。ついにこの日、フットボールフェスティバルが開催される。

開会式の参加のため、円堂達は会場の北東京にあるタイタニックスタジアムを訪れていた。

古株「よし、着いたぞい。」

渋滞気味の交差点を曲がり、噴水が吹き上がる公園の角を右折すると、いよいよ目的地が見えてきた。

円堂「これがタイタニックスタジアムか…」

イナズマキャラバンの窓を開け、身を乗り出すようにしてその威厳のあるスタジアムを見上げる。

まだ完成して間もないというのに、まるで何年も前からそこに居を構えていたかのような、堂々とした立派な外観。

フットボールフロンティアの試合会場だったフットボールフロンティアスタジアムより一回りも二回りも、それ以上も大きいこのスタジアムは、これから北東京の顔としてその名を轟かせることになるだろう。

噂では、来年のFF全国大会は南東京のフットボールフロンティアスタジアム、ここ北東京のタイタニックスタジアムの両会場を使って行われるらしい。

そんなスタジアムの入り口前には、フットボールフェスティバルの

参加が決まったチームがひしめき合っている。
キャラバンを降りた円堂らは、その圧倒的な人数と熱気に目を見張った。

風丸「なんか…流石国内最大級の大会って感じだな。」

圧巻の光景に、漸く言葉が出た。

何しろ1024チームもいるのだ。開会式に集まる選手の人数はフツーじゃない。

参加チームが多過ぎて選手が会場に入りきれないので、各チーム代表5名のみがこの会場に集まっているのだが、それでもかなりの数がいる。

円堂「すげえ…すっげーよフットボールフェスティバル！みんな強そうな奴ばっかりだ！ワクワクするぜ！」

風丸「円堂…気持ちはわかるがはしゃぎ過ぎだ。もうすぐ開会式も始まるし、早く受け付けを済ませないと…」

人目も気にせずはしゃぎまくる円堂に呆れ返りながら、風丸と染岡が両脇から円堂を確保して会場内へ引つ張っていく。

そんな雷門から少し遅れて、新たなチームが会場に到着した。

「なんだ…どいつもこいつも、弱そうな奴ばかりじゃねえか。」

逆立った短髪を金色に染め、両耳には髪色とは対照的な銀のピアスが輝いている。だらしなくジャージを着崩したその少年は、周りに蔓延る選手達を威圧すると余裕の笑みを浮かべた。

「そうか？みんないい面構えしてるじゃん。熱い戦いが期待出来そうだぜ！」

金髪の脇に立つた屈強な体格の坊主頭がそれを否定する。気だるそうな金髪との組み合わせが不釣り合いなほど、その坊主頭は熱いスポーツマンに見えた。

「おい2人とも。置いていくぞ。」

会場前に佇む2人に一瞥をくれた灰色髪の男が、彼らを促してスタジアムに入っていく。その雰囲気から察するに、どうやらこの男がキャプテンらしい。

坊主頭は素直にそれに従ったが、金髪は暫くそこに留まっていた。

「ま、相手が誰であれ優勝は俺ら不祥寺中ふしょうじで決まりっしょ。何たって『プレデター』の異名を持つ俺様：遠井 宇宙（とおい そら）がいるんだからよ。」

雷門、不祥寺に引き続き、続々と参加チームがスタジアムに集まってくる。

そして午前9時。

1から16のブロックに分けられたチームが順番に入場：ピッチに広がる緑色の海を横断する。

各チーム5名しかいないため見栄えはあまりパツとしないが、色とりどりのユニフォームを着た選手達が姿を現すと、スタンドからは歓声が沸き起こった。

第1ブロックの最前列にいるのは、円堂 守をキャプテンとする東 京都・雷門中学校。

雷門の隣には、深緑色が王者のプライドを感じさせる帝国学園。秋葉名戸や御影専農など、FF地区予選で戦った学校の姿もある。

彼らだけではない。

サッカーが盛んな静岡県内で常にトップに君臨している名門校・木戸川清修中学校。

長らくFFには未参加だったため、公式大会初出場の北海道・白恋中学校。

イナズマキヤラバンに参加し、地上最強のチームとして雷門ユニフォームに袖を通したメンバーも、それぞれの中学校の一員として出場するようだ。

どういう訳か、精神の鍛錬を目的とし、試合は行っていなかった漫遊寺中までもが開会式に参列している。

様々なチームが顔を揃える中、進行役の男の威厳のある声が響いた。選手達の正面でマイクを握る司会を務めるその男は、サッカー協会最高幹部の一人・利根川。

彼の進行のもと、開会式は進んでいく。

サッカー協会会長・久仁 統（くに おさむ）、内閣総理大臣・財前 宗助による大会開催の挨拶。

利根川と同じくサッカー協会幹部の黒崎による、試合のルール説明。

気分が高揚して暴れ出す者もなく、式は極めて円滑に執り行われた。だが円堂としては退屈で仕方がない。早くサッカーがしたいのだが、この開会式とやらは中々終わらない。サッカーがしたくて、体がムズムズする。今日は開会式のみで、一回戦が始まるのは明日の日曜日から。すぐにでも学校に戻って練習したいのだが…まだこの式典は終わる気配がない。

周りの選手や隣に並ぶ鬼道などは身じろぎ一つせず話を聞いている。最前列にいるためにきよるきよるすることも出来ず、円堂は目だけで辺りを見回した。

開会式に出席した財前総理を護衛するために、SPファイクサーズが控えている。

サッカー協会の上層部や、超次元サッカーファンとして知られるレベルファイブの社長・日野 晃博氏の姿もある。

今、日本国内で一番国民の関心が高いスポーツの大会であるだけにテレビ局のスタッフや新聞社の記者達の姿も多い。

そこでふと、円堂は正面に立っている利根川の真上…放送席の脇に、何者かが佇んでいるのを見つけた。

そのスペースは本部席の真上にあたるため、観客の立ち入りは禁止されている。にもかかわらず、その何者かは隠れるようにして選手達を見下ろしている。

円堂「…誰だあいつ？」

その者に気づいた選手は、円堂の他にはいないようだ。知らず知らずのうちに…円堂の視線はそいつに釘付けになっていた。

「…この1024の中から、最強の1チームが決まる。この国の中学サッカー界を支配する、王たるチームが…」

放送席の脇に身を潜め、眼下に広がる人間の絨毯を見下ろしながら、『彼』はくぐもった声を発した。

黒いローブに身を包み込み、目深に被ったフードの下からは純白の仮面が覗いている。

『彼』は腕を組みながら、レベルファイブ社長の挨拶を聞いていた。社長の挨拶にはやたら『熱い勝負』やら、『あっと驚く展開』という単語が含まれている。

馬鹿馬鹿しい。熱い勝負など存在しない。あるのは終末のみだ。

口ばかりの…口先三寸の男。

この戦が終了したあと、『あつと驚く』のは社長の方かもしれない。そもそもこの男は、レベルファイブがスポンサーを務め、社長自身が監督をしていたサッカークラブを何者かに襲撃され潰されている。もうそのことを忘れたのか、のうのうとこの場に姿を現したことが『彼』には信じられなかった。

「まあいい。俺の理想を実現するためにも、選手の健闘を…俺の手駒となるに相応しい、最強の『切り札』が生まれることを、祈ろう…！」

『彼』の発したくぐもった声は、晴れ渡る秋空に吸い込まれていく…

- 雷門中 -

その頃雷門中に残った他のメンバーは、明日の試合に向けて各自で練習を行っていた。

ある者はパス練習、ある者はランニング。各々が自主練に励む中、目金はというとベンチでしきりに唸っていた。

大谷「ねえ秋ちゃん、目金君は練習しなくていいの？」

木野「彼はいつもこうなの。『僕は練習しなくても強いのです！』とか言ってる…」

思わず大谷は苦笑する。確かにこの前の練習試合での活躍は目を見張るものがあったけど、雷門サッカー部全体で見ると、目金のステータスは下の方だ。

彼が練習に参加しなくても他の部員が咎めないところなので、どうやら戦力として見られていないらしい。

木野「目金君、何を考え込んでるの？」

唸り声が耳についたのか、たまりかねた木野が目金に話しかけた。

目金「木野さんは気になりませんか？彼のプレーが…」

木野「え？」

目金の視線の先を目で追うと、1人でリフティングしようとする飛鷹の姿があった。ボールを足の上に落とし、蹴り上げるまでがいいが、そこから先が続かない。連続で2回やるのが精一杯だ。

目金「見てください、あのぎこちないプレーを。まるで素人です。

僕より下手かもしれませんよ。」

木野「（自分が下手なの自覚してたんだ…）そ、そうだね。」

目金「何故響木監督は彼をサッカー部に入部させたんでしょうか？」

言われてみれば…

確かに不思議だ。言い方は悪いが、飛鷹のあの実力では到底戦力になるとは思えない。

東のように自分の意志で入部してきたなら兎も角、監督がわざわざ選んできたのだ。何かしらの力を持っているのだろうか？

五郎「飛鷹さん、一緒にパス練習しませんか!？」

ボール相手に悪戦苦闘する飛鷹の所へ、五郎が走り寄ってきた。尾刈斗との練習試合で一緒にDFを務めて以来、五郎は飛鷹に仲間意識を持ったらしく、よく一緒に練習している。

五郎「行きますよ、それっ！」
飛鷹「…っ！」

五郎は上手く飛鷹の足元に蹴ったのだが、ボールは飛鷹の右足に当たってあらぬ方向へ飛んで行ってしまった。

東「ん、なんだこりゃ…」

転がったボールは地道に腹筋をする東にぶつかり、止まった。先週の練習試合で1人だけ最後までピッチに立てなかった東は、兎に角基礎体力を付けるために1人で特訓を始めていたのだ。

東「おい、飛鷹ー！」

走り寄ってきた飛鷹にボールを放りながら、東が体を起こした。

東「俺もパス練習に混ぜてくれよ。」

飛鷹「…好きにしろ。」

筋トレも良いけど、やっぱりサッカーやるならボールに触れないとと自分に言い聞かせる。

新加入の3人組は三角形に広がると、各々が取りやすい速さでパス回しを始めた。

…そんな中、妙に浮いてしまっている部員が1人いた。

FF優勝時のメンバーは何となくいつも一緒に練習をしているため、今回も一緒に実践形式の練習に励んでいる。

新加入組は、バラバラで個人練習をしていたがいつの間にか3人で

パス回しをしている。

だが…FF時のメンバーでもなく、新加入組でもないこの男 閻野 カゲトは、どちらのグループに入ることも出来ずに1人で無人のゴールを相手にシュート練習をしていた。

普段は染岡や円堂と練習するのだが、残念なことに彼らは開会式に出ているので今日は不在。エイリア編唯一の加入者である彼は、不良でアウトローな飛鷹以上にチーム内で浮いていた。

「閻野先輩」

そんな彼を惨めに、そして哀れに思ったのか…元新聞部の一年生マナージャーが声を掛けた。

シャドウ「俺に何か用か…？」

音無「何だか先輩が独りぼっちだったから放つとけなくて…」
シャドウ「…フン。」

会話はそこで終了し、シャドウは再びシュート練習を再開した。ボールはゴールネットに吸い込まれ、シュルシュルと音を立てた。

音無「…？ あれ、先輩の首筋にあるそれって何ですか？」

音無は気づいた。普段は襟まで伸びた長い銀髪に隠れているのでわからなかったが、シャドウの左の首筋に一筋の傷跡がついている。その部分だけ赤黒く変色し、見ただけでも痛々しさが伝わってきた。

シャドウ「これは…」

傷跡に触れ、シャドウは目を伏せた。

途端に彼の脳裏にフラッシュバックする、とある記憶。

シャドウ、これが俺の力だ…！

声が聞こえる。抉られた地面が見える。倒れ伏す仲間が見える。血の匂いが漂う。崩壊した建物。崩れ落ちる自分。

そして…そして

「…先輩？」

音無の言葉で我に返る。

ほんの一瞬の筈なのに、だいぶ多くのことを思い出した気がする。

シャドウ「この傷は…決別の証だ。」

音無「決別？誰と決別したんですか？」

シャドウ「…さあな。」

音無「お、これはもしかして…『シャドウの過去編』へのフラグですかね？」

悪戯っぽく微笑み、上目遣いでシャドウを見上げる。

シャドウは敢えて何も言わずに、また黙々とボールを蹴り始めた。

「（あれ、待てよ…？）」

音無の頭に浮かぶ、一つの疑問。

「（閻野先輩は、何で前の学校に戻らないんだろう…）」

そう、このフットボールフェスティバルに雷門が参加するには、条件があった。

今や日本一のチームである雷門は強過ぎるので、ハンデとして転校

などにより途中から加入したメンバーは前の所属チームに戻らなければならぬ。

途中から加入した部員といえば、豪炎寺を筆頭に土門、鬼道、一之瀬がそれに当たるが、正確には5人目：エイリア事件中に雷門入りをした男がいるではないか。

闇野 カゲト。イナズマキャラバンが出発した直後に転校してきた少年。その微妙過ぎるタイミングとエイリア事件の重大さに誰もが注目していたため、シャドウが転校してきたことなど誰も気に留めていなかった。

事件が解決した直後の部活では、いつの間にかサッカー部の一員になっていたため、「こいつ誰だっけ？」と疑問に思う者も少なくなかったとか。

豪炎寺程では無いにしろ、シャドウも相当の実力派だ。それは、尾刈斗との練習試合で実証済みである。

飛鷹のように初心者なら兎も角、ある程度の実力があるなら前の学校に戻らなければならないのではないか？

シャドウが残留することに対して、サッカー協会からのお咎めはない。つまり協会側も黙認している。
何故？

「（これは…新聞部としては、調べたくなっちゃいますね〜！）」
ジャージのポケットからピンク色の手帳を取り出し、1人ほくそ笑む音無であった。

・タイタニックススタジアム・

開会式は何の問題もなく無事に終了し、出席した各チームは徐々に

引き上げ始めた。

円堂「鬼道、いよいよフットボールフェスティバルが始まるんだな！」

鬼道「豪炎寺や吹雪も参加している…厳しい戦いになりそうだ。」
土門「ま、俺がいるからには帝国の優勝は固いけどな！」

開会式で整列した際隣同士だった雷門と帝国。

帝国側は鬼道に土門、佐久間、寺門、源田が出席していた。

暫く談笑した後、帝国は外で待っていた他の一軍メンバーと共に去って行った。

円堂「帝国か…早く戦いたいぜ！」

壁山「じよ、冗談きついツスよキャプテン…鬼道さんに土門さんがいるなんて、手強いから当たりたくないっていうか…」

染岡「バカ、お互い勝ち抜きゃいつかは戦わなきゃならねえんだびびんなよ。」

帝国学園は鬼道と土門をチームに迎えてから、更に力をつけたらしい。

楽天家の土門の口振りだと、『秘密兵器』とやらもあるとか。

いつぶつかるにしろ、壁山の言う通り手強い相手になる。豪炎寺擁する木戸川清修中や、吹雪のいる白恋中も間違い無く上位に食い込んでくる筈だ。

円堂達が口々に参加チームについて語り合っていると…目の前にボールが転がってきた。

栗松「！？…これ、どこから転がってきたでヤンスか？」

「おい、そのボール返してくれーっ！」

紺色のジャージを着た少年が、ドタバタと走り寄ってきた。ニコニコした彼は栗松からボールを受け取ると、円堂達の着ている青色ジャージを見て目を丸くする。

「そのジャージ…君達雷門中か!？」

円堂「ああ、そうだけど…」

「へえー、あの雷門サッカー部の人に会えるなんて感激だなあ…」

壁山「な、何だか照れるツスね…」

少年はひとしきり雷門中の選手に出会ったことに感動した後、思いついたようにこんなことを言い出した。

「よし!君達、俺とサッカーバトルしようよ!」

「『え!?!』」

驚く円堂達を余所に、少年は早速地面にボールを置いて足で転がし始める。

「あの椀の木とゴミ箱の間をゴールにしてさ、君達がそれを守って俺が突破して点を決める。守り切れたら君達の勝ちで、点を入れたら俺の勝ち。やらない?」

相変わらずのニコニコ顔で、円堂達を見つめる少年。その人懐っこい笑顔に毒気を抜かれたか、敵つい顔の染岡までもが警戒心を解い

たらしく、強ばらせていた肩が下がっていた。

円堂「良いぜ、やろう！」

「そこなくっちゃ…」

サッカーバトルの承諾を得られたのが嬉しかったようで、少年は満面の笑みでボールを蹴り上げた。

* * *

こうして、突然雷門サッカー部VSニコニコ少年のサッカーバトルが始まった。

少年の「ただ一方的に攻めるだけじゃつまらないから」という理由で、少年側にもゴミ箱とカラーコーンを使ったゴールが設置されている。

要するに、雷門側は守るだけでなく、攻めることも可能になった訳だ。

だがこれはあまりにも無謀なゲームである。

お互いにゴールを設置しての単純なバトルだが、雷門の選手が5人に対して相手は少年1人だけ。

一応ハンデとして少年の先攻になっているのだが、一度ボールを奪われたら取り返す隙もなくシュートを決められるだろう。

風丸「(余程自分の力に自信があるのか?)」

こうまでこちらが有利だと、相手に何か秘策があるのではないかと勘ぐってしまう。それは栗松や壁山も同じらしく、ディフェンス陣を統率する風丸の指示を仰ぐように、心細げな視線を送ってきた。

「あのさ…」

いざゲームを始めようとすると、少年が遮った。肩透かしをくらった染岡が彼を睨みつけると、少年はびっくりしたように肩を竦めた。

染岡「またルール変更かよ…」

「違う違う、これってさ、1点取った方が勝ちのゴールデンゴール形式で良いんだよね？」

染岡「ああそうだよ。早くかかって来な。」

苛立ちを抑え、再度染岡達が構え直す。

負ける筈はない…という自信が、雷門サッカー部に活力を与える。

「よし…じゃあ行くよー！」

遂に少年が動き出した。

最初はゆっくり、徐々にスピードを上げてドリブルしてくる。まずは染岡が立ちほだかるが、噛ませの悲しき運命か…敢えなく突破されてしまった。

染岡「何…!？」

続いて栗松が突っ込んでいくが、これもまた容易く突破されてしまった。

ボールが吸い付くようなドリブル。綺麗なフォームで走る少年は、最後尾から見守る円堂から見ても、今までに出会ったプレイヤーの中で一番ドリブルをしていた。

「さあ…ボールに生命を吹き込んでやる！」

気のせいだろうか…少年のドリブルスピードが一段階上がった。それと同時に、ボールも跳ねるようにしながら少年の周りで踊り回る。本当に生きているかのように舞い踊るボールを見ているうちに、壁山は動く暇もなく突破されていた。

風丸「進ませない！」

これはまずい、と状況を見守っていた風丸が飛び出してきた。全身に風を纏い、水色の弾丸となって少年に襲い掛かる。

「うわっ！」

弾丸に行く手を阻まれ、ボールを取り落としてしまう。全身を包んでいた水色を解いた風丸がボールをキープする。

円堂「良いぞ、風丸！」

背後からキャプテンの声援を聞きながら、風丸は自身を包み込んだ心地良い風を感じていた。正に疾風の如きスピードが生み出した、新たな力の産声。

これを鍛えれば、待望のディフェンス技を生み出せるかもしれない。

風丸「染岡！」

風の余韻に浸る間もなく、前線の染岡にボールを送る。

染岡「こんな勝負端っから俺達の勝ちが決まってたんだ…」

無人のゴールを見て、点取り屋が小さくぼやいた。
1人と5人じゃ、戦力が違う。少年に勝ち目が無いのは明らかなのだ。

染岡「さっさとこんな勝負終わらせてやる…！」

ボールを受け取るやいなや、ダイレクトでそれを蹴り飛ばす。
誰もが決着を予感したのだが…

ゴールが割られることはなかった。ボールは、ゴール前に割り込んできた何者かの足に当たって跳ねた。
この勝負…少年側に仲間がいたのだろうか？

いや違う。染岡のシュートを弾いたのは、先程風丸にボールを奪われた少年本人。なんと、雷門のゴールから自身のゴール前まで瞬時に駆け戻っていたのだ。

染岡「何!？」

「ふう〜、危なかった…」

しかも瞬間的にゴール前までダッシュしたにも関わらず、殆ど息が上がっていない。
ドリブルスピードもさることながら、瞬発力とスタミナも常人のそれを遙かに越えている。

「さ、反撃開始だ！」

…その瞬間、一陣の風が雷門サイドをズタズタに切り裂いた。

風丸「速い…！」

気がついた時には、風丸も染岡も、栗松も壁山も抜き去られていた。15メートル近いフィールドを一瞬にして駆け抜けた少年は、一旦ドリブルを中断すると円堂と対峙した。

「さあシュートだ！」

風丸「まだまだ…！」

抜き去られてもなお、飛びかかろうとする風丸。

それに呼応するかのように、他のDF2人も少年に向かっていく。

ゴール前の混戦。目前に迫っていた筈の簡素なゴールは、幾重にも群がった雷門ジャージによって埋め尽くされてしまった。

だが少年の脳裏には、シュートを決める映像がしっかりと刻まれていた。

勝利のビジョンが見える。

それは空想でも妄想でもなく、数秒先に実現する確定した未来。

風丸達を取り囲み、FWの染岡までもがボールを奪おうと足を伸ばす。少年はゴールに背を向ける形でボールを守らねばならなくなつた。

だが何も恐れる必要はない。頭に浮かんだビジョンの通りに、ボールを蹴り出せば良いのだから。

右足の甲にボールを乗せ、思い切り後ろに蹴り上げる。無意識に見

える動作だが、守備陣がそれに気を取られた僅かな一瞬を突いて少年はバックステップで飛び出した。混戦を制した少年の爪先がボールを弾き、円堂が反応する間もなくゴールに吸い込まれた。

転々と転がる、白と黒のボール。

シーンと静まり返る広場。

言葉を失う雷門の選手と、体を震わせて歓喜する少年。

「くう〜、やったぜ！雷門中から1点取ったんだ…」

円堂「こいつ…」

凄い奴。素直にそう思う。

4人に囲まれながらも、得意の吸い付くドリブルでボールに一切触れさせず、更に後ろを向いたままボールを蹴ってゴールに入れた。強いプレイヤーだ。

円堂「すげえなお前！一体どうやってたらあんなプレーが出来るんだ！？」

肩を掴んで揺さぶる円堂にたじろぎながら、少年は照れくさそうに頬を掻いた。

「頭に浮かぶんだ。自分がシュートを決める映像が。俺はその映像に従ってるだけだよ。」

円堂「シュートを決める映像…マジでそんなこと出来るのか？」

「まあね。もう一勝負する？今度は俺の必殺シュートを見せてやるけど…」

「おい、こんな所で何してる。」

突然、低い声が辺りに響き渡った。途端に少年の顔が凍りつく。

「キャ、キャプテン…」

物陰から姿を現したのは、紺色のブレザーに身を包んだ5人の少年達。どうやら開会式に参加した者達らしい。

「お前はまた余所のチームに迷惑掛けて…」

先頭にいた短髪が、つかつかと少年に近づくと頭に拳骨を落とした。少年の目から星が飛び散り、星と共に涙が流れる。

「えーと、我々は埼玉・海王学院中学の者ですが、うちの部員が何か失礼を致しましたか？」

この短髪はキャプテンらしく、円堂達に頭を下げた。

円堂「いや、そんなこと無いですよ。とても楽しいゲームが出来ました。」

「そうですか…なら良いのですが。では我々はこれで失礼します。

…ほら轡平、帰るぞ。」

「ひゃ、ひゃい(泣)」

短髪に頬を抓られながら、少年が涙を流して去っていく。円堂はふと、あることが気になって少年に声をかけた。

円堂「待ってくれ…俺は雷門サッカー部の円堂 守。お前、名前は？」

少年はピタッと立ち止まると円堂の方を振り返って口を開いた。

「俺は轍平…隼 轍平(はやぶさ てっぺい)だ。」

少年…隼は、もう一度ニッコリ笑うと、先輩達に混じって帰って行った。

これが、圧倒的な加速力を持つドリブルと、脳に焼き付けられる勝利のビジョン…一歩先の世界を見る類い希なる才能を持つ隼 轍平との、最初の対決だった。

不祥寺、桜咲木、そして海王学院。

全国の新たな強豪が動き出す。

フットボールフェスティバル、開幕である。

第11話 鳴神と過去と永久欠番

遂に開幕した、少年サッカー日本一を決める祭典・『フットボールフェスティバル』。

初戦を明日に控えた各チームは、来たるべき戦いに備えて思い思いの時間を過ごしていた。

- 静岡県 -

開会式が終了した後、すぐにバスに揺られながら故郷へと戻った桜咲木中サッカー部。

サッカー部復活の切っ掛けである転校生、出雲 天馬や、彼の入部を認めたキャプテンの代田 満は一体何を思うのか…

ミーティングを終えて、1人また1人と部室を後にしていく。出雲が初めてサッカー部を訪れ、フットボールフェスティバルへの参加を決めてから…桜咲木イレブンは徐々にやる気を取り戻しつつあった。何か切っ掛けが欲しかったのだ。忌まわしい過去から解放されて、再度ボールを追い掛けるための切っ掛けが。

やがて部室に残ったのは、代田と出雲の2人だけになる。

代田は大会要項に目を通しており、出雲は初めての自分のユニフォームやスパイクを嬉しそうに手入れしていた。

実のところ、代田が出雲と二人きりになるのはこれが初めてだった。お互いに何を話して良いのかわからず、ただ無言の時間だけが過ぎていく。

ドアをノックする音が聞こえたのは、出雲が漸くバッグに道具をしまい始め、代田が腰を上げた時だった。

代田「（誰だ？他の部員が戻ってきたのか？）」

代田がドアノブに手を掛けようとする、彼の返事を待たずにドアが開いた。

入り口に立っているのは、薄いピンク色の髪が特徴的な少女。

代田「支倉…」

「久しぶりね、代田君。元気にしてた？」

支倉 美月（はげくら うつき）。元桜咲木中サッカー部のマネージャーで、中学3年生だ。サッカー部が崩壊してからはやる気のない部員達に愛想を尽かし、他のマネージャー共々受験勉強に勤しむようになっていた。そんな彼女の登場に、代田は面食らった。

代田「お前…何でまた急に…」

支倉「サッカー部が大会に出るからって聞いて。またマネージャーやろうかな…と思ったの。」

そこで彼女は言葉を切ると、代田の背後でユニフォームを抱えている出雲に目を向けた。

支倉「キミが出雲君か…私、代田君の幼馴染みの支倉 美月。よろしくね。」

出雲「はあ、よろしくです…」

支倉がにこやかに微笑むと、ピンク色の長い髪がさらさらと揺れた。

代田「悪いが今日はもう帰ってもらえないか。明日早いんでな。」

支倉「あら、別に良いじゃない。折角久しぶりに顔を合わせたんだ

から。廊下で会ってもシカトするし、帰り道じゃそそくさと帰っちゃうし。これでも結構つらかったんだよね。」

そう言いながら、彼女は代田を押し退けて部室の中に踏み込んでいく。床に散乱した雑誌や埃だらけのロッカーに顔をしかめ、支倉は部室をゆっくりと見回した。

支倉「うわ、汚い…やっぱり男ばかりじゃ駄目よね。益々マネージャーが必要みたい。」

床に落ちた雑誌を拾い上げ、埃をパンパンと払う。本棚にそれを戻した時、彼女の目は本棚の隣に貼られた一枚の写真に向けられていた。

支倉「鳴神君が死んでから、もう2ヶ月経つのね…」

どこか寂しげに呟く支倉は、その写真を指で撫でた。

代田もいつの間にか彼女の隣に立ち、じっとそれを見つめている。

「あの…誰ですか、『ナルカミ』というの…」

辛気臭い2人に付いていけないことにもどかしさを感じたのか、出雲が話に加わってきた。

支倉「…そっか。キミはまだ知らないんだよね。鳴神君のこと…」

代田「鳴神 雷輝（なるかみ らいき）。桜咲木中のエースストライカーだ。唯一無二、そして永遠の、な…」

徐に口を開いた代田が出雲に語ったのは、桜咲木中サッカー部のエースストライカーと、このサッカー部が腐敗する切っ掛けとなった、

ある事件の一部始終だった

* * *

代田と支倉、そして鳴神の3人は幼稚園からずっと一緒に幼馴染み。小さい頃から3人一緒に行動してきた。

中学に入っても、3人の結束力は変わることはなく。

小学校の頃からサッカーをやっていた代田と鳴神は、当時のチームメイトだった清村 テルに誘われてサッカー部に入部。支倉もマネージャーとしてサッカー部に入った。

もうその時は既にサッカー部はフットボールフロンティアを含む公式大会への参加を無期限で出場停止とされており、先輩達も腑抜けになっていたのだが、代田や鳴神の働きかけによって練習試合だけはどうにか組んで貰えるようになった。

思えば最初の練習試合から、鳴神はずば抜けたサッカーセンスを見せつけていた。

雷鳴が轟くが如きスピードでピッチを切り裂き、右足を振り抜けば雷がゴールを揺らす。

無期限出場停止の学校に隠された、『雷のストライカー』として、地元でもとても評判になったのを覚えている。

2年生の夏休み、静岡県内でもトップレベルの実力を誇る名門校・木戸川清修中と練習試合を組んで貰えた。その時木戸川はフットボールフロンティアの地区予選を終えており、全国大会に向けてのレベルアップを兼ねて桜咲木を誘ってくれたのだ。

1年生ながらも猛者の蔓延る木戸川で10番を背負う豪炎寺 修也と、無名校に輝きを齎す天才FWの鳴神 雷輝。『炎のストライカー』と『雷のストライカー』の対決は、ちょっとした話題になった。

結果は5 - 2で木戸川の勝利。だが桜咲木が奪い取った2点は、鳴神が決めたものだった。

しかもその2点とも、木戸川の守備陣を見事なプレーで突破し、敵のGKが技を放つ隙もなくシュートを決めていたのだ。

もし、ゴール前で鳴神にもっとボールが渡っていたら。木戸川が負けていたかもしれない。

電撃を纏ったシュートもさることながら、個人技の高さが目立つ選手。

そんな選手をサッカー界が放っておく訳がない。

木戸川戦以後、沢山のサッカークラブからスカウトの誘いが舞い込むようになった。

石ノ森S.C、東京ELEMENTS、茅ヶ崎ジュニアーズ、ジェンナード岩槻：日本中のサッカークラブが類似希なる力を持つこのストライカーを育てるべく、オファーをしてきた。

ある日、明紋FCというチームが鳴神をスカウトしにやって来た。

『フィールドの魔術師』という天才MFがアメリカに留学したので、人員の補強のために鳴神を明紋で育てたい、ということだった。

そのスカウトは他のクラブに比べて粘着質で、断っても断っても、鳴神の前に現れ続けた。

スカウトが桜咲木を『ダイヤの原石を濁らせる吹き溜まり』と侮辱し、それにキレた鳴神が「俺はこのチームでしかサッカーをしない！」と啖呵を切るまで、その粘着質なアプローチは続いた。

鳴神の堅い意志を悟ったからか、それ以降どのチームからもオファーは来なくなつた。

だが：安心したのも束の間。今度は仲間から妬まれることになって

しまった。

無理もない。毎日のようにサッカークラブからのスカウトが来るのだから。しかもそれは自分達がいつもプレーを共にする一個人に向けられるものであり、それ以外には目もくれない。不愉快極まりない話だ。

鳴神に嫉妬の視線を浴びせたのは、代田も同じ。

それまで同じ土俵で戦っていたと思ったのに、急に鳴神のいる場所が遠い異世界に思えてしまった程だ。

3年生になり、新体制となった桜咲木サッカー部は11人ぎりぎりしかない存続出来るかも危ういチームになった。

これは部員の殆どを去年の3年生が占めていたことが原因である。

また、比較的他校に顔の利いた監督が異動になったことで、練習試合もあまり組めなくなった。

* * *

出雲「あ、あの、ちょっと良いですか？」

代田「なんだ。」

出雲「この何の事件も起きない過去話がずっと続くのですか？」

支倉「アハハ、確かに退屈よね」代田君昔から話が長いし（笑）」

代田「…出雲、お前案外失礼な奴だな。」

コホンと咳払いを一つして、代田は再び真剣な表情になった。その目はどことなく寂しげで、出雲は瞬間的に、いよいよ鳴神に何が起きたのかを語られると察した。

代田「無駄な時間経過を端折って、あれは今年のフットボールフロンティア地区予選が開催された時のことだ」

* * *

地区予選が開催された頃から、鳴神の様子がおかしかった。どこか上の空で練習に身が入らなくなり、かと思えば、急に周りに怯えてキョロキョロと辺りを見回したり。活気もなくなり、明らかに以前の鳴神ではなくなっていた。

そしてそんな鳴神の様子を誰もが不審に思う中、とうとう歯車は音を立てて狂い出した。それまで微妙に噛み合わなくなっていた、鳴神の運命という名の歯車。それが遂に壊れた。

事件があったその日、いつまで経っても鳴神が練習に顔を見せない。いつも誰よりも先にグラウンドに来てボールを蹴っている筈のあいつが。

代田達がそれでも気にせず談笑していると、マネージャー達が泣きながら校舎の方から走って来た。

駆け抜ける戦慄。思わず声を漏らす者と、絶句する者。

「嘘…でしょ？」と、支倉が口に手を当てて目を見開く。

鳴神が、大型トラックに跳ねられたのだ。学校に来る途中の通学路、代田や支倉と一緒に通ってきた道で。

皆が病院に駆けつけた時、鳴神は集中治療室にいた。

アニメやドラマでしか見たことのないシチュエーションに、誰もが戸惑い、嘆いていた。

そしてそれ以上に、鳴神の無事を祈っていた。

漸く治療室から出て来た担当医は、奇跡的に一命を取り留めたと言

った。
だが安堵したのも束の間。その後彼が続けた言葉は、鳴神にとって死ぬより残酷なことだったと思う。

鳴神の右足は、膝から下が無くなっていた。

桜咲木サッカー部を引っ張る雷のストライカーは、こうして選手生命を断たれた…

そして。鳴神 雷輝に関わる物語のクライマックス。
入院した鳴神の下へ、代田達は何度も訪れた。しかし彼は生返事を繰り返すばかりで全く覇気がなくなっていた。まあ足を失い、サッカーが出来なくなったのだから当然だが…

入院してから二週間後、鳴神は『飛んだ』。

見舞いに来た代田達の目の前で、5階の病室の窓から。

鳴神は生気のない目で代田達を見下ろし、何の迷いもなく飛び降りた。

代田の目には、それからの出来事が全てスローモーションに映った。目を見開いたまま、地面に落下する友人。頭からアスファルトに直撃した彼の体は、2度バウンドして仰向けに転がる。

スイカを潰したかのように真っ赤に割れた頭からは、血液が溢れ出し、脳がはみ出ている。手足は在らぬ方向に曲がり、頭と同じく潰れた顔からは破壊を辛うじて逃れた眼球が代田達を見据えていた。大きく身を擦って、鳴神は息絶えた。あろうことが、切断された右足の断面を仲間達に見せつけるようにして。

その肉塊に、最早生前の面影はなく。

支倉やマネージャー達の絶叫が辺りに木霊して、病院は騒然となった

* * *

代田「…という訳だ。鳴神の飛び降り自殺を間近で見た俺達は、もうサッカーをやりたくなくなった。二ノ前は凶太いから、すぐに立ち直ったけどな。」

出雲「そんなことが…」

嘗て桜咲木中サッカー部でストライカーを勤めていた男の凄惨な最期を聞いて、出雲は二の句が継げなかった。

代田「…今考えてみると、あいつが事故に遭ったことに関連して一つ謎があるんだ。」

支倉「謎？」

代田「覚えてるか？あいつ…事故に遭うちょっと前から様子がおかしかっただろ。自殺の原因はサッカーが出来なくなっただけじゃなく、あいつがおかしくなったことも関係してると思うんだ。」

言われてみれば。支倉の脳裏には、事故に遭う直前の鳴神の姿が浮かんでいた。

何かに怯えるように、油断なく辺りに視線を向ける鳴神。明らかに顔色は青ざめ、何か恐ろしいものから逃れるみたいに、震えていた。一体、何が彼を追い詰めていたのだろうか…

代田「まあ辛気臭い話はこれくらいにして…出雲、鳴神のプレー見してみるか？」

出雲「え…？」

代田がロッカーをぐそぐそと漁り、一枚のDVDを持ち出してきた。表面には『H・23・4・8 VS 倫堂学院』と書かれたラベルが貼ってある。

代田「試合の前に、お前の先輩のプレーを見ておくのも悪くないだろ。」

言いながら、部屋に置かれたノートパソコンを起動しディスクを挿入する。

数分の後、画面に現れたのは、大歓声の中ドリブルする少年だった。

出雲「凄い…」

素人の出雲から見ても圧巻の光景だった。

電撃を帯びたドリブルでピッチを切り裂く。敵のDFが手も足も出ないくらい、強力な雷を纏い、ゴール前に直進する。

ボールを膝で蹴り上げ、空中に飛び上がる。右足 死ぬ直前には失われてしまうのだが、電撃の鎖で包み込み、ボールを蹴り出す瞬間にその鎖を解き放った。

それは鎖ではなく矢の如き勢いでボールと共にネットに突き刺さった。ゴールネットがプスプスと煙を上げ、それと同時に観客も歓声を上げる…

代田「これが鳴神自慢の必殺シュート…『チェイン・サンダー』だ。大概のチームはこいつで黙らせてきた。」

出雲「チェイン、サンダー…」

出雲の目は画面の中で歓喜の雄叫びを上げる背番号10に釘付けに

なっていた。

代田「本当はお前に鳴神のユニフォームを託しても良かったんだがな。うちの10番は鳴神だけだから。桜咲木のエースナンバーは永久欠番なんだ。」

誰にも着られることの無くなった、背番号10番のユニフォーム。それは公式大会に出場出来ないサッカー部に希望を与えた少年…悲劇のエースストライカーが生きていたという証。だから出雲に与えられた背番号は12番なのだ。10番は永遠に、鳴神だけのもの。

代田「…俺は、桜咲木を優勝させたい。鳴神が強豪クラブからのオファーを蹴ってまで愛したこのチームを、全国の頂点に立たせたい。」

出雲がサッカー部にやって来て、思い出したこと。

この不思議な少年とサッカーをしてみても、呼び覚まされた…代田のサッカーに対する情熱。死んでいった幼馴染みの思い。

このチームで優勝することこそ、サッカーを奪われ自殺した鳴神への手向けになるだろう。

2010 2090

ここで物語は、4日前に遡る。

2010年9月21日から80年後、時間管理局にて…

「たった今報告があった。アフリカ・コトアール共和国の建造物が大幅に消滅したそうだ。」

色黒の肌に銀色の髪を持つ男が、重々しく口を開いた。額に紋章が刻まれたその男は、だいぶ若くまだ中学生にも見える。

「消滅？今の御時世建物が消滅するくらい珍しくないだろ。」

女性的な顔立ちをした少年が反論する。軍服を着ているが、やはりこの少年も若い。

「確かに珍しくないが…今回の場合は話が別だ。コトアール共和国で消えた建物は全て、80年前のフットボールフロンティアインターナショナル以後に建てられたものばかり。しかもサッカーに関する建物が全て、だ…」

「サッカー？」

女性っぽい顔立ちの少年が顔を上げた。胸のネームタグには「ミストレーネ・カルス」と書かれている。

「つまり、」と銀髪…こちらは『バダップ・スリード』と書かれた少年が続ける。

「コトアール共和国のサッカーに関する歴史が変わったんだ。確認したが、『リトルギガント』…当時のコトアール代表チームがFFIで準優勝したという史実も存在しない。リトルギガントのGKであるロココ・ウルパも、サッカーには関わらずに幼少期の虐めを苦に自殺したことになっている。」

ミストレ「まさか…また時間犯罪者か？」

バダップ「いや。時空乱流に飲み込まれた人間が、別の時代に飛ばされたことで歴史が変わったんだ。その時空乱流に飲まれた被害者は、サッカーに大きく関わっていたらしいからな。」

時空乱流。時空間に生まれた歪みのことであり、そこに吸い込まれると別の時代に転移、或いは永遠に亜空間をさまい続けることになる恐ろしい現象だ。

有名な例としては、後期更新世の中国にいた少年が、1989年の東京に飛ばされたことが挙げられる。

大抵の場合は亜空間をさまいたまま死ぬケースが多いのだが、今回の被害者は奇跡的に違う時代に辿り着いたようだ。

「大体読めたぞ。その被害者が飛ばされた時代へ行つて、そいつが元々いた時代へ送り届けて来いつて言うんだろ？」

荒々しく机を叩いたのは『エスカ・バメル』。

このところ上層部からの指令が多く、余暇を楽しむ暇もないため、彼は気が立っていた。

バダップ「御名答。だが任務はそれだけではない。現在80年前の日本では、サッカーに関して何が行われているか知ってるか？」

エスカバ「何って…何もないだろ。エイリア事件からFFIまでの3ヶ月は『空白の3ヶ月』って言われるくらい平和だったんだから。」

その解答にバダップは目を細め、小さく笑みを浮かべた。

バダップ「『フットボールフェスティバル』。エイリア事件から1ヶ月後に開催された大会だ。このまま大会が続けばFFIは開催さ

れない。被害者が時空乱流に巻き込まれたことで、ここでも歴史が変わってしまった…」

「マジかよ…」とエスカバはため息をついた。

「どうやら今回の被害者は、いなくなるだけで後々の歴史に影響を与える大人物らしい。」

バダップ「つまり今の日本では、間違った歴史が造られつつある。

そしてFFIが開催されなかったことは、今回のコトアール共和国の建造物消滅事件に直結する。何しろコトアール共和国は、FFI以後に繁栄した国だからな。今度の我々の任務は、時空乱流被害者の保護及び歴史の修正。それが上からの指示だ。」

エスカバ「げえ。面倒くせえな…」

バダップ「幸いなことに、被害者が飛ばされた時代は2010年だ。被害者を保護した後、歴史の修正を行えば任務完了…」

エスカバ「待て。」

バダップ「何だ？」

エスカバ「どうせ修正しまっつ歴史なら、俺達が介入しても罪にはならねえよな？」

ミストレ「何が言いたい？」

勿体ぶつた言い方にミストレが苛立つと、エスカバは気味の悪い含み笑いを漏らした。

エスカバ「ただ修正するだけじゃ能がねえ…実践練習だ。特訓がてら俺達もその『フットボールフェスティバル』に殴り込んで、日頃のお偉いさんに対する鬱憤を晴らそうぜ。」

ミストレ「ハア？」

馬鹿か彼は。

ミストレはその陳腐な発想に呆れ返った。

大体、そんな勝手なことをしたら時間管理局の上層部が何というか、チームリーダーのバダップの反論を仰ごうとしたが、意外にも彼はその案に乗った。

バダップ「成る程…一理ある。鬱憤晴らしは兎も角、スキルアップには良い機会かもしれない。」

バダップ達が取り締まっている時間犯罪者の中には、攻撃系の秘密道具を使って激しく抵抗する者も少なくない。そうした成らず者達と対等に渡り合うべく、バダップら時間管理局実行部隊の面々はいずれも戦闘慣れた軍のエリートばかりで構成されている。

どうやらバダップは、その『フットボールフェスティバル』という間違った歴史を利用して、レベルアップを図っているらしい。

バダップ「それに我々が『フットボールフェスティバル』に乱入・支配することで、FFI開催までに強引に大会を終わらせても良い被害者を元の時代に送り返しただけでは、すぐには歴史は修正されないからな。正しい歴史と謝った歴史、2つの相違点を修正する意味でも、俺達がその大会に参加する価値は充分にある。」

変わってしまった歴史の規模が大きければ大きい程、修正にかかる労力や時間も大きくなる。

今回の任務では被害者を保護した後、特殊な方法で歴史の修正をすることになっていたのだが、バダップは『フットボールフェスティバル』を早急に終わらせることで強引に本来の歴史に繋げるつもりらしい。

つまり、

エイリア事件　フットボールフェスティバル　FFI開催無し　サッカー至上主義無し　コトアール建造物消滅

の歴史を、

エイリア事件　フットボールフェスティバル（『空白の3ヶ月』間の出来事として処理）　FFI開催　サッカー至上主義社会　コトアール繁栄

の正しい歴史に繋げるのだ。

こうすれば確かに労力やリスクは半分以下で済む。

何しろ、FFI開催までに今回行われている大会を終わらせてしまえば良いだけなのだから。無論本来の歴史とは細かい違いが生じるだろうが、歴史が変わる程の大きな差異ではあるまい。

バダップは一度言い出したら中々主張を変えない。

それは、彼とは長い付き合いのミストレ以下仲間全員が知っていた。強引に上層部を説き伏せてでも、エスカバの案を推すだろう。

まあこの所、他の小隊に任せておけば済むレベルの雑用ばかりで退屈していたのも事実だ。

もし『フットボールフェスティバル』への参加許可が下りたら、思い切り暴れてやろう。

ミストレは心の中で過去に飛んで暴れる決意を固めていた。

…そしてバダップの説得が通じ、時間管理局実行部隊第1小隊の面々は、過去に飛んで『フットボールフェスティバル』の参加許可が出された。

任務は、2010年に飛ばされた時空乱流の被害者を保護し、尚且

つ『フットボールフェスティバル』を早急に終わらせて本来の歴史に繋げること。

こうしてバダップ率いるチーム『オーガ』は、2010年9月25日にタイムスリップし、『王牙学園』としてフットボールフェスティバルの開会式に参加したのだった。

* * *

エスカバ「ところで…誰なんだ？サッカーに関する歴史を大きく変えちまうような、今回の被害者は…」

バダップ「…直にわかるさ。全ては2010年に着いてから。そこから任務は始まる…」

時間管理局極東支部・実行部隊第1小队『オーガ』。

Aランク任務・『オペレーションサンダーブレイク』始動である。

第12話 一回戦、開始

開会式から一夜明けた日曜日。

今日、いよいよ全国同時にフットボールフェスティバルの一回戦がスタートする。

円堂 守率いる雷門中は、イナズマキャラバンに乗って試合会場である河川敷グラウンドに向かっていた。

半田「しかし盛り上がらないよな。一回戦の相手が傘美野中だなんて。」

壁山「俺、初戦から強豪と当たると思ってたから、拍子抜けしたっスよ……」

昨日学校に帰ってきた円堂達から、一回戦の対戦相手を知らされた。相手は稲妻町の隣町にある都立傘美野中学校。エイリア学園の襲撃を受け、校舎を破壊されたチームだ。

このチームとはフットボールフロンティア地区予選が始まる前に一度戦ったことがある。河川敷グラウンドを占領する彼らに泣かされた稲妻KFCが、雷門中に助けを求めたのだ。その時行われた練習試合では雷門の圧勝。何でも、傘美野中は部員の不祥事が原因でサッカー部は廃部になっており、サッカー同好会として河川敷で練習していたらしい。正式な部活動ではないため、当然フットボールフロンティアへも不参加。

その後のエイリア学園『ジェミニストーム』との試合も、経験不足故に辞退したという。秋葉名戸と並ぶ、都内でも指折りの弱小チームである。

最近同好会から部活動に昇格したばかりの弱小チームと、フットボールフロンティア全国大会優勝校。

この明らかに結果が見えた対戦カードに、部員達のモチベーションは下がっていた。

円堂「おいおい気を抜くなよ？最初から油断してたら、勝てる勝負も勝てなくなるぞ。」

半田や壁山のやる気の無さに見かねた円堂が注意するが、2人は生返事を返しただけで再びお喋りを再開した。

漸く到着した河川敷グラウンドは、大勢の観客によって埋め尽くされていた。同時開始のため他校の偵察はいないが、雷門・傘美野両校の生徒をはじめ、地元住民が騒々しくひしめき合っている。

栗松「凄い応援でヤンスね……」

風丸「何しろ日本最大の大会だからな。これくらい観客がいてもおかしくないだろ。」

そうは言っても、と…栗松はイナズマキャラバンから降りて、グラウンドに立ってみた。試合が始まる前から騒いでいる観客と、黙々とグラウンドを整備するサッカー協会の職員。彼らの存在が、国内最大級の闘いが始まったことを嫌でも自覚させる。昨日の開会式ではさほど緊張しなかったのに、いざグラウンドに降り立ってみたら緊張が津波のように栗松の心を蹂躪し始めた。

試合前に両チームがそれぞれのベンチに移動し、監督の指示を仰いでいる。

傘美野サイドはいつものお調子者的なノリはどこに消えたのか、淡々と監督の指示に耳を傾けている。

対する雷門は…

響木「いよいよ一回戦が始まる訳だが…お前達、絶対に気を抜くなよ。どんな相手でも手加減はするな。」

「……はい!!!」

スタメンは初期メンバー＋シャドウ。新加入組3人と目金はベンチだ。

選手達がピッチの中央で整列する。黄色いユニフォームの雷門と、グレーのユニフォームの傘美野の両イレブンが向かい合つと、観客がどよめいた。もうすぐ試合が始まる。そのことに興奮を隠せない観客の何人かが、土手や橋の上から口々に何か叫んだ。

「雷門中…見せてもらいますよ。あなた方の優勝に懸ける想いを…」

そう呟いたのは、以前雷門中で尾刈斗との練習試合を観戦していた眼鏡の少年。

深緑のズボンを穿き、白いシャツの上に黒のジャケットを羽織っている。

木陰に隠れるように、彼はピッチに立つ雷門イレブンに冷めた視線を送っていた。

貴崎「雷門中の皆さん、今日は宜しく御願ひしますね」

傘美野中の国語教師でサッカー部顧問の貴崎が、にこやかに響木に話し掛けた。

恰幅の良い中年で、人の良さそうな彼だが、目は笑っていない。何

しろ今日は最愛の妻と一人息子の勇二が試合を見に来ている。愛する家族の前で無様に敗退する姿だけは見せられない。

…だが10年後、貴崎 勇二がサッカー管理組織『フイフスセクター』直属のサッカーチーム・『黒の騎士団』のFWを務めるということ…貴崎監督はまだ知らない。

整列と礼を済ませて両チームがピッチに散ると、急に辺りが静まり返った。

このグラウンドと同じように…全国の試合会場でも、選手がピッチ上で待機しているのだと思うと、風丸は背筋が寒くなるのを感じた。気味が悪いくらい統制されている。サッカーは今や、11人で行うものではない。関わる者達全てがサッカーという芸術を美しく形作る…そんな光景だ。

不正がないように、審判の他にもサッカー協会の職員が十数名待機している。

重々しく、厳格な管理サッカー。この異常なまでに統治されたサッカーこそが、10年後のフイフスセクターによる管理サッカーに直結するのだが…今は誰一人そんなことには気がつかない。

音無「緊張しますね、先輩！」

木野「一回負けたら終わりのトーナメントだからね。見てる私達も緊張するね…」

冬花「でも傘美野中って実際弱いんでしょ…？」

さらっと酷いことを言ったのは新マネージャーの冬花。内気なようで案外毒舌な彼女は、ピッチに立ってゴールを守る円堂に視線を注いだ。

冬花「(守…くん?)」

やはりそんな名前に聞き覚えはない。彼は私のことを知っているよ
うだが、人違いだ。
だが…あんな風に誰かがゴールを守っている姿は、見覚えがある。
守君？それとも別の誰か？
わからない。何も。
マネージャーや監督が緊張に顔を強ばらせる中、1人顔色を悪くす
る冬花だった。

一方、全国の試合会場でも、一回戦が始まるうとしていた。

- 静岡県 -

二ノ前「いよいよツスね、清村さん！」

清村「ああ…」

挨拶を済ませた桜咲木イレブンは、ピッチの上で円陣を組んでいた。

代田「…勝ちにいくぞ。確かに俺達は弱小チームかもしれない。だ
が、こんな俺達でも目指せる場所があるなら…俺はそれを見てみた
い。お前達と、鳴神と一緒にだ。」

観客席では支倉をはじめ、桜咲木中サッカー部の元マネージャー達
が試合を観に来ていた。

そして支倉は、今は亡き桜咲木のエースストライカーの遺影を抱え
ている。

写真の中で微笑む彼は、かつて『雷のストライカー』と呼ばれてい
た頃と同じ表情をしていた。

代田「見せるぞ、桜咲木魂！」

「「「おー！！！！」」」

相手は神奈川の強豪・清明院大学附属中。

たとえ相手が強豪だったとしても。再始動した桜咲木イレブンの闘志は消えない。

初戦突破を目指して、白いユニフォームの選手達はピッチに散った。

- 山梨県 -

坂之上「遠井、何故『不祥寺スパイク』を履いて来なかった？公式戦はみんな同じスパイクを履くと伝えただろう……」

不祥寺中サッカー部キャプテン・坂之上 幸四郎（さかのうえ こうしろう）が眉間に皺を寄せた。問い質されている遠井 宇宙は上の空で話を聞いていたが、気だるそうに頭を掻くばかりで反省している様子は無い。

遠井「あー……いーじゃん別に。この『プレテターX』の方が足に馴染むんすよ。それにあんなダサいスパイクなんか使いたくねーもん」

「かっこいいっしょ？」と遠井は自慢げにスパイクを見せびらかした。1人だけ違う、高価そうなスパイクに、他の部員は顔をしかめる。

遠井「相手が誰であれ、俺様には勝てねーよ。さくさくつと勝つて

不祥寺の名を広めてやるからさ、期待しててよキャプテン」
坂之上「チツ…」

逆らえない。不祥寺のエースナンバーを背負うこの男には。
態度は悪いが、実力があることも事実。みんなもわかっているから、
誰も遠井に刃向かわない。

遠井「さあーで、みんな俺が自由にプレー出来るように、しっかり
働いてくれよ。」

新品のスパイクを光らせ、不祥寺のエースは他者を見下したような
笑みを浮かべた。

・埼玉県・

「行けそうか？てっぺい。」

海王学院サッカー部キャプテンにして、DFを務める小坂 耕助（
おさか こうすけ）が、グラウンドの隅でストレッチをする少年に
声を掛けた。

隼「ん：大丈夫だよオサちゃん。もう殆ど本調子に戻ったし。」

小坂「なら良いんだが…」

隼 轍平は、半年前に遭った事故が原因で暫くの間サッカーから遠
ざかっていた。入院した時の彼はもう元のようなプレーは出来ない
と医師に言われていて、事実、退院後の彼は以前のようなキレを失
っていた。

天才的な才能を有していた隼は幼い頃から将来を有望視され、小中

高一貫の海王学院に入ってからファンタジックなプレーで人々を魅了した。

そして、今年のフットボールフロンティアではレギュラーの座を勝ち取り、予選開催を目の前に控えた時…落下してきた角材の下敷きになる大怪我をしたのだ。

無論、フットボールフロンティアには出場出来ず、隼を欠いた海王学院は予選敗退。

それでも尚過酷なりハビリに耐え、隼はピッチに舞い戻って来た。テクニクは事故に遭う前に比べて劣化し、スピードも若干落ちたようだが…昨日のフットボールフェスティバル開会式で雷門を手玉に取ったのを見ると、本人の言う通り大分調子は整ったらしい。小坂「てっぺい、整列だ。お前の復帰戦に勝ち星を飾ろっぜ。」隼「おう！」

- 稲妻町 -

・雷門中VS傘美野中

雷門中（F・ベーシック）

FW 染岡（11） シャドウ（17）

MF 半田（6） 少林（7） 穴戸（8） マックス（9）

DF 風丸（2） 壁山（3） 影野（4） 栗松（5）

G K 円堂(1)

ベンチ 五郎(18) 東(19) 飛鷹(20) 目金(12)

傘美野中(F・スリーランス)

F W 水口(11) 出前(9) 安永(10)

M F 茶木(6) 加納(7) 立野(8)

D F 姫島(2) 菊池(3) 野馬(4) 向山(5)

G K 生垣(1)

ベンチ 堤(12) 友岡(13) 丸出(14) 石崎(15)

小塚(16)

傘美野も尾刈斗同様、フットボールフェスティバルに向けて布陣を変えたいらしい。雷門は相変わらず4-4-2のままだが、前回の対戦時にはボランチだったキャプテンの出前が前線に上がったことは、何か大きな変化を感じさせた。

そして…午前9時。主審が腕時計に一瞥をくれ、ホイッスルを吹いた。

角馬「全国のサッカーファンの皆様、お待たせ致しました！遂に中学サッカー日本一を決めるフットボールフェスティバルの開幕です！第178試合場である此処、稲妻町河川敷グラウンドで戦うのは、

小生の母校である雷門中と、めきめきと力を付けている傘美野中！
栄光のロードへと駒を進めるのは、果たしてどちらなのか！？」

突然音無の隣に湧いて出た角馬 圭太が甲高い声で実況を始めた。
案の定尾刈斗中との練習試合の時と同じく、盛大に唾が飛ぶ。今回は不意を突かれたために避けることが出来ず、興奮気味にまくし立てる角馬の口から飛んだ唾は、音無のスカートや露出した太腿を濡らした。

音無「うええ…」

音無の悲鳴に観客の声援が重なる。ピッチでは先攻の雷門が丁寧なパス回しをしていた。

風丸からのパスを受けた半田がサイドから駆け上がる。
立ちはだから傘美野の背番号8番、立野。

半田「『ジグザグスパークV2』!!」

体をジグザグに動かし、帯電した青白い雷を立野にぶつける。体の痺れに耐えきれずがっくりと膝を着くと、半田は遙か向こうに走り去っていた。

角馬「最初に魅せたのは雷門中の半田 真一！そして彼からのパスはこの男に繋がったぞ！」

パスの受け手は、雷門の点取り屋。ドリブル技を一切持たない彼は、技のバリエーションの無さというハンデを感じさせないフィジカルの強さと、安定した突破力を誇る。

染岡「邪魔だあ！」

向山「ヒイツ！」

敵つい顔と強引なドリブルに怯えた向山が突破される。雷門中、早くもシュートチャンスだ。シュートを警戒して生垣が飛び出すと、染岡はボールを右に転がした。

ミスキック…かと思われたが、それは右サイドから走り込んできたシャドウに繋がった。目線も合わせずに、正確にパスを繋ぐ…この2トップの意思の疎通は完璧だ。

染岡がシュートしてくると思っていた生垣は、完全にタイミングをずらされた。

シャドウ「くらえ…」

相手が誰であれ、容赦はしない。左足に纏った闇色の炎を、空中で回転する度に大きく厚く育て上げる。

その力が極限まで高まった瞬間、シャドウの左足は唸りながら空を切り裂いた。

シャドウ「『真・ダークトルネード』！！」

『ファイアトルネード』と双壁を成す、竜巻のシュート。それは瞬く間に止めに入ったDF陣を蹴散らし、未だに染岡の方へ体を向けたままの生垣へと飛んで行った。

生垣「なめるな…『真・トルネードキャッチ』！！」

強引に体を捻り、ゴールポストを蹴って飛び出す。全身のバネを最大限生かして、体を回転させる。闇のシュートとぶつかった時、生垣の回転はボールの勢いを弱め、地面に着地すると同時にボールを

手中に収めていた。

シャドウ「何!?!」

角馬「止めたア! 傘美野キーパー生垣、闇野のシュートを見事にキヤッチ! 雷門、惜しくも得点ならずっ…!」

有り得ない。シャドウ程のストライカーが、弱小傘美野のキーパーにシュートを止められるなんて。

生垣が放ったボールをインターセプトして、今度はマックスが傘美野陣内に深く切り込んでいく。

器用なボールコントロールでDFを手玉に取り、彼はややダイレクト気味にミドルシュートを撃った。

マックス「『ソニック…シュット』!」

青白い風の弾丸がゴールに直進する。MFだが、一応登録ポジションはFWであるだけにキック力には自信があったマックス。しかし生垣はこのシュートも止めてしまった。

マックス「そんなあ…!」

生垣「さあ、今度はこっちの番だ!」

生垣が勢い良く投げたボールはDFの菊池がキープ。

すかさず少林と宍戸がボールを奪いに突っ込んでくる。

菊池「『ダッシュユアセル』!」

2人にボールを奪われる直前、高速ドリブルによる風圧で彼ら breakthrough。まさかのブロック失敗に思わず少林は目を見開いた。しかもあの技は…

少林「今の必殺技つて、稲妻KFCのドリブル技じゃ…」

不敵に笑う菊池から、加納にボールが渡る。そして彼から更に前線で構える安永に繋がった。見事なパス回しだ。雷門に負けない早さと正確さで雷門ゴールまでボールを繋いだ。つい2カ月前までは弱小チームだった筈なのに、パスの正確さといいGKのセービング能力の高さといい、この短期間でかなりの力をつけたらしい。

安永「『真・ダイナマイト…シュート』!!」

出前を支える傘美野の副キャプテンの放ったシュートは、高い爆発力を秘めたる一番街サリーズの必殺技だった。確か、三河屋の御用聞きのシュート技だったか。

円堂「『真・熱血パンチ』!!」

右手にサッカーに対する熱い情熱を込めて、パンチングを繰り返す。辛うじてシュートを弾いたが、こぼれ球をキープしたのは傘美野3トップの1人・水口。

水口「『ダイナマイトシュート改』!!」

ゴールに向かって墜落する、爆弾の如き必殺シュート。これもまた『熱血パンチ』で弾くが、ボールを拾うのは傘美野の選手だ。

大谷「どうして円堂君は『ゴッドハンド』を使わないんだろう？」
夏末「使わないんじゃないよ。『ダイナマイトシュート』を使えないのよ。」

ート』はスピードを重視した技。『ゴッドハンド』を使っていたら対応出来ないわ。」

しかも水口と安永の様子を見ると、2人とも『ダイナマイトシユート』を覚えてある。

辛うじて防いではいるが、このままではゴールを割られるのは時間の問題だろう。

しかしそれ以上に夏末が気になったのは、出前の存在だ。せつかく3トップの1人として上がってきたのに、シユートには全く絡んで来ない。じつと静観を守っている。

何を企んでいるのか…

険しい表情のマネージャー達の隣で実況する角馬に、サッカー協会の黒服が何やら耳打ちをした。もうすっかり雷門の実況として定着しているようだ。

角馬「えー、只今入りました情報によりますと、もう既に試合が終了した会場があるようです。千葉県幕張市の第315試合場で行われている、鎌瀬かませFCVS王牙学園の試合は、鎌瀬FCのメンバー全員負傷により王牙学園の勝利です！なんと王牙学園、試合開始後10分弱で真っ先に二回戦進出を決めてしまいました！」

鎌瀬FCといえば、石ノ森SCと並んで今大会の優勝候補の一角として注目されていたチームだ。そんなチームを前半が終了する前に沈めてしまった王牙学園とは如何なるチームなのだろうか…

水口「『ダイナマイトシユート改』…！」

何度目かの水口のシュートが雷門ゴールを脅かす。

パンチングで弾かれたボールは空をさ迷う。それを拾おうとする安永に風丸がタックルを放ち、どうにかボールを保持した。

壁山「こいつら…」

強い。このグラウンドに来る前、弱小チームだと思って侮っていた自分が恥ずかしくなるくらいに。

「どうしてこんなに強くなれたのか…不思議そうな顔だな。」

マークについた壁山に話し掛ける出前。さっきから全くシュートに絡まず、言葉も発さず、じっとゴールを睨み付けていた出前が口を開いた。

出前「俺達はエイリア学園に学校を破壊されてから、ずっと特訓を重ねてきたんだ。」

憧れだった。

同じ弱小チームだったのに、フットボールフロンティアで優勝した雷門が。

そんなチームに追い付きたい、追い越したい。そういう想いを胸に、出前達はこの河川敷グラウンドでボールを追い掛け続けた。

エイリア学園による学校破壊の影響で、各地の中学校では臨時休業の状態が続いていた。そんな中、出前達は休みなくサッカーに明け暮れた。

稲妻KFCや一番街サリーズの協力もあり、徐々に実力を付けていく傘美野イレブン。

だが成長したのは選手だけではない。

顧問の貴崎も、監督としての技術を磨いていた。

最初は受け持ちの部活が無かったために、半ば強制的にサッカー同好会の顧問をやらされていたに過ぎなかった。

知っているサッカー選手といえば、元日本代表の二階堂 修吾やヨロツパリリーグMVPストライカーのレビン・マードックくらい。

大してサッカーに詳しく無かった彼だが、毎日ボールを追い掛けるサッカー部を見ているうちに、次第に彼らに感化されていき…土日の家族サービス返上で一緒になって走り回るようになった。

「海外の雑誌やサイトで すべてをカバーしてサッカー情報を集めている」という立野が持ってきた雑誌で、戦術を見直したりもした。日本ではあまり実用化されていないが、海外では『必殺タクティクス』という戦術が頻繁に利用されていることも知った。

そして、イギリスのサッカーチーム『ナイトオブクイーン』が使用する『無敵の槍』をモデルにして、自分達だけの必殺タクティクスを編み出した…

今や傘美野は、只の弱小チームではなかった。

監督と選手が一丸となり、勝利に向けて特訓を重ねてきたライバル。雷門と互角に戦う力を要した、強敵となっていた。

シャドウ「『真・ダークトルネード』!!」

生垣「『真・トルネードキャッチ』!!」

またしても…生垣の必殺技はシャドウ得意の暗黒の炎を掻き消してしまった。

シャドウ「チツ…」

生垣「何度やっても同じだ。『トルネードキャッチ』はシュートとは逆の回転をボールに与えることで威力を殺ぎキャッチする技。そして俺は、左右両方の回転を可能とし…どちらの回転が掛かったボールでも止めることが出来る！」

相手がシュートを撃ってきたその一瞬でボールの回転を見極め、それとは逆回転の『トルネードキャッチ』を発動することでシュートを止める。これは稲妻KFCの監督で、元イナズマイレブンの会田に教わったことだ。生垣の長所、回転力を生かして、左右両方に回転出来るよう鍛えたのだ。

更に、会田の特訓は『トルネードキャッチ』を超える新たな必殺技を習得することも可能にした。

傘美野イレブンの進撃は終わらない。

全ては、全国の頂点に立つために…！

生垣「出前！」

キャプテンマークを巻いた9番、出前にボールが渡る。マーカールの壁山は鈍足故に、容易く振り切られる。

出前「さあ…生まれ変わった傘美野の本随、見せてやる！」

まただ…尾刈斗に引き続き、このチームも必殺タクティクスなる戦術を使うらしい。

それまで静観を守ってきた出前、遂に動く。

彼に呼応するかのように、傘美野の選手が皆、二人一組で待機する。生垣と菊池、野馬を除いて、二人組になった8名が雷門陣内に動き出した。

出前「必殺タクティクス、『ハイド・アンド・シーク』！！！」

出前の宣言を合図に、水色のオーラを纏った4つの弾丸がピッチを切り裂き始めた。跳ね飛ばされる雷門の選手達。

風丸「く…止めるぞ壁山！」

壁山「は、はいッス！」

ボールを保持してるのは出前&安永ペア。
ならドリブラーの2人を止めれば猛攻は止められる。

この2人を止めて、カウンターに転じれば、がら空きのゴール前を攻めることも出来る…

両サイドから迫る、壁山と風丸。そして出前と安永にスライディングを放つが…風丸と壁山の足はボールに触れることはなかった。

出前と安永のペアは決壊するが、2人ともボールを持っていない。

風丸「何!?!」

ボールを保持するは、別のペア。

水口と茶木。続いて加納と立野…と、高速で移動しながらパスを繋いでいるのだ。水色のオーラが良い目眩ましとなり、ボールの出所を把握することさえままならない。

正に究極のハイド・アンド・シーク（隠れん坊）だ。

そして先程崩された出前ペアも、素早く隊列を組み直してゴールに向かっていく。

茶木「出前！」

ボールが出前に渡った。

ペナルティエリアに侵入する彼は、影野と栗松を抜き去ると空高く

飛ぶ…

出前「これが俺の…俺だけの必殺シュートだ!!」

稲妻KFC、一番街サリーズとの特訓。会田、貴崎の指導。仲間との結束。

この技は、みんなの絆の証。このシュートで、傘美野を勝利へ導く…!

出前「『シャイントルネード改』!!」

左足に纏った眩い輝きを、回転する度に大きく育て上げる。極限まで高まった光は雷門ゴールを照らし、その光にシュートが叩き込まれた。

シャドウの『ダークトルネード』とは正反対の『シャイントルネード』。

その輝きは傘美野を栄光の、ホーリーロードへと導く一筋の軌跡。

円堂「うおおお…『真・ゴッドハンド』!!」

右手に纏った七色の気を大きく突き出す。

歴戦を乗り越えてきた、幾度となく雷門ゴールを守ってきた伝説の神の手。

迎え撃つは、傘美野の努力の結晶。

勝負は簡単に決した。伝説とは、塗り替えられる物。神の手は数秒の後に打ち砕かれ、オレンジ色の気が辺りに散らばった。

円堂「まだまだ…『メガトンヘッド、G2』!!」

ゴールは割らせない。円堂の額に現れた気が拳の形を作り出し、受

け止めたボールを大きくクリアした。

出前「く…」

先取点決めますよ…な雰囲気醸し出し、『ゴッドハンド』を破った瞬間はどや顔までしたのに、土壇場で弾かれてしまった。恥ずかしいことこの上ない。

赤面する出前だが、まだ雷門側も安心出来ない。弾かれたボールは茶木が拾い、再び攻め込んでくる。

壁山「させないツス！」

咄嗟に壁山の巨体が、茶木の足元に滑り込んだ。砂埃の中、茶木の視界には黄色いユニフォームが広がり、気がついた時にはピッチに転がっていた。

ピイイッ！

ファールだ。ボールを狙ったつもりではあったが、やはり大柄な壁山のスライディングには無理があったか。

傘美野、フリーキックのチャンスを得る。

安永「誰がいく？」

水口「オレが蹴ろう。練習の成果を試す時だ。」

不敵に笑う水口がボールをセットし、雷門の選手がゴール前に壁を作った。

角馬「さあ、傘美野のフリーキックです！キッカー水口、誰かにパスを出すか、それとも直接ゴールを狙うのかあ！？」

水口「（直接狙うに決まってるだろ…）」

手練れの揃った雷門は、ボールを蹴られた瞬間パスの受け手を見極めてブロックに行くだろう。直接狙った方が成功率は高い。審判のホイッスルが鳴り、水口が走り出した。

水口「行くぜ…必殺タクティクス、『ザ・カーブ』！！」

蹴り出されたボールは壁となったDF陣を大きく反れ、一番端の影野の脇から飛び出してくる。円堂のジャンプはそれに届かず、ボールはサイドネットに綺麗に吸い込まれた。

円堂「な…」

一瞬全てが止まる。そして、オーケストラの演奏が終わった後、じわりじわりと拍手が沸き起こるように、辺りから歓声が起こった。

貴崎「よしっ！いい感じですよ。」

角馬「ゴール！！先取点はまさかの傘美野中！辛うじて出前のシュートは弾いたものの、追い討ちを掛けるようにフリーキックがゴールを射抜いたあ！」

1-0。前半21分、傘美野中FW・水口のフリーキックが雷門ゴールを揺らした。

流星は『サイボーグ』の異名を持つ水口。フリーキックの精度の高さはチーム1である。

* * *

「傘美野相手に失点を許すようでは、雷門も終わりだな……」

眼鏡の少年が小さく溜め息をついた。他の観客がピッチ上で起こるプレーの一つ一つに一喜一憂するのに対し、この少年は笑み一つこぼさずひたすら無表情を貫いている。

「シユウ君、見つけた。」

そんな声が聞こえたのは、出前と水口が手を重ねた直後だった。『シユウ』と呼ばれた少年が振り返ると、彼の後ろに茶髪の少女が佇んでいた。

「相変わらず1人でいるんだね……」

少女はそう言いながら、ゆっくりと近づいてくる。背中に届く程の長い髪が、彼女が一步踏み出す度に左右に揺れた。

『シユウ』の隣に立つと、彼女は彼の頭を撫でた。気のせいか、無表情だったシユウの顔も穏やかになったように見える。

「今日もお仕事で来てるの?」

「ええ。雷門中の監視です。百合香さんは?」

「んー…私は君と一緒に試合を観に來ただけだよ。今日は暇だからね。」

少女：百合香はそう言って微笑んだ。

シユウの方は中学生のようだが、彼女はそれにしても背が高く、大人っぽい。恐らく高校生だろう。

「そうですか…まあ別に構わないですよ。邪魔という訳でもないし

…」

どこか顔つきが穏やかになったシュウは、一度百合香の顔を見上げると、またピッチに目を戻した。

試合が再開される。

雷門イレブンは、新生・傘美野中を攻略出来るのだろうか…

第13話 イナズマチャレンジャー

フットボールフェスティバル一回戦。雷門中VS傘美野中の試合は、傘美野が優勢である。傘美野のFW・水口のフリーキックがゴールを射抜き、先制点を許してしまった雷門。果たして、弱小を脱した傘美野中に勝てるのだろうか。

一方他の会場では…

- 静岡県 -

「『スラッシュユダガーV3』!!」

清明院大学附属中のFW・中村の必殺シュートが迫る。中村の足から放たれた両刃鋸のような刃が、ボールを携えて次々と桜咲木の選手を蹴散らしていく。

代田「『ギガドリルブレイク、V3』!!」

右手に巨大なドリルのオーラを形成し、『スラッシュユダガー』を受け止める。

火花を散らすそのドリルは、エイリア学園ファーストランクチーム『イプシロン』のキャプテン・デザームが使用するキーパー技『ドリルスマッシュャー』に酷似していた。

その所為で、雷門中とイプシロンの試合の様子がテレビで放送された際、デザームと代田の必殺技が似ていることをクラスメートにからかわれたものだ。

そんな逸話のあるキーパー技だが、パンチング技の『ドリルスマッシュャー』と決定的に違うのは、この技がキャッチ技である所だろう。巨大なドリルはその驚異的な回転力にてシュートの威力を削ぐと、周囲の地面ごと抉るようにしてボールを抱え込んだ。

ズガガガツ！という嫌な音と共にピッチの、緑色の芝が抉り取られる。剥き出しになった地面にめり込んだボールをしっかりと掴み取ると、代田は前線の二ノ前に大きく放り投げた。

二ノ前「キタキタ！よっしゃ、行くぞ出雲！」

出雲「は、はい…！」

桜咲木中の新たな伝説を作る２トップが清明院大学附属中に反撃を開始する。

二ノ前はトラップしたボールを出雲に預け、単身敵陣へと突っ込んでいく。出雲の方は、独特のステップで迫り来る清明大附属の選手を次々と交わし、絶妙なタイミングで二ノ前にセンターリングを上げた。

二ノ前「サンキュー！行くぜ、俺の必殺シュート…！」

ボールにオレンジ色の氣を注ぎ込み、カ一杯蹴り出す。

二ノ前「『パワーショット』…！」

オレンジ色の軌跡は地面を這うように進んでいく。二ノ前自慢のグラウンダーシュートだが、名前の捻りの無さやモーシヨンの地味さ加減が、程良い噛ませ臭さを醸し出している。

「英雄…ここでシュートを止めれば、僕は英雄になれるかもしれない…」

清明大附属のキーパーは、前髪を垂らし瞳に狂気に満ちた光を湛えた暗そうな少年。ぶつぶつと呟く彼の右手には、銀色に青のラインが入った猫系動物の前足を模した爪が装着されている。内側にはごく丁寧にも肉球のような飾りがついていた。

「『デストクロー』!!!」

ボールに爪を引っ掛けて大地に叩きつける。

二ノ前「げえ〜、マジかよ…!」

大方の予想通り、二ノ前のシュートは止められてしまった。

清明大附属のキーパー・東條。虎の如きセイビングでシュートを止めた彼は、神奈川県でもトップレベルの力を持った選手だ。

スコアは未だ0-0。

戦いは、始まったばかり。

- 山梨県 -

炎ヶ原「オラオラ、熱く行くぜ!!!」

不祥寺中のMF・炎ヶ原 真紅（えんがはら しんく）。がっしりした体格に坊主頭が目立つこの男は、抜群の突破力を誇る。テクニクは無いが、持ち前の熱いハートとフィジカルの強さを生かしたドリブルを得意としている。

中里「ストーンプリズン」！！」

古墳中のDF・中里 貴（なかざと たか）が手を翳すと、大地を割って墓石のような細長い石が幾つも現れ、炎ヶ原を取り囲んだ。正に石の檻。これには為す術無し…に見えたが。

炎ヶ原「そっちがストーンプリズンなら、こっちはプリズンブレイクで突破してやるぜ！！」

訳の分からないことを言いながら、石の檻を強引に破壊して突破する。

最初は頑丈さを誇っていた『ストーンプリズン』だが、炎ヶ原の気合いには適わず、2、3回ぶつかるとうちに崩れてしまった。

中里「有り得ない…この石の檻を破る奴なんて、今までいなかったのに。」

炎ヶ原「どんなに頑丈だろうと、俺の熱さには適わないのSA」

炎ヶ原の視線は、前線で待機するストライカーに向けられている。

「馬鹿が、ゴール前に遠井しかいなかったら、こいつにパスが出るのはバレバレなんだよ！」

遠井へのパスを警戒した堀高 才介（ほりたか さいすけ）と弥勒 知（みろく あきら）が彼を取り囲む。

それでも構わず炎ヶ原がボールを蹴り出すと、遠井は側転してマークから抜け出し、逆さまになった体勢からダイレクトで蹴りを放った。

遠井「おらぁー!!」

無理な体勢からのダイレクトシュート故、成功率は低い…と思われ
たが、空気を切り裂く勢いで放たれたそれはGKの埴輪 宇一（は
にわ ういち）の頬を掠めてネットに突き刺さった。

埴輪「なん…だと…？」

遠井「まず1点…何て決めさせてくれっかな？ダメキーパーよ…」

- 稲妻町 -

1点を追う雷門、染岡やシャドウを中心に傘美野陣内に攻め込んで
いく。

シャドウ「『ダークタツクル』!!」

闇色の炎を体に纏い、迫り来るDFを弾き飛ばす。ドリブル技を持
つシャドウを先頭に、染岡と半田がそれに続く。

視線は生垣に合わせたまま。シュートモーションに入る…と見せか
けてバツクパスを出す。

抜群の攻撃力を持つ豪炎寺、攻守に優れたバランス型の吹雪らと比
べ、シャドウはこういったフェイントが得意な技巧派だ。ボールを
持ったら敵陣に突っ込むしか能がない染岡との相性も良い。

染岡「くらえ…『ドラグリーンクラッシュ』!!」

爆竜が産声を上げ、ピッチを這い回る。そしてそれは染岡が蹴った
ボールに纏わりつき、生垣に向けて牙を剥いた。

生垣「（右回転か…）『真・トルネードキャッチ』！！」

右回転のシュートに対して、『真・トルネードキャッチ（左回転ver）』をぶつけることで威力を殺していく。信じられないことだが、爆竜は生垣のトルネードに消し去られ、ボールは手中に収められていた。

染岡「くそっ、何で決まんねえんだよ！！」

腹立たしげにピッチを踏みしめるが、固いグラウンドは踏みつけた分染岡の足に痛みを返しただけだった。

生垣「覚悟が違っただよ、俺とお前らとじゃ…」
染岡「覚悟だと？」

傘美野中サッカー部は部員の殆どが1、2年生だが、1人だけ3年生が存在する。その唯一の3年生こそ、この生垣 冗だ。

彼は、傘美野中サッカー同好会が発足した時からチームの一員として出前を支えていた。

本来ならば3年生の生垣がキャプテンを務めても良いのだが、もう引退まで1年を切った自分では同好会から部活動に昇格させるのは難しいと判断して、サッカー部を作りたいと言い出した出前にキャプテンマークを託したのだ。

1年生に部長を務めさせることに不満を漏らす菊池や野馬を宥め、受験勉強に取り掛り始めた他の3年生から白い目で見られながら…それでも彼は、サッカーを続けた。

サッカーが好きだから。
このチームが好きだから。

トーナメントは一回負けたらそこで終わり。否が応でもキーパーの自分に責任がのしかかってくる。

そんな自分を支え、奮い立たせてくれるのは、チームに対する想い。このチームでサッカーを少しでも長く続けるため、生垣はゴールを守り続ける…

シャドウ「だったら、こいつはどうだ！」

生垣の演説に痺れを切らしたシャドウが、話の腰を折って染岡とアイコンタクトを交わした。

染岡は頷き爆竜を呼び出すと、『ドラグーンクラッシュ』をシャドウに向けて発動する。

染岡『ドラグーン…』

シャドウ『トルネード…！』

それに対して、シャドウの『ダークトルネード』が向かってきたボールに叩き込まれた。爆竜は闇のエネルギーを吸収して漆黒に染まり、ゴールを強襲する。

炎の蒼竜、氷の飛竜を超える闇の爆竜が、ゴールではなく生垣自身に食らいつく勢いで突き進んでいく。

生垣「このチームで勝ち続けるためなら！何度だって止めてやる！

『真・トルネードキャッチ』！』

今度は右回転の『トルネードキャッチ』。

微妙にシュートに左回転が掛かっていることを見抜いた、生垣の観察眼が活きた。この半年、参考書ではなくボールと睨み合っていた甲斐があり、生垣の選球眼はかなり養われていた。

だが、観察眼だけでは技の威力はカバーしきれない。

『ドラグーントルネード』が『トルネードキャッチ』を上回るパワーを持っていたため、逆回転を掛けてもシュートを止めることは出

来なかった。

漆黒の爆竜に両手を弾かれ、跳ね飛ばされる生垣。

生垣「まだ…諦めるものかつ…！」

それでも尚、大地を蹴って飛び出すと、回転しながらボールに向かって飛び込んだ。正直、この爆竜は怖い。だが、シュートを止めるという意気込みがそれを上回っている。回転する生垣の両手が、ボールを挟み込む。ただ挟むだけでなく、両手を上下左右に動かすことで、噛みつくようにしてシュートの威力を減らしていく。

生垣「『トルネードフアング…V3』…！！」

噛みつく動作に回転が加わるため、全方位からボールに衝撃が加えられることになる。

必殺技同士のぶつかり合いで爆風が巻き起こり、シャドウ達の視力を奪う。

砂塵の中ボールの行方を探すシャドウだが、ボールは目指すべき場所には収まっていない。

砂埃が漸く消え去り顔を上げると、目の前にはどや顔でボールを掲げる生垣の姿があった。

生垣「受験勉強が嫌でサッカーに逃げたなんて思われたくねえ…俺はサッカーで上を目指すんだ！」

覚悟の生垣が放ったボールは加納がトラップする。と同時に、野馬と菊池が目で合図を交わして加納に続く。

『ダッシュアクセル』を発動した加納に同調するように、2人も同じ技を使って加納を援護する。

「『トリプルダッシュ』！！」「」

『ダッシュアクセル』×3。稲妻KFCが編み出したばかりの高威力のドリブル技は、この2年生3人組によって受け継がれた。

小柄な加納や快速の菊地は兎も角、巨体の野馬はスピードについていけないかと思いきや、そこは持ち前のガッツで2人に追い付いている。寧ろ彼の巨体が相手を寄せ付けない壁となり、この必殺技に程良いアクセントを与えていた。

マックス「『クイックドロウ』！！」

腰を落とし、両足に『タメ』を作ると、居合い抜きのような素早さで加納の足元のボールを掠め取りに行く。だがスピードの乗った相手の足を狙いに行くことは余りにも危険で。

マックスの右足は加納や菊地に轢かれ、野馬に踏みつけられてブロックは不可能に終わった。

加納「出前！」

チームの主将にボールが渡る。

風丸「壁山、栗松、止めるぞ！」

DF陣を統率する裏のキャプテンが1年生を従えて出前を倒さんと立ちはだかる。見た所、こいつはドリブル技を使用していない。あの必殺タクティクスが無ければ、ゴール前までボールを運ぶのは不可能な筈だ。

3方向から、雷門のユニフォームが迫る。だが出前、余裕の笑み。訝しむ風丸の顔を照らす、目映い光。見ると、出前の体を明るい光

が包み込んでいる。

出前「『シャインタツクル』!!」

光の竜巻が出前の体に纏わりつきながら、大きく爆発する。豪炎寺の『ヒートタツクル』やシャドウの『ダークタツクル』に酷似したエネルギーを纏ったドリブル技。またしても突破される、雷門。残った影野のスライディングも虚しく交わされ、いよいよ円堂と1対1。

出前「『シャイントルネード改』!!」

再び放たれる、出前の必殺シュート。

迫り来る必殺技に対して、円堂は考えていた。

『正義の鉄拳』なら、絶対にシュートを弾くことが可能だ。だが、飽くまでも弾くだけでボールをキープすることは出来ない。何しろ傘美野の攻撃陣は目の前まで迫っている。こんな所でパンチングをしようものならすぐさまボールを奪われてしまうだろう。

『熱血パンチ』、『爆裂パンチ』も然り。これら3種のパンチングを使うことは望ましくない。

とすると、『ゴッドハンド』か『マジン・ザ・ハンド』で対応するしかないが、『ゴッドハンド』は先程破られた。ここは『マジン・ザ・ハンド』で防ぐのが得策だ。

右手を額の前で翳し、氣を充填する。左胸に手を当てて直接氣を注ぎ込むより、素早く魔神を呼び出すことが出来る構え。すぐさま氣が円堂の体を旋回し、魔神が召還された。

円堂「『マジン・ザ』……」

技名を発しようとした瞬間、ホイッスルが鳴った。前半戦が終了したのだ。

間一髪の所で命拾いをした。出前も空中で技を解いて地面に着地する。

出前「チツ、あと少しで追加点が取れたのに……」

ハーフタイム中、雷門相手に優勢の傘美野はかなり盛り上がった。だが雷門は、格下に先制点を許したこと、相手のキーパーの強さに圧倒され意気消沈だ。

「何故、お前らが負けているか分かるか？」

ぺたりと座り込んだイレブンに見かねたのが、響木が口を開いた。

響木「圧されている原因は、お前達の『傲り』だ。相手の名前を聞いただけで、弱いと判断し……なめて掛かっていた結果がこれだ。名前から『実』は分からない。戦ってみて初めて、そのチームの本当の姿が見えてくる。わかるな？壁山、半田。」

突然名指しされ、壁山と半田が一瞬肩を震わせる。試合前、傘美野を馬鹿にしていた2人だ。

「はい……」

2人の返事に頷くと、響木は話を続けた。

響木「あいつらを此処まで突き動かすのは、弱小と呼ばれる『悔しさ』だろう。弱いから、自分の力で学校を守れなかった。弱いから、

弱小チームと馬鹿にされた。だが今はどうだ？あんなに団結し、勝利に向けて各々が力をつけている。俺は、あいつら以上にチームワークのとれたチームを他に知らない。間違いなく、今まで戦ってきた中で一番団結力のあるイレブンだ。」

確かに…とマネージャー達も頷いた。

必殺タクティクスに参加するタイミング。連携技を発動する間合い。何の合図も無しに、自分達の裁量で行動し、仲間もそれに合わせている、これが傘美野サッカーの長所。お互いに信頼し合っているからこそ出来る、連携プレー。

円堂「すげえ…」

魂が震える。フットボールフロンティアで日本一になったからといって、最強になった訳ではなかった。

こんな身近なライバルまでもが、驚く程に力をつけている。

尾刈斗も…傘美野も。

全国には、まだ見ぬ強豪チームが沢山いる。

優勝候補を戦闘不能に陥らせ、真つ先に一回戦を突破した王牙学園。恐るべきスピードとテクニク、勝利のビジョンを見抜く才能を持つ隼 轍平擁する海王学院。

その他にもまだ、沢山の強敵がいる筈だ。

円堂「俺は勝ちたい。勝って勝って勝ち続けて、色んな奴とサッカーがしたい。だから相手を侮ったりしない。全力で勝負する！」

木野「円堂君…」

響木「円堂の言う通りだ。勝てば勝つ程、その先の…未体験の世界に足を踏み入れることが出来る。お前達は勝ちたいか？」

響木の問いに、全員が首を縦に振った。

壁山や半田も、もう傘美野を侮っていないようだ。

響木「よし…後半からフォーメーションを変えていく。東、飛鷹、五郎。お前達を後半から投入する。」

「…えっ…!?」

驚きを隠せない3人。

他のメンバーが苦戦するような相手に、新入りの自分達が適うのか…

響木「少林寺、影野、松野はアウト。飛鷹、東、五郎が代わりに入れ。」

マックス「くっ…」

先程、加納達の『トリプルダッシュ』を止めに行った時、足を踏まれて痛めたらしい。マックスの右足は腫れ上がっていた。

響木「後半は積極的にプレスを掛け、相手をペナルティエリアに入れるな。幸いなことに、敵はロングシュートを持ち合わせていない。エリア内でボールを持たせなければ、恐れることはない。それと…」

響木はチラ、と傘美野サイドのある選手を見、再び視線を雷門イレブンに戻した。

響木「ファールには充分気をつける。相手はセットプレーでも追加点を狙ってくる。フリーキックの機会を与えたら絶対にゴールを狙われると思え。」

その言葉に、壁山が頷く。

思えばさっきの失点は、壁山の無謀なスライディングがきっかけ。安易なブロックでファールを取られては、いつ失点するか分からない

い。

響木「俺からの指示は3つ。『相手をペナルティエリアに入れない』、『ファールを取られない』、そして…」

響木は選手や目金、マネージャー達にあることを指示した。それは、円堂達初期の雷門イレブンが、絶対に忘れていなかった言葉。

日本一になりエイリア学園を倒すうちに、いつの間にか忘れてしまった言葉。

上を目指すなら、絶対忘れてはいけなかった言葉。

「お前達は『挑戦者』だ。全国制覇した『王者』ではない。3つ目の指示は、『挑戦者の精神を忘れるな』」

相手が傘美野中だからといって、侮ってはいけない。

かつて弱小だった雷門が『挑戦者』の精神で試合に臨んだように。日本一の栄光は捨てて。

心機一転、新たな気持ちで戦うのだ。

後半戦が始まる…『イナズマチャレンジャー』は、再びピッチに向かった。

雷門が後半戦に向けて布陣を組み直す中、傘美野もまた、選手を入れ替えていた。

向山「監督…俺、もう動けないです…」

貴崎「困りましたね、さては向山君、また揚げ物を食べてきましたね？」

向山「は、はい…」

ひよろりとした体躯の向山が、地面に尻餅をついている。

「縁起を気にして 大事な試合の前には トンカツを食べている。」という彼は、消化に良くない揚げ物やこつてりした食べ物には食べられないように注意を受けていたにも関わらず、やはり前日にトンカツを食べていたらしい。しかも問い詰めた所、今朝は『テキ』に『カツ』ということでステーキとトンカツを食べてきたとか。

友岡「このやろ、昨日監督に揚げ物は控えろって言われたのを忘れたのかよお！」

向山「いててて、だって試合に勝てるように縁起を担ぎたかったんだよ……」

友岡に首を絞められ、向山は目を白黒させている。この様子では、もう走ることも出来ないだろう。

貴崎「選手交代しますよ」。石崎君、向山君に代わって右サイドバツクに入って下さい。」

石崎「分かりました。」

向山に代わって、「毎日サッカーのことしか考えないというサッカー大好き少年。」の石崎がピッチに立つことになった。

両チームが再びピッチに散る。

雷門は3人、傘美野は1人先程とは顔ぶれが変わっている。

雷門中

マックス(9)out 五郎(18)in

影野(4)out 東(19)in

少林(7)out 飛鷹(20)in

傘美野中

向山(5)out 石崎(15)in

スコアは1-0、傘美野リードで後半戦がスタートした。

出前が蹴ったボールを安永がトラップし、中央から突っ込んでいく。

シャドウ「進ませるかっ…！」

無我夢中で足に闇のオーラを纏い、大地に叩きつける。するとその漆黒のエネルギーは地面を割くように進み、安永に接触すると地面から吹き出て彼を跳ね飛ばした。

まるで吹雪の『アイスグラウンド』のようなモーションの必殺技だ。シャドウ本人もまさか成功するとは思っていなかったらしく、意外そうな顔でボールを奪った。

角馬「闇野の必殺技が決まったあ…！」

目金「大地を突き進む闇の衝撃波…名付けて、『ダークグラウンド』」

目金の眼鏡が光る。尾刈斗戦では出場したものの、今回はどうやら出番がないようなので、すっかり命名役として落ち着いていた。

染岡「シャドウ、こっちだ！」

早くもゴール前まで上がった染岡のパス要求に答えるべく、シャドウの足が空を切る。

それを右足の内側で受け、ゴール前に転じる染岡だが…

「進ませねえよ…」

何処からか、声が聞こえてきた。

正面には、誰もいない。左右にも。後ろから聞こえた訳でもない。

声の主…菊池は上空から。

一回転すると、氣で武装した右足で大地を蹴りつけ、その際に生じた衝撃波で染岡を吹っ飛ばした。

染岡「うわああっ！」

菊池「出前！！」

強めのロングパスが出前の足元に落ちる。一番ボールを渡してはいけない相手。頭ではわかっているものの、出前を止められない。

出前「行くぞみんな、『ハイド・アンド・シーク』！！」

隊列を組み替え、2人1組を作る。前半で向山と組んだ姫島は、石崎と組み直していた。

水色の氣に包まれた4つの弾丸が、素早くパスを回しながら雷門陣内に突入する。

東「来た…！」

初めての公式戦。

超次元サッカーの世界に足を踏み入れるのだから、多少の危険は覚悟していたが…ピッチに立ってみてわかる。何たる迫力。何たる気迫。

勝つために戦う少年達。しかも彼らを率いる出前という少年は、東

より年下である。

だが東だって。雷門の一員として勝利に貢献するべく、特訓を積んだのだ。

今こそその成果を見せる時…

東「『グラウンド』…うわあっ!!」

右手に氣を込めて地面を殴ろうとするが、その前に弾丸は東を跳ね飛ばしてしまう。無様にフィールドを転がる、黄色のユニフォーム

栗松「くく、誰がボールを持っているのかわからんでヤンス!」

風丸「だが…あの4組のうち、誰かが持っているのは確実だ。全てのペアを同時に攻めれば…」

壁山「!! 必ずボールを奪えるツスね!」

4つのペアのうち、ボールを持っている選手に当たる確率は4分の1。だが、4人同時に攻めれば、誰か1人は必ずボールを保持したペアを潰せる。

実はこれが、『ハイド・アンド・シーク』の突破口でもある。生意気にも必殺タクティクスなどという戦術を使ったところで、所詮は弱小チーム…簡単に突破口は開かれてしまう。しかも試合の合間に弱点を見抜かれた訳ではない。この土壇場で欠点を見破られてしまったのだ。

風丸の合図を契機に、風丸、飛鷹、栗松、壁山が…4つのペアに突入する…!

水口「甘い…!」

だがブロックされる直前で、傘美野は一斉に『ハイド・アンド・シーク』を解除した。守備陣が全員上がったため、ゴール前に広大な

スペースが出来上がっている。これが傘美野の狙い。
前言撤回…自分達のタクティクス弱点を逆手にとった、見事な戦法だ。

そして、ドリブラー・茶気の足を離れたボールは、オープンスペースに放り込まれる。それをキープするのはやはりこの男、出前 洋。

風丸「ペナルティエリアには入れさせない！」

だが風丸も戻りが早い。

流石は元陸上部というべきか。正に風のようなスピードでゴール前に舞い戻ると、向かってくる出前を待ち構える。

出前「邪魔だ！『シャインタックル』！」

風丸「うおおお！！」

光を纏って強行突破してくる出前に対し、風丸も気合いと共に、風を纏って迎え撃つ。

風の槍と化した風丸は出前を弾き飛ばし、前線に大きくクリアした。

風丸「（駄目だ、まだ手応えが掴めない…）」

体に纏った風のエネルギー。これを生かせばブロック技を作り出せそうなのだが、どうにもまだ完成出来ない。

「『ハイド・アンド・シーク』…オーラを発することが出来る複数人が協力することで発動するタクティクスね。」

顎に手をやり、じつと目を細めた彼女はそう分析した。そんなこと
一目見れば分かりそうだけど、彼女はそれが重要なことであるよう
に言葉を続けた。

「技術面の他にも、発生させる氣の色、量。これらを均等にしなけ
ればならない。普通は体から発生させるオーラって、自分を強く見
せるための演出でしかないけど、まさかそれを利用してボールの出
所を隠すなんてね。傘美野中はなかなか考えてるよ。」

百合香は、物事を考察することが大好きだ。特に勝負事になると、
お互いのチームの特徴を端的に捉え、それをシュウに話してくれる。
頭の悪いシュウでも、分かるように。

「複数人で隊列を組んでパスを回すタクティクスと言ったら…日本
じゃ東京ELEMENTSの『デュアルタイフーン』辺りが代表的
かな。あのチームは日本の必殺タクティクスの先駆者的存在だから
ね。」

そこまで喋って、百合香は気づいた。シュウの表情が強張り、両手
で体を抱くようにしていることに。
しまった、と心の中で舌打ちをする。『東京ELEMENTS』の
話は彼の前ではしない方が良かった。

「シュウ君ごめんね、気づかないうちについあの名前を出しちゃっ
て…」

体育座りをして膝を抱え込む彼の手に触れると、小刻みに震えてい
るのがわかる。

「いえ、気にしないでください。いつまでも過去のことを引きずっ

てる僕が悪いんですから。」

そうは言っているが、シユウの固く強張った表情は和らぐことはなかった。

東京ELEMENTS。嘗て日本最強を誇ったサッカークラブ。中学校の王者が帝国学園なら、クラブの王者は東京ELEMENTS…と言われる程の強豪チーム。

その名前を出すとシユウは怯えを見せる。詳しくはまだ聞いていないけど、そのチームがシユウにとって何かしらのトラウマを与えていることは間違いない。「百合香さん、もう大丈夫だから話を続けてください。」

今度はシユウが気まずそうに表情を曇らせた百合香を励ますように、彼女に言葉を掛けた。

もう顔の強張りはなくなっている。この場に百合香が現れた時と同じく、優しい表情をしている。

それを見て少し安心したらしく、また百合香は話を再開させた。

・埼玉県・

小坂「てっぺい！」

敵の攻撃の目を摘み、戻ってきていた隼にボールを渡す。キャプテンの小坂の目には、復活した隼のプレーをしっかりと焼き付けようとする意気込みが込められていた。

隼「行くぞ…『韋駄天ダツシユ』!!！」

並み居るDFを一瞬で置き去りにし。ゴールとの距離を即座に埋めるドリブル技。彼が走り抜けたピッチに巻き起こる突風に吹き飛ばされ、相手チームの選手達は地面に叩き付けられた。

『韋駄天ダツシュ』を解除した途端、隼の脳裏を過ぎるある風景。断片的ではあるが、鮮明で現実味を帯びた映像。

迫るDF、交わす隼。後ろを走るFW・馬田。それらのシーンが少しずつ隼の頭に浮かんでくる。

「おらあっ！」

案の定、敵のDFがスライディングを仕掛けてきた。

それを飛び上がって交わり、更に空中でバックパスを出す。下を見ると、後ろ向きのままスライディングを交わされた背番号4番が、不思議そうな表情のまま芝を滑っていくのが見えた。

そのバックパスを胸でトラップし、再び隼にボールを戻す。構えるGK、飛び込む隼。

だが再び自分にボールが戻ってくることを予め知っていた隼の方が反応が早く、彼のダイビングヘッドはキーパーの懐を通り抜けてネットを揺らした。

「ゴール！海王学院、1点先制です！0-0の均衡を破ったのはこの男、『5秒先の預言者』こと隼 轍平！強豪栃木FCを相手に先取点を決めた隼！そのスピードもスキルも全く衰えていません！寧ろ更にレベルアップしてピッチに舞い戻ってきました！」

歓喜の仲間に囲まれながら、隼は実況の言葉を心の中で否定した。スピードは兎も角、まだ技術の方は完全に追いついてはいない。

完全復活した訳ではない。

毎日リハビリしたお陰で怪我の治りは早く、体力も衰えなかったが、技術面の修復には時間が掛かりそうだ。

ともあれ…今はまず、目の前の敵を倒さねばならない。

一回戦で隼達の『全国への挑戦』を終わらせないためにも…

- 稲妻町 -

雷門イレブンは響木の指示通り、傘美野の攻撃陣をペナルティエリアに入れず、尚且つファールも取られずに試合を展開した。

先程、オーブンスペースに飛び込んだ出前を風丸に止められたことから、傘美野は『ハイド・アンド・シーク』を利用した奇襲作戦を使わなくなっていた。

あとは気力と体力の、互角の勝負を挑むのみ。

安永「『ダツシユアクセル』！！」

山属性の高速ドリブル。

これを飛鷹に阻まれれば、今度は水口が彼からボールを奪って再び攻める。

雷門はDFを5人に増やして献身的にゴールを守っている。だがそのうち2人は初心者故、苦戦を強いられていた。

刻々と時間は過ぎていく。

このまま傘美野のペースにはまっていれば、1 - 0で負けてしまう。

試合時間、残り15分弱。

第14話 敗者の想い（前書き）

一部歌詞が含まれていたもので修正しました。

第14話 敗者の想い

フットボールフェスティバル一回戦、雷門VS傘美野。

円堂率いる雷門中は傘美野中に失点を許し、1-0のまま試合時間は後半残り15分を切った。

円堂らの『全国への挑戦』は、此处で終わってしまうのか…？

* * *

傘美野はペナルティエリアに入れず、外からのロングシュートを多用するようになった。風丸達の献身的な守備で何とか耐えしのいでいるが、このままでは失点は時間の問題だろう。

「雷門のチームレベルは2.6…」

試合の流れを静かに見守る、眼鏡の少年が低く呟いた。普段彼から口を開くことはあまり無いため、隣に立つ茶髪の少女は驚いて彼の方を振り向いた。

「対する傘美野のチームレベルは1.9。信じられますか？イナズマキャラバンとして地上最強のチームになった時の雷門は、少なくとも積みもって8.0レベルはありました。それがキャラバン参加者6名と、追加メンバー4名を失ったことで5.0以上もレベルが下がった。そのせいで、7レベル下の弱小チームに苦戦している。」

饒舌な時はかなり饒舌だ。

普段口数が少ないだけに、自分の考えが纏まるとつらつらと言葉が

放たれる。

「それがどうかしたの？」

「このザマでは優勝など出来ないということです。最低でも50レベルは無ければ、上位に食い込むことすら出来ませんから。」

「それなら、どうしてサッカー協会は雷門を監視してるの？」

「恐れているのでしょね。雷門が反乱を起こすことを。だから僕をこうして監視役として派遣したんだ。」

「ふーん…」

サッカー協会のメンバーとして、雷門中の試合結果、内容を逐一報告することを義務づけられた少年・シユウ。

その冷たい眼差しは、ピッチの攻防を一つも逃さず捉えていた。

安永「『真・ダイナマイトシュート』!!」

ゴールに墜落する爆弾。

それにぶつかって爆発する飛鷹。

多少遠くなっても威力はあまり落ちておらず、1人、また1人とD F達は削られていった。

東「どうすればいいんだ…」

肌を焼く、熱風。

砂塵が目突き、煙が口に入ってむせる。

超次元サッカーは、綺麗なばかりではない。時にはこんな苦しい思いをしなければならぬのだ。

それは覚悟していた。東京は超次元サッカーが盛んで、尚且つ日本一有名な雷門中でサッカーをやる以上、つらい思いをすることもあ

ると、わかっていた。

だがこんなにも早く、その苦痛が訪れることになるとは、思っていなかった。

自分のポジションはDF。敵の強力なシュートからGKを守らなければならぬ。相手が強ければ強い程、苦戦を強いられる嫌なポジションだ。

その負担を減らすために、せっかく必殺技を編み出したのに、未だ発動出来ていない。

ここで技を使えば。

自分の必殺技で、ピンチを凌げれば。

チャンスが生まれる…

ピンチの後に、勝機が訪れる…！

安永「石崎！」

安永のバックパスが、途中出場のDFに繋がる。ボールを受けた石崎はそのまま駆け上がると、センターサークル手前からロングシュートを放った。

石崎「『ライトニング…アロー』…！！」

それは青白く、電撃を纏った極太のビーム。『アロー』というより『キヤノン』といった表現が正しいような、当たればひとたまりもない閃光。

地面を抉り突き進むその風体は、地味な控えメンバーが使うには些か勿体無いくらいの強力な技だった。

その技に対して立ちはだかったのは東。

例え新入りとはいえ、自分も雷門サッカー部の一員であり、DFの1人。

自分は何のために必殺技を身につけた？

今使わずして、いつ使う？

迫り来る光弾に足が竦むが、自分を奮い立たせ…右手を大地に叩きつける。

先程は失敗したが、今度こそ成功させるのだ。

東「『グランドウェイブ』…！」

技名の発声と共に、大地が裂け、叩きつけた拳を中心に扇状の亀裂が起こった。

そしてそこから土石流が溢れ出ると、津波のように『ライティングアロー』に押し寄せていく。

青い光弾と岩の波がぶつかり合う。

東「やった…成功した…」

喜んだのも束の間。

最初は多少東が押ししていたものの、そこは経験の差。

真ん中から波を寸断すると、電撃の矢は東を吹っ飛ばして更に突き進む。

東「うわあっ！！（やっぱり俺じゃダメか…）」

奮闘虚しく宙をさま迷う東の眼前に、背番号3の巨体が写り込んだ。

壁山「東さん、助かったツス！『真ザ・ウォール』…！」

東が作ってくれた時間を利用して何とか『ライティングアロー』の前に割って入り、せり上がる岩の壁でシュートを防ぐ。さっきの失点は、壁山の不用意なスライディングが招いたもの。

ここでピンチを凌いで、名誉挽回だ。

壁山「うおおお!!」

巨体を揺らしてボールを奪い取る。石崎のロングシュートはゴールを決めることなく、壁山に防がれてしまった。

壁山「穴戸!!」

傘美野の選手はその殆どが雷門陣内に上がり過ぎている。その隙を逃さぬ手はない。壁山からのパスを受け、穴戸がゴール前に走る。訪れた。ピンチの後に、大きなチャンスが。鈍足の野馬、慎重派の菊池を除き全員が上がっている今。今こそ、得点を決めるチャンス。

石崎「行かせるかあ!!」

いち早く窮地に気づいた石崎が穴戸を止めに入る。

だが、穴戸は臆することなく飛び上がると、地面にボールを蹴りつけた。

穴戸「『奈落落とし』!!」

石崎「うわっ!!」

回転が掛かり跳ね返ったボールは石崎の顔面にぶつかる。怯んだ石崎をその場に置き去りにし、穴戸は更にドリブルを続けた。

そして彼からのスルーパスはシャドウに繋がる。果たしてシャドウ、傘美野の守護神を破れるか!?

野馬「い、行かせないぞ…『マッド・ボム』!!」

自分の周りを液状化し、蹴り上げた泥の塊は爆弾と化す。それがシヤドウに着弾した瞬間、ピッチには爆発音が響き渡り、シヤドウはフィールドに倒れ伏していた。

名前がパツとしない割に恐ろしい技である。敵の進行を防いだことに安堵した野馬がボールを奪いに行くが、シヤドウはそれを持っていなかった。

『マッド・ボム』が触れる瞬間、染岡に預けていたのだ。

野馬「しまった！」

気がついたがもう遅い。

染岡は腰を捻って足を振り上げると、空中を飛び回る爆竜諸共ボールを蹴り飛ばした。

染岡「『ドラグーンクラッシュ』！！」

爆竜の息吹がボールに相乗効果を齎し、激しく体を動かしながら生垣に牙を向く。

生垣「（左回転…！）『トルネードファンングV3』！！」

それでも生垣は臆さない。

雷門相手にまだ失点していないという自負と、『トルネードキャッチ』と同じく左右両回転が可能な上位技を持つことが彼に安心感と確かな自信を与えている。

左回転の『ドラグーンクラッシュ』に対して、右回転の『トルネードファンング』をぶつける。逆の回転を掛けることでシユートの勢いを殺し、尚且つ回転する両手から繰り出される無数の噛み付き攻撃がボールを失速させていく。止めるのは容易い、と思われたが…

染岡「駄目か…!?!」

シャドウ「まだまだ!」真・ダークトルネード!」

低姿勢のまま回転して飛び出してきたシャドウが、生垣に掴まれて勢いを失いかけていているボールに蹴りを叩き込んだ。勢いの弱まったボールに右回りの回転力を与え、同方向に回転の掛けられた生垣は次第に押され始めた。

生垣「ぐおっ…」

シャドウ「お前の武器はシュートと逆の回転を掛けたキャッチ技でボールを失速させること。ならば…」キャッチ技と同じ回転のシュート』を放つたらどうなる…?」

技巧派プレイヤー・シャドウの読みが冴え渡る。

彼のシュートによって同方向に回転を与えられた生垣は、『ダークトルネード』のパワーに競り負けて跳ね飛ばされた。

生垣「うわあああ!」

生垣の右手を離れたボールはゴールを焼き払わん勢いで突き刺さる。闇の爆炎は点を決めたぞと自己主張するかのように煙を上げた。

角馬「ゴール!」雷門、漸く1点返しました!これで試合は振り出し…1・1の同点です!」

歓声上がる雷門サイドだが、ベンチに座るマネージャー達には何が起こったのかわからなかった。

音無「一体どうして、『トルネードファンク』を破ることが出来たんですか?」

木野「うーん…」

目金「僕が説明しましょう！」

解説役として名乗りを上げたのは、雷門サッカー部のお荷物である目金。

目金「『トルネードファンング』の恐ろしい所は、左右両方に回転出来ることです。物理的に考えて、回転する物体に逆の回転を掛けたら止まってしまいますからね。左回転のシュートと右回転のキャッチ技がぶつかれば、両方のエネルギーは相殺されます。しかし右回転のキャッチ技と同じく右回転の力を加えたら…シュートの威力はそのままで、『トルネードファンング』は無力化する…」

音無「うーん、難しいことはよくわからないけど、兎に角キャッチ技と同じ回転を掛けた闇野先輩が凄いつてことですよね!？」

目金「ま、まあそうなりますね…」

折角長々と説明したのに…と嘆く目金。説明がわかりにくかったせいか、音無達には殆ど伝わってなかったらしい。

生垣「く…出前、すまん。」

出前「大丈夫ツスよ生垣さん。まだ同点…俺達攻撃陣がたたみかければ、点を決められます…」

そうは言ったものの、出前の顔は引きつっていた。

本当に点を取れるのかという疑念が沸き起こる。まだ戦える。時間も9分近くあるはず。1点取って守りきるには、丁度よい状況。

だが…雷門の新人り 東といったか が覚醒した。シュートブロックでは大した効果を成さなかったものの、普通に選手をブロックする分には脅威となる。

出前「（それでも…やるしかねえ！！）」

しかし出前は、もう自分のGPが残り少ないことにまだ気づいていない。

試合再開後、怒涛の攻めを展開する傘美野イレブン。

1点取られたことに触発されたか、今度は野馬や菊池までもが雄叫びを上げて雷門陣内に突入する。

GK1人を残し、まさかの全員サッカーで雷門に襲い掛かる。

出前「『シャインタックル』！！」

光の竜巻で武装し、雷門の選手を次々と蹴散らす。

東「『グラウンドウェイブ』！！」

勢いに乗った東の土石流に飲み込まれるも、水口とのワンツーパスでこれを突破。ゴール前に飛び出してきた。

だが…

いぎ、「シャイントルネード」を放とうという瞬間、出前の足が落ちた。膝から折れ曲がり、その場に崩れ落ちる。

出前「何…」

GPが切れたのだ。前半も後半も余すことなく走り回っていた彼は、とうとう体力を使い切ってしまった。

周りを見ると、安永も水口も皆…肩で荒い息をしている。

攻撃し過ぎたことによる、攻め疲れ。

この機を、これまでゴールを守ってきたDFの長…裏キャプテンが、

見逃す筈がない。

風丸「今だ…みんな上がれ！」

響木監督が自分だけに教えてくれた、ペナルティエリアに敵を入れないもう一つの意味。それは、追加点を取ろうと相手に何度も攻め込ませることにより、攻め疲れを起こさせること。

その機会を作るまで、必死に…ただひたすら耐えていたのだ。

風丸の合図を聞いて、雷門のカウンターアタックが始まった。流れるようなパス回しで中盤の密集地帯を突破し、いよいよがら空きのゴール前にボールを持ち込む。

ドリブラーは染岡。此処で追加点を決めるべく、碧き爆竜を呼び出すと思いい切り足を振りかぶった。

…と同時に、驚異的な瞬発力でシャドウが駆け上がってくる。2人はアイコンタクトを交わし、染岡は左に、シャドウは右斜め前に展開する…

爆竜は染岡に蹴り出されると、唸りながらシャドウに向かって飛んでいく。

シャドウは回転しながら闇の炎を灯すと、爆竜に更なる力を注ぎ込む。

「『ドラゴントルネード、V2』！！」

進化した闇の爆竜、生垣を威嚇しながら突き進んでいく。ここで点が決まれば、傘美野は負けてしまう。

負ければ、もう終わり。生垣も引退だ。中学サッカー生活に、幕を下ろさねばならない。

生垣「嫌だ…俺はまだ、サッカーを続けるんだっ…！」

だが『トルネードキャッチ』も、『トルネードフッキング』も破られた今、為す術が無い。奇跡でも起きない限りは…

生垣「俺はこのチームが好きだ！絶対にみんなで、優勝を目指す…！」

打つ手無し、絶望的な状況でも諦めず、逃げ出さなかった生垣。そんな彼の意気込みに心を打たれたか、勝利の女神は奇跡を起こした。即ち、必殺技の覚醒。

生垣の心臓が大きく鼓動を放ち、その鼓動に刺激を受けた右の拳が熱く輝く。

その瞬間、生垣の頭には新必殺技のイメージが浮かび上がっていた。そのイメージが消えぬうちに。無我夢中で飛び上がり、回転する。なりふり構ってはいられない。『ファイアトルネード』のパクリと言われようとも、ゴールを守るためだったら、どんな技でも使ってもやる…！

生垣「うおおお…『バーニングキャッチ』…！」

右手に宿した炎でボールを掴み取り、地面に叩きつける。炎の手に顔を焼かれ、爆竜が悲鳴を上げる。徐々に爆竜は勢いを失っていき、ボールが地面にめり込んだ時には完全に消え去っていた。

角馬「止めたあ！キーパー生垣、このピンチに土壇場で新必殺技を作り出して、シュート止めてしまいました！」

何という勝利への執念。

これには円堂も驚かざるをえない。これが引退の懸かった、三年生の覚悟。

「まさか、この土壇場で新たな技を完成させるとは…」

試合を観察するシユウの顔に、初めて驚きの色が浮かんだ。

「彼凄いね。それだけこの試合に勝ちたかったんだね…」

確か生垣の覚えている必殺技は、

キーパープラス

トルネードキャッチ

トルネードフアング

???

だった筈。故に、残りの一つを覚える可能性はあった訳だが…まさか試合中に覚醒するとは。

「しかもあの生垣つて子は火属性で、『バーニングキャッチ』も火属性。属性が一致している分、今までよりも威力が上がっている筈よ。」

そう。今までの生垣の必殺技は風属性。故に、属性不一致で威力もあまりなかった。だが生垣が習得した切り札の属性は火。これまでに以上に強固な壁になりそうだ。

生垣「やった…行け、出前！」

まだ試合は終わっていない。生垣の起こした奇跡が傘美野の寿命を

火花を散らす真の魔神と真の光撃。それはぶつかり合う度に強大なエネルギーを放ち、辺りに爆風を起こした。

シュートを受け止める円堂の右手には、魔神とボールを介して出前の想いが伝わっていた。

勝ちへのひたむきな想いは、出前も同じ。だからこそここまで強くなり、自分達を追い詰めている。

こうなったら後は気持ちの勝負。更なる高みを目指し、円堂の拳が唸る…

円堂「お前達の想い、ビリビリ伝わってくるぜ…けど、俺達だって負けねーぞ…！」

円堂の体から、更に氣が発せられ、徐々に出前のシュートを押し返す。魔神の輝きが増すごとに、ボールを包み込む光が弱くなっていき、最後には一度爆発的な輝きを放った後消え去ってしまった。

ボールは魔神の掌、そして円堂の掌に収まっており、自身の最強シュートを止められた出前はがっくりと膝をついた。

円堂「よし、みんな！絶対勝とうぜ…！」

ボールは円堂から風丸に渡る。すかさず茶木が立ち上がるが、風丸は止まらない。

風丸「『真・疾風ダツシュ』…！」

目にも止まらぬスピードで茶木を翻弄し、抜き去る。抜かれた茶木は風圧で吹っ飛ばされて地面に叩きつけられた。

風丸「染岡…！」

ピッチを寸断し、ゴールとの距離を埋めるロングパス。それを受け止めた染岡は、再びシャドウと共にゴールへ走る。現時点で雷門の最強シュートはこれしかない。絶対に決める…例え相手がどんな技を使ってこようと、決めなければならぬ。

染岡の雄叫びを聞きつけ、上空から急降下してきた爆竜がピッチを飛び回る。それと同時進行でシャドウの左足にも闇のエネルギーが集まり、染岡がボールを蹴り出すと同時にシャドウも回転しながら飛び上がった。

染岡「点を決めるのがFW（俺達）の仕事だ。」
シャドウ「どんなキーパー技だろうと、打ち破ってみせる…！」

「『ドラグーントルネードV2』！！！！」
闇の爆竜、覚醒したキーパー生垣に最後の勝負を挑む。残り時間的にも、これが雷門のラストプレー。ここで決めなければ、延長戦に持ち込まれる訳だが…雷門側も体力が限界だ。出来ることならここで決めておきたい。

だが傘美野も此処でシュートを止めなければ負けは確定する。傘美野イレブンの命運は、全て生垣の右手一本に懸かっているのだ。

生垣「これが俺の全力…俺の必殺技だああ！！！！」

生垣の右手に火が灯る。
かつて人類が火を使うことを覚えた時のような感動が、そこにあった。自分の拳を包み込む炎。心臓の鼓動と呼応して、ゆらゆらと揺らめく。

飛び上がって回転すると、世界が歪んだ。雷門も仲間も、ベンチの選手達も観客も、審判も…全てが回転し、視界から消えた。一瞬、グラウンドの傍にある木陰に座る2人組の姿が映った。黒髪眼鏡の地味な少年と、茶髪で整った顔立ちの少女だ。地味眼鏡はすぐに見えなくなつたが、少女の方は美人過ぎてずつと瞼に焼き付いていた。

あんな綺麗な人も応援に来てくれてるんだ、止めなきゃかっ
こ悪いぜ！

気合いは充分。いざ放たん、最強のキャッチ技を…！

生垣「『バアアアニングウウウ…キャアツチイイツツ』！！」

右手の炎は、既に生垣の肘を包むまでに広がっている。そして、大きさも先の2倍以上。進化した訳でもないのに、技の威力が強化されていた。その炎の拳で、ボールを上から押さえつける。サッカーに対する情熱をたぎらせ、ボールの勢いを殺す…殺す…殺すつ…！！

その様はさながら、泣き叫ぶ赤子を、般若の形相で焼けた鉄板に押しさえつける幽鬼女のような。爆竜の方も、「痛い！熱い！」と悲鳴を上げている。

貴崎「堤君、生垣君のプレーをしっかりと目に焼き付けておきなさい。君もいずれ、彼のようにゴールを守らなければならないのですから

…」
堤「はい。」

傘美野中第2キーパー・堤。この試合では出番がなかったが、いつ

か生垣の後を引き継いで、傘美野の守護神になる男。その握り締めた拳には、汗が滲んでいる。グローブを嵌めているからではない。生垣の勝利への執念に心を打たれたからだ。

元々MFだった彼は、生垣に憧れてGKに転向した。

いつもベンチから、彼の活躍を見守っていた。

今もそうだ。生垣のように熱く、みんなが安心して背中を任せられるGKになりたい…

生垣「勝たなくちゃいけないんだ！俺は…このチームでサッカーを続けたいからっ… うおおお！！！」

引退を賭けた男の、受験勉強ではなくサッカーを選んだ男の、プライド。

担任に白い目で見られ、クラスメイトから呆れられながらも下級生と一緒にボールを追い掛けた日々。無理矢理入らされた塾の夏期講習をさぼって、サッカーをした夏休み。それが親にばれて、殴られながらもサッカーボールを離さなかった夏の夜。

それら全ての思い出が、走馬灯のように生垣の頭を駆け巡る。

此処で負けたら、今まで積み上げてきたものはどうなる？

全てが水泡に帰する。台無しになる。だから負けるなんて絶対に嫌だ。

生垣「（俺は…勝つんだ…！）」

ボールの勢いが失われていく。爆竜も泣き叫ぶことを放棄し、その紅蓮の焰にてその身を焼かれるのを受け入れつつある。

生垣が勝利を確信したその瞬間、視界の隅に飛び込んでくる人影があった。

その男の足には、蒼い爆竜が纏わりついている。

「うおおおっ！！」

声で確信した。

この人影の正体は、雷門の11番。染岡だ。

染岡「『ドラグーンクラッシュV2』！！」

余計なモーションは挟まず、足に爆竜を纏った状態で直接ボールに蹴りを叩き込む。

2匹目の爆竜により生命を吹き込まれた1匹目も復活し、青と黒の双竜がボールを包み込んだ焰に食らいつく。やがては押さえつける生垣の手に抵抗し、最後は彼の右手を弾き飛ばしてしまった。

生垣「な…に…？」

弾かれた右手の勢いに乗り、胴体が宙をさ迷う。

右手を見つめればその先には、もう少して捕まえることが出来たボールが飛び回っている。

ダメだ…そっちに行つては…

お前の行き先は、雷門のゴールだろう…？

全てがスローモーションで見えた。今手を伸ばせば、ゆっくりと飛んでいくボールを捕まえられそうなのに、それが出来ないのがもどかしい。

どんなに手を伸ばしても届かない。

空を泳いで、必死で掴み取ろうとするけど、出来ない。

スローな世界から解放されたのは、ボールが傘美野のゴールに収まったのを確認した直後だった。

「ゴール！雷門2点目、後半終了間際で、駄目押しの2点目を叩き込んだあ！！」

その瞬間、生垣の世界が終わった。

新たに手にした力でも、雷門からゴールを守ることは出来なかった。

「まだ終わってないツスよ、生垣さん！」

出前が生垣の脇を通り抜け、ゴールネットが纏わりついたボールを拾って小脇に抱える。

出前「俺らが点を取れば、延長に持ち込めます。まだ生垣さんのサッカーを終わらせませんから！」

FWとしての決意を胸に走り去っていく後輩を見て、生垣も少し気分が落ち着いた。そう、試合はまだ終わっていない。

まだ…

出前「みんな、1点取るぞ！」

「「おー！！」」

仲間達を鼓舞し、ピッチを駆ける姿に監督の貴崎は感動を覚えていた。

貴崎「（サッカー同好会の顧問になってくれと頼みにきた時は、何

事かと思いましたが：あれから半年。出前君もキャプテンらしくなりましたね…）」

ドリブラーの水口がボールを奪われた。

出前「『シャイングランド』！！」

大地を踏みしめると、光のエネルギーがピッチを突き進み：水口からボールを奪った染岡に着弾すると、大爆発を起こした。

染岡「うわああっ！！」

最後の最後でブロック技の噛ませになった染岡を後目に、出前が『シャインタックル』でフィールドを駆け抜ける。自分の持てる力を全て使って。傘美野サッカーを続けるために。

いつの間にゴール前に戻っていたのか、FWのシャドウが迫ってくる。『ダークグランド』で出前を弾き飛ばすシャドウだが、出前は技が当たる直前にボールを空に蹴り上げていた。

出前「（諦めない…）」

審判が時計に目をやった。

もう残り時間1分を切ったのだろう。いつでも笛を吹けるように構えている。

ということとは、これが最後のチャンス。多少遠かろうと知ったことではない。

兎に角必殺シュートを決める…！！

「『真・シャイントルネード』！！！！」

「『真・ダークトルネード』!!」

宙をさ迷うボールを蹴り飛ばそうと、2人のFWが光と闇の竜巻と共に空中で交錯する。2つの相反する竜巻はお互いのプライドを賭けて、眩く暗く、火花を散らす…

だがそこは攻め疲れを起こしていた出前が競り負け、シャドウに軍配が上がった。

爆発音を伴って地面に落下する両者。綺麗に着地した闇のFWと倒れ込む光のFW。だがどちらの足元にもボールは転がってはいない。

出前「（諦めない…）」

倒れ伏す出前の数歩先にそれはあった。咄嗟に身を起こして、転ぶように前のめりになりながらそれをキープすると、雷門ゴールに特攻する。

出前「（諦めない…諦めちゃダメだっ…!）」

だが…運命は残酷だった。

ピッ…

嫌だ。何も聞こえない。

ピッ…

聞こえる筈がない。試合終了のホイッスルなんて。

ピイイイイ…

聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない…

受け入れてしまったら。

もう生垣とは…あの頼れる兄貴分とは、一緒にプレー出来なくなる。いつも冗談を言ってみんなを笑わせてくれるチームのムードメーカー。「その決まったシュート待ったあ〜」というお決まりのギャグの後に、「生垣さん、寒いッスよ（笑）」とみんなでツッコミを入れるのがお決まりの流れだった。もうそれも出来なくなる。

ダメだ…終わっちゃダメだ…

漸く、自分達の敗北を認めた時。出前の目には、大粒の涙が光っていた。

角馬「試合終了！フットボールフェスティバル一回戦・第178試合場は、雷門中が死闘を制し、2-1で勝利しましたあ！！」

雷門中VS傘美野中

前半 0-1

後半 2-0

勝利：雷門中

整列して礼を済ませた傘美野イレブンは、貴崎監督の周りに集合した。

監督は泣きじゃくるイレブンをゆっくりと見回すと、にこやかに口を開いた。

貴崎「皆さん、感動をありがとう。私がサッカー同好会、そしてサッカー部の顧問になって半年が経ちましたが、半年分の感動を皆さんに貰いました。サッカー部の顧問になって良かった、そう思える見事な試合でした。あなた方のその涙は、真剣に試合に取り組んだ証です。この敗北をバネに、来年のフットボールフロンティアに向けて練習に取り組みましょう。…では生垣君。唯一の三年生である君から、後輩達に向けて何か激励の言葉をお願いします。」

にこやかに笑いながらも目に涙を滲ませた貴崎から言葉を引き継ぎ、生垣が前に進み出た。

生垣「お前らと半年間サッカーが出来て、本当に嬉しかった。お前らがいたから、俺は三年生が1人だけでも頑張れた。お前らと過ごしたサッカー生活は、俺の一生の宝物だ。」

普段はクールな安永でさえ、目から滝のように涙が溢れている。肩を震わせる後輩達に優しい眼差しを送りながら、更に生垣は言葉を続けた。

生垣「お前ら…その涙を、悔しいって気持ちを忘れるなよ。悔しさは成功という大樹を育てる養分だ。お前達がいつか立派な大樹に、勝利の花を咲かせる日を楽しみにしてるよ。…なに、いつまでも泣くんじゃねえよ。一足先にサッカー部を引退するけど、暇な時はいつでも相手するからよ。」

出前「い、いけ、がきさ、ん…」

嗚咽して言葉を上手く発することが出来ない出前。

生垣は苦笑すると、彼の頭をくしゃくしゃと撫でた。

生垣「出前、立派なキャプテンになったな。仲間を奮い立たせ、積極的にボールを追いかける…お前はこの試合で、キャプテンとしてストライカーとしての役目をしっかり果たしてた。お前にキャプテンマークを託して良かったよ。」

最後列から仲間を見守ってきた三年生に褒められて、感極まった出前は声を上げて泣き出した。

口には出さなかったけど、出前の心は生垣に対する感謝の気持ちで一杯だった。

出前「（ありがとございます生垣さん…俺、このチームを頑張っ
て引ッ張っていきます。もっといいキャプテンになってみせます！
！）」

* * *

響木「お前達…あいつらの涙を、よく心に刻みつけておけ。」

雷門イレブンを集めた響木は、悲しみに包まれた傘美野サイドを見

つめ、静かに呟いた。

響木「勝負つてのはどちらかが勝ってどちらかが負けるものだ。勝ったお前達は、負けた者の想いを背負うんだ。自分達が強いから、勝てたと思うなよ。上に行けば行く程、敗者の悲しみを背負わねばならん。敗者の想いを無駄にするな。戦ってきたライバル達に感謝してこそ、頂点を目指す資格があるのだ。」

「「「はい！！！！」」」

* * *

「雷門が勝った、か…」

メールで試合結果をサッカー協会に報告したシュウは、静かに息を吐いた。

雷門と傘美野。どちらも嘗ては弱小チームと呼ばれていたと聞く。その弱小同士の死闘を制した雷門の次なる対戦相手は如何なるチームなのか。

「ねえ、もうお仕事終わりでしょ？」

「そうですが…何か？」

「一緒に遊ぼう。折角時間が出来たんだから、遊べる時に遊ぼうよ。」
そう言って立ち上がって百合香は、シュウの手をぐいぐい引っ張りながら土手の斜面を上がり始めた。

「僕は遊園地もゲームセンターも行きませんよ。そういうつづるさいところには…」

「じゃあ、お散歩するだけでも良いから。一緒にいましょ。」

姉貴分の少女に手を引かれながら。シユウはまだグラウンドで立ち
尽くす雷門イレブンを冷めた目で見下ろした。

「（雷門中、あなた方にはいずれ、僕の切り札になってもらおうよ…）」

眼鏡を中指で押し上げると、シユウは百合香と共に姿を消した。

第15話 緒戦と覚醒と化身使い

フットボールフェスティバル初戦。雷門中は、パワーアップした傘美野中に苦戦を強いられるも、2 - 1で辛勝した。

敗者の想いを背負うことを響木に教えられた円堂達は、涙を流して散っていた傘美野の気持ちを胸に二回戦へと駒を進める。

一方、同時進行の他の会場では…

- 静岡県 -

桜咲木中VS清明院大学附属中の試合は、0 - 0のまま前半戦を終了した。

敵の組織的なプレーに翻弄される二ノ前達だが、出雲は全く疲れを見せていなかった。

「さて、後半戦ですが…」

清明院サイドのベンチでは、監督の香川が選手達に指示を出していた。

香川「先程、サッカー協会から連絡が入りました。『どんな手段を使っても、出雲 天馬を潰し、桜咲木に勝利せよ』、と…」

そう言つて香川は、隣のチームのベンチに座っている出雲を睨んだ。彼は前半相当走り回っていたにも関わらず、全く息が上がっていない。

東條「『どんな手段を使つてでも』というのは、『アレ』を使つても構わないということですか？」

香川「ええ。その言葉の意味は、各々の判断に任せます。出雲 天馬を倒すに伴い、桜咲木中の部員をどれだけ傷つけようと構いません。しかし皆さん、もし命令を守ることが出来ず、万が一桜咲木に敗北した場合は…どうなるかわかりますね？」

サッカー協会の指示に従わない、或いは、任務に失敗する…それは暗に、サッカー部の廃部を示している。

清明院大学附属中は、サッカー協会との繋がりが深いチームだ。協会が中心となつて発足した、『選手育成プログラム』のモニターにも協会直々に選ばれている。このフットボールフェスティバルに於いても、対戦相手のデータをいち早く協会から与えられており、多くのチームより有利に戦えるようになっていた。その優遇措置故に、協会の命令は絶対である。

神崎「はい。充分承知しております。」

キャプテンでMFの神崎が答える。負けは許されない。絶対的、圧倒的なプレッシャー。恐らく負ければ、即刻試合を監視している協会の職員から本部に連絡が行くだろう。

できれば廃部は避けたい所だが…果たしてどの様な処置が取られるのか。

両チームの選手がポジションについた。

敗北の重みを感じながら、後半戦がスタートする。

・桜咲木中VS清明院大学附属中

桜咲木中（F - スタンドード）

FW 出雲（12） 二ノ前（9）

MF 木更津（7） 九十九（11） 百目鬼（8）

DF 葉狩（5） 不破（3） 御位堂（4） 清村（2） 山吹
（6）

GK 代田（1）

ベンチ 無し

清明院大学附属中のフォーメーションは省略。

サッカー部設立当初からずっと変わらない、伝統的な5 - 3 - 2のフォーメーション。

御位堂を前列、清村を最後列に置き、彼らに挟まれるようにして他3人が横一列に並んだ特異な守備陣形に、九十九をトップ下に据えたオーソドックスなオフエンスの戦型。

今まで鳴神がいたFWの一角には新入部員の出雲が入り、トリッキーナプレイングで敵を攪乱する。

その独特なプレースタイルは目を引くものがあり、いざ後半戦開始を告げるホイッスルが鳴ると、二ノ前の合図と共に一気に敵陣へ切り込んでいった。

マークしていた筈なのに、機敏な動きでマークを振り払い。かと思えば、足元に吸い付くようなドリブルで敵にボールを触らせない。

あつと言つ間に守備陣を突破し、ゴール前に迫る。
しかし相對するキーパーの東條は、至つて冷静だ。

東條「出雲 天馬…正直何故君如きを警戒するかはわからないけど、
僕が英雄になるために、消えてもらつよ。」

なんと東條、敵が迫っているにも関わらず、目を閉じてしまった。
何事かと桜咲木の選手が身構える中、東條の体から暗黒の氣が放た
れ、禍々しき黒いオーラは何やら生物を模した姿に変わっていく。

- ADVENT -

東條「ハアアア…出て来い、僕の『化身』ッ…!!」

生物の姿ははつきりと形作られ、それが人型の白虎であることがわ
かった。

白虎は唸り声と共に、作り主である東條の背後に君臨する。

東條「これが僕の化身…『氷獣デストワイルダー』だ!!」

二ノ前「何!？」

代田「化身…だと?」

『氷獣デストワイルダー』。化身と呼ばれるそれは、代田達が今ま
でに見たことがない現象だった。

観客も、突然現れたモンスターに驚き、ざわめいていた。

東條「消える…出雲 天馬あつ!!」

東條の叫びに反応し、デストワイルダーが飛び上がる。次の瞬間、
出雲の後ろに降り立つと、彼を引きずり回しながら東條の元へと向

かっっていく。

東條の方も両手に『デストクロウ』を装着すると、腰を落として構えている。

東條「『クリスタルブレイク』!!」

引きずられた出雲を東條の懐に放り込み、東條は巨大な虎の爪を出雲に突き刺した。爪を突き立てられた出雲は宙に掲げ上げられ、結晶が弾け飛ぶように大爆発を起こした。

二ノ前「出雲！」

木更津「出雲くん！」

仲間達の声が飛ぶ中、出雲はピッチに倒れ伏す。

それを見た東條は彼からボールを奪うと、前線の中村にそれを放り投げた。

中村「今度は俺の番だ。おおおっ…!!」

中村も氣を放つと、それを生物の形…『化身』へと変えた。コードらしき太いチューブが幾つも体に刺さった黒い影。顔は非生物的な面長で、目も鼻も口も存在していない。

中村「出でよ！我が化身『機械兵サイコローグ』!!」

「オオオオオ…!!」

サイコローグがぐくもった叫び声を上げる。一目見ただけでは判別が付かないが、じっくり見てみるとどうやらコオロギをモチーフにしていることがわかった。

桜咲木中は、誰も動くことが出来ない。この奇怪な生命体に、化身という存在に、そしてそれを操る中村に気圧されている。それを見た中村は不敵な笑みを浮かべると、サイコログを従えてゴールに突っ込んできた。

中村「だらしのない奴らだ、どいつもこいつもびびりやがって…とつと潰してやるぜ!!」

走りながらサイコログが前屈みになり、バイクに変形した。それに飛び乗った中村は、一度地面に足を付けて独楽のようにバイクを回転させると、回転したままゴールに突入する。

呆然とするMFを引き倒しながら、立ち向かうDFをなぎ倒しながら。

中村「デッドエンド!!」

化身との連携必殺技。

それは次々とDFを跳ね飛ばすと、味方のいなくなり孤立無援の代田へと襲い掛かる。

だが代田も諦めてはいない。右手に纏ったエネルギーを利用して、巨大なドリルを作り出した。

代田「ギガドリルブレイクV3!!」

独楽とドリルがぶつかり合う。化身という新たな脅威に戸惑いながらも、ゴールを守るために必死で腕を振るう代田。廃部を賭けて、全力で桜咲木を潰しに掛かる中村。2人の力は互いの技を破壊し、ボールを奪い取るために攻防を続ける。

やがて、ドリルに亀裂が生じ、根元から音を立てて折れてしまった。

独楽は勢い良くゴールに侵入すると、ボールをネットに押し込めようとする。

代田「させるかあ!!」

だが桜咲木のキャプテンはそれをさせない。両手を添えて独楽を受け止めると、どうにかボールを取り上げようと歯を食いしばって耐え続けた。例え敵の新たな必殺技に襲われようと、ゴールは割らせない。新必殺シュートの噛ませになって、1点リードされるなど、自分のキーパーとしてのプライドが許さない。

代田「割らせない、絶対に!!」

代田の手がボールを掴み取る。中村に勝つたのだ。

そしていざ反撃に出ようと、ボールを投げるが…代田の目に映ったのは、ピッチに倒れ、呻き声を上げる仲間達の姿だった。鼻血を出している者もいる。轢かれた腕が腫れ上がった者もいる。

二ノ前「代田サン、まだ俺がいますよ!」

FWの位置にいた二ノ前が手を振りながら走り寄ってくる。

代田「ああ、頼む!」

GKから託されたボールをトラップし、二ノ前が上がっていく。だが清明大附属の選手達は誰も反応しない。気味の悪い薄ら笑いを浮かべて、馬鹿にするように二ノ前を見送っている。

彼らの笑みの意味を二ノ前が悟ったのは、眼前にデストワイルダーの前足が迫ってきた時だった。

バキッ！！

という鈍い音と共に、二ノ前の体が吹っ飛んでしまった。頭から地面に落ちた彼は、苦悶の表情を顔に張り付けていた。

東條はゆっくりとした足取りでボールを拾い上げ、キャプテンの神崎にそれを渡した。

神崎「続けるぞ。この害虫共が二度とボールを蹴れないように…駆除作業だ。」

完膚無きまでに桜咲木中を叩き潰し。自分達の勝利を確実なものとする。もしここで負ければ、サッカー協会からどんな制裁を加えられるかわからない。本来ならば標的は出雲1人だけであるが、勝つためには念を入れて、他の選手も足腰が立たなくなるくらいに痛めつけておく必要がある。

神崎を中心に、清明大附属の執拗な暴行が始まった。

九十九も不破も、代田も。

次々とターゲットにされ、ボールをぶつけられる。

審判に見えない位置からの肘うち。スパイクによる足への打撃。

完全に彼らが立ち上がれなくなり、フィールドに11のボロ雑巾が転がるまで、攻撃は続けられた。

「何故だ…」

顎を芝に乗せ、苦しそうに這い蹲りながら…九十九が疑問の声を上げる。センターサークルの傍に倒れる彼は、ボールを保持している中村の、一番近くにいた。

九十九「何故俺達を、此処まで痛めつける…？」

中村「さあ、なんでだろうな!？」

中村の蹴りが顔面に炸裂する。ボールを介しているとはいえ、まともには食らえば鼻の骨を折る可能性もある。鼻血で顔中を真っ赤に染めた九十九の右手を、神崎のスパイクが踏みつけた。

神崎「少なくとも、散っていくお前達を知る必要はない。」
九十九「くっ…」

誰も立てない。
誰も立ち上がれない。

本当に立てなくなるまで体を傷つけられた者が殆どだが、中にはこれ以上暴行を受けるのが嫌で動かない者もいた。

ものの数分で大人しくなった桜咲木イレブンを見て、中村が嘲りの笑みを零した。

中村「しかし、情けねえ奴らだな。ほんのちよつと遊んだだけであつたばかりやがって。…ま、公式大会にも出れねえ三流チームなんざこの程度か。」

神崎「桜咲木魂、か…くだらない。そんなものが合つた所で、何の役にも立たない。現にお前達は、醜く、無様に、惨めに散るのだから。お前達が試合開始前に叫んだ『桜咲木魂』とは、この程度の薄っぺらいものなのだ。」

誇りを汚され。仲間を傷つけられ。怒りの感情が沸々と湧き上がる。しかし誰も立てない。傷だらけの戦士達は、無様にピッチに横たわつたまま…神崎達による侮辱の言葉を聞き続けた。

「…める。」

べらべらと醜く罵り続ける中村を遮るように、立ち上がる者が1人。

中村「ああ?」

背番号12番。桜咲木の新人部員・出雲 天馬。傷だらけになりながらも、しっかりとピッチを踏みしめて立っている。

肩で荒い息をしながら、一步…また一步と中村に向かって歩を進めていく。

出雲「このチームを馬鹿にするな…僕の…仲間をっ…!」

お馴染みのですます口調は鳴りを潜め、仲間を侮辱された怒りで髪を逆立て。中村の足元にあるボールを奪おうとするが…

中村「近寄んじゃねえ!!」

顔面にボールが炸裂する。

だが出雲は、一步後ろにたじろいだのみで、傷一つない。

よく見ると、ユニフォームは汚れているものの、目立った傷跡はない。あれだけ暴行を受け、化身による必殺技もくらったにも関わらず、出雲は全く怪我をしていなかった。

出雲「馬鹿に…するな…!」

海の底を彷彿とさせるマリンプルの瞳が、怒りの炎を湛えている。次第に出雲の体から黒い妖気が放たれ、それとは対照的に出雲の髪は白くなっていく。

出雲「うああああ……！」

漆黒の妖気の中で、出雲が激昂する。気弱で優しげな出雲には似つかわしくない禍々しきエネルギーに包まれて、逆立った白銀の髪が揺れていた。

一体出雲に、何が起きたのか。敵も味方も啞然とする中、声を上げながら中村を弾き飛ばす出雲。

そのままピッチを横切り、ゴールに直進する。

出雲「『スラツシユダガー』……！」

中村「何イツ!？」

出雲の足から、両刃鋸のような長剣が伸びる。ゴールを突き刺す勢いで飛んでいくその必殺技は、中村の使用するシュート技だった。

東條「うわっ！」

まさかシュートを撃つてこないだろうとタカを括っていた東條は、咄嗟にデストワイルダーの前足でボールを弾いた。辛うじて失点は防いだが、仲間の必殺技でゴールを奪おうとは恐ろしい奴だ。

代田「何故……出雲は敵の必殺技を？」

眼前で起きている信じがたい現実に、代田は首を捻るばかり。だが、何が起きているにしろ……桜咲木を馬鹿にされたことに対する怒りは、出雲と同じだ。出雲に感化された部員達が、少しずつ上体を起こし始めた。

中村「（気味の悪い奴……）神崎、早めに決めちまえ！」

東條からのロングボールを受け、神崎がキーパーの代田を睨みつける。

神崎「言われずともそのつもりだ。輝け、『総統オーデイン』…！」

神崎の足元が金色に光り輝き、彼の顔に不気味な陰翳を作り出す。神崎を包むその光の中から、鳳凰を模した黄金の戦士が生み出された。両手を前で交差させ、使い手の背後に佇むその姿は、罪人を裁く断罪の男を思わせる。

清明大附属の3人目の化身使い。神崎が右手を上げると、オーデインの背中に黄金の翼が展開した。オーデインと神崎が一体化し、ボールを携えて浮かび上がっていく。

神崎「これが俺の化身シュート…『エターナルカオス』…！」

単純な破壊力なら3人の中でトップクラスの威力を誇る神崎の化身との連携必殺技。もしこれを放たれば、代田は防ぎきれない。今でさえ中村の『デッドエンド』に敗れているのだから、『エターナルカオス』を食らえば失点どころか選手生命を断たれる恐れすらあった。

神崎「おおおっ…！！」

シュートモーションに入る神崎。

だが…

「『イーグル…サイクロン』…！」

突如吹き始めた突風に煽られ、ボールを取り落としてしまった。神

崎とオーデインも強風に吞まれて地面に落下する。

窮地を凌ぎ、失点を防いだのは葉狩 勲。紫色のリーゼントが天を仰ぎ、傷だらけになりながらもしっかりと立ち上がっていた。

九十九「葉狩！」

木更津「葉狩さん！！」

痛めつけられてすっかりボサボサになった髪を櫛で整えながら、葉狩はぐるりと仲間達を見回した。

葉狩「情けねえな…：新入りの出雲があれだけ頑張ってるのに、俺はピッチに寝そべるだけでよ。桜咲木の部員は出雲だけじゃねえんだ…：俺も戦うぜ！」

清村「ハッ…：1、2年ばかりにいい格好させるかよ。俺にもやらせな！」

百目鬼「そうだ！俺達全員で、あいつらが馬鹿にした桜咲木のサッカーを見せてやる！」

1人…：また1人と立ち上がる桜咲木の選手達。
出雲の頑張りが、彼らの心を動かしたのだ。

代田「まだ…：鬪えるか、お前ら。」

清村「当たり前だ。鳴神と一緒に頂点を目指す夢…：誰も諦めてねえよ。」

守備に入るため前に向き直る清村が、もう一度だけ代田の方を振り返った。

清村「行こうぜ、代田。全国のお天辺に。」

「何が桜咲木だ。何が夢だ！てめえらのサッカーは、此処で潰されんだよおおお！！」

倒れても立ち上がる桜咲木イレブンを見て、中村は腹を立てたらしい。未だにピッチを転がるボールを保持すると、必殺技を発動して敵選手を抜きにかかった。

中村「『サイコアクセル』！！」

サイコログの加速力を思わせるフルスピードのドリブルで、縦横無尽にフィールドを引き裂ていく。負けは許されない。絶対に。敗北の重みを、恐怖を知っているからこそ、容赦なく相手を弾き飛ばし、進むのだ。

不破「こっから先は通行止めだ。『岩窟王』！！」

だが眼前に迫る巨体が、突然岩石で武装し、車止めの如く中村の侵攻を防いだ。

その様はまるで、ゴール前に聳え立つ岩壁のようである。中村の突進を受けてもびくともしない不破が、右サイドを走る百目鬼の姿を認めると豪快なスルーパスを放った。

ボールを受けた3年生の百目鬼 レンは、向かってくる清明大附属の選手に突っ込んでいくと、怪しい紫色のオーラを纏っていき…

百目鬼「『ザ・眼Q』！！」

赤紫の霧の中から、鋭い光を放ちながら睨み付けてくる目玉が、一つ二つ…無数に浮かび上がった人間の眼に睨まれて、その向かってきた選手は恐怖の余り動けなくなってしまう。

百目鬼「九十九！」

そして百目鬼はピッチの中央を走る九十九にボールを折り返す。中盤はキャプテン神崎を中心に清明大附属の選手がひしめき合っているが、桜咲木の司令塔はこれを突破出来るのか。

迫り来る相手に対して、九十九は全く臆した様子はない。かといって誰かにパスを出す訳でもなく、誰もいない真上にボールを蹴り上げた。

九十九「『ミリオン・ダーツ』！！」

血迷ったか…？と神崎らがのんびりと虚空をさ迷うボールを眺めていると、九十九の発声に呼応するかのようにボールが光り輝いた。

次の瞬間、輝きの中から無数の光の矢が放たれ、地上に轟めく清明大附属の選手に降り注いだ。

その光の矢は降り止むことを知らず、真下にいるならず者達を一掃するまで攻撃の手を緩めなかった。

邪魔者を蹴散らし役目を終えたボールが、九十九の足元に落下する。

九十九「頼むぞ、出雲！」

こくりと頷き、出雲がゴール前に走る。いつの間にか逆立った髪も元通りになり、全身から放っていた禍々しきオーラも消えていた。

中村「そいつをペナルティエリアに入れるな！絶対に止めて、ボールを奪うんだ！」

4人のDFが出雲を取り囲み、我先にと争うように出雲に襲い掛かった。敵の肘が、肩が、スパイクが、頭が…ありとあらゆる部位が、ボールを奪うために出雲に迫る。

出雲「『サイコアクセル』…！」

またしても中村の必殺技をコピーし。本家顔負けの加速力で4人のDFを置き去りにして、再度ゴール前に辿り着いた。もう1人のFW・二ノ前が囿に回ってくれたお陰で、清明院のゴールは完全にがら空き。残すは東條ただ1人である。

東條「来なよ。君の付け焼き刃のシュートでは、絶対に勝つことは出来ないんだから…」

言いながら、東條は再び集中力を高めると、『氷獣デストワイルダー』を呼び出した。雄叫びを上げる氷の獣と、デストクロウを装着した東條が出雲を迎え撃つ。

どうする、出雲。

味方の誰もが、ボールを携えて走り抜ける背番号12に語り掛けた。彼のガッツに心を打たれ、覚醒したは良いが…出雲の必殺技は先程弾かれていた。

彼はどうするつもりなのだろう。

もう一度、中村の技をコピーして使うのだろうか。

それとも…

敵味方問わない。

ピッチに立つ21人全員が、この不思議な少年の一挙一動に注目していた。

無論、観客も。鳴神の遺影を抱きかかえる支倉の指に力がこもる。彼女の眼前で、遂に出雲はシュートの態勢に入った。

右足に雷の鎖を纏って武装し。バチバチと火花を散らす足とボール。

電撃によって焦げ目のついた芝。

代田「（あの技…まさか！？）」

思わず疲れや痛みを忘れて目を見開く。

代田だけではない。桜咲木イレブンの誰もが、その技には見覚えがあった。

そう…今は亡き、桜咲木の『雷のストライカー』。彼が操る必殺シユート…

鳴神の得意としていた、稲妻の如きスピードで芝を、空気を、全てを焦がし。

右足に絡み付かせた電撃の鎖を、ボールを浮かせると同時に解き放ち。

空中で静止した、スパークするボールに、雷を纏いし右足で。ダイレクトで蹴りを叩き込む…！

出雲「『チエイン・サンダー』…！！」

今、出雲の脳裏には。昨日代田が見せてくれた、鳴神 雷輝のスーパープレーが呼び起こされていた。彼の必殺シユートを見て、出雲の心は強く揺さぶられた。

それだけの迫力と魅力と威力を備えていたのだ、鳴神の『チエイン・サンダー』は。

画面の中の先輩が、自分に語りかけてくるような雰囲気さえあった。洗練された無駄のない動きで相手を手玉に取り、しなやかな足使いでボールを蹴り上げ、シユートする。

たったそれだけの…時間にすれば15秒前後の動作なのに、どうしてこの人は僕の心を支配するのだろうか。

僕もこんなシユートを撃ちたい、みんなの力になりたい…そういつ

た想いが出雲に活力を与え、そして奇跡を起こしたのだ。

雷のストライカー・鳴神の再来。

伝説を塗り替える男・出雲の誕生を。

『チエイン・サンダー』とはよく言ったものだ。

放たれたシュートは電撃の鎖と共にゴールへ突き進んでいく。一度自分の右足を鎖で縛り付け、氣の力を極限まで高ぶらせて一気に解放する。当然秘伝書の類も存在せず、この技を使えるのは、鳴神だけだと思っていたのだが…

出雲「いつ…けえええ！」

普段の彼からは想像もつかないような大声でボールに気合いを込める。

東條「無駄無駄無駄…止めろ、デストワイルダー！！」

それに負けじとデストワイルダーも唸る。

一声吼えた後飛び上がると、ボールの背後に回り巨大な爪で押さえつけるように東條の下へと運んでいく。

東條もデストクローを構えて腰を落とし、全エネルギーを右手に集中させた。

- FINAL VENT -

東條「『クリスタルブレイク』！！」

ボールを運んできたデストワイルダーと、東條の振り上げた右手が

交錯する。

電撃を帯びたボールはデストワイルダーに上から抑えつけられ、下から東條に突き上げられ、行き場を失ったパワーが爆発しようとしていた。

結晶が破裂するかのように、氣を注ぎ込まれて膨張するボール。

だが出雲の『勝ちたい』という想いが上回ったか、デストクロウを電撃が蝕み、デストワイルダーも力尽きて消滅し…気がつけば、化身も武器も失った東條ごとゴールに押し込まれていた。

その瞬間、人々の目には、出雲の背中に鳴神の姿が重なって見えたと
いう…

やがて、焦った中村がセンターサークルにボールを置き、試合が再開されたが…すぐさま試合終了を告げるホイッスルが鳴り響いた。観客席から歓喜の声が起こる。名門・清明大附属を復帰したばかりの桜咲木が破るといふ番狂わせ。

興奮が最高潮に達した観客をよそに、取材に来ていたスポーツ雑誌の記者達は、『化身』という新しい要素を記事にしようかと慌ただしく動いていた。

そんな中、静かにフィールドを見下ろす、中年の男性が佇んでいた。銀縁眼鏡を掛け、何やらノートパソコンと思しき機材を小脇に抱え、全身黒づくめでピッチを…主に清明大附属の選手達を、見つめている。

「…出雲 天馬の力が覚醒しましたか…やはり清明院では、彼を止めるには力不足だったようですね。」

そう言いながらパソコンの画面を起動すると、3人分の数値化されたデータファイルが現れた。

中村と神崎、それに東條のものである。

「ですが…貴重なデータは取れました。化身システムはまだ不完全だということもね…」

* * *

試合終了後、中村ら3人はスタジアムの裏の駐車場に呼び出された。呼び出したのは、サッカー協会の監視員。ユニフォームからジャージに着替え、青ざめた顔で、息を切らせながら3人は監視員の所に集まった。

敗北の重みは、知っていた筈なのに。負けてしまった。向こうの用件はわかっている。どんな制裁を課せられるのだろうか…

「清明院大学附属中サッカー部所属・神崎 士郎、中村 創、東條 悟…ですね。」

黒いスーツを身に纏い、サングラスを掛けた黒服2人。その黒服の陰から出て来た眼鏡の中年男性を見て、3人の体に戦慄が走った。

東條「鍊山…さん。」

ノートパソコンを小脇に抱えた鍊山なる男。穏やかで知的な外見ながら、その眼光は冷たく、今までに何人も人間を殺してきたかのような、残酷な光を放っている。

鍊山「桜咲木の件は残念でしたな。諸君はサッカー協会の指示を守れず、出雲 天馬を倒すことが出来なかった。」

神崎「……………」

鍊山「…ですが、サッカー部に対する制裁は行いません。あの試合を通して、私達サッカー協会の科学班としても貴重なデータを頂けましたからね。上層部の許可も下りましたし、清明院はこれからもサッカーを続けることが出来ますよ。」

それを聞いて、ふつと3人の表情が和らいだ。

東條「ほ、本当ですか？では僕は、まだ英雄を目指せるんですか！？」

嬉しさのあまり、鍊山に詰め寄る東條。だが、鍊山の方は眼鏡を中指で押し上げると、小さく舌打ちをしたのみだ。

中村「鍊山さん…？」

鍊山「残念ながら…サッカー部の存続は認められましたが、君達3人には 此処で死んで頂きます。」

死の宣告。

鍊山からの絶望的な言葉を聞き、神崎と東條が後ずさりする。突然、それまで静観を守ってきた黒服2人が、彼らの背後に回った。東條達が逃げられないように…

「うつ…あああああ！！！」

神崎の隣で声が上がった。

振り向くと、顔を苦痛に歪ませ、中村ががっくりと膝を着いている。

「あああああつ！！」

断末魔の悲鳴と共に、彼の体の節々から青白い炎が噴き出た。身を焼くような痛みと熱さに悶え苦しみながら、中村が辺りを転げ回る。続いて、神崎も一声呻くと、同じように炎を上げながら倒れ込んだ。「熱い！熱い！」と、少しでも冷たい場所を探して這いずり回る2人。苦しさを紛らわそうとアスファルトに爪を立てる。だが苦痛から逃れられる訳もなく。バリバリと爪に輝が入り、血が流れ落ちる。だが爪が剥がれる痛みよりも、死に直面した恐怖がそれを上回り、神崎と中村は泣き叫び続けた。

錬山「おや…我々が手を下さずとも、勝手に死んでくれましたね。」

断末魔の悲鳴もすぐさま収まり、僅か10数秒で彼らは大人しくなった。だが彼らにとって、一生のうちで一番辛い時間だっただろう。錬山が彼らの屍を足の爪先でつつくと、つい数秒前まで人間だった肉塊は塵芥へと変貌した。

東條「中村君、神崎君…」

錬山「死なないということは…君はどうやら、化身システムの耐性があるようですね。」

東條「耐性…？」

錬山「そう。君達3人は超次元サッカーの歴史を塗り替える新要素『化身』を商品化させるための被験者に選ばれ…今まで化身を發動して戦ってきました。ですが、少々体に掛かる負荷が大き過ぎたようです。神崎君達は、その負荷に耐えうるだけの力を持っていません。だから死にました。」

錬山の解説は続く。

次第に東條は壁際に追い詰められ、黒服2人と鍊山に囲まれる形となった。

鍊山「君は耐性があるようですし、協会の地下に閉じ込めてモルモット程度には使つてあげますよ。」

東條「嫌だ…そんなの嫌だ…ぐうっ!!」

東條は心臓に手を当て、その場に座り込んだ。額に脂汗が浮かび、先の中村達と同様に…体から青白い焰が上がった。

東條「た…助けて…」

鍊山「ふん。」

東條「お願いします、助けて…下さいいい…!!」

鍊山の服に手を掛け、涙を流す東條。その手は既に青白く焼け始めており、指先は灰となってボロボロと崩れ落ちている。

鍊山「失敗作を助ける義理など、私にはありません。そもそもあなた方は、自ら志願して実験台となったのです。自業自得…というものですよ。」

東條「そんな…」

次第に東條の顔は、涙と汗で濡れていき、灰となった鼻も耳も唇も…涙に混ざって流れ落ちていった。

一番柔らかい眼球などは、もう完全に面影が無くなっており、濡れた灰が落ち窪んだ眼窩にこびりついていた。

鍊山「さようなら、失敗作諸君。あなた方に良き終末が訪れんことを…」

「嫌だああああっ！！！！」

声を枯らしながら叫んだ、最後の言葉を残して…東條も頭の天辺から足の先まで灰になり、絶命した。

鍊山「…やれやれ、次からは少し放出する氣の量を減らしましょう。そうすれば使用者の負担も少しは減るでしょうからね。」

嵐の後の静けさが、辺りを包み込んだ。

年若い少年達の死を見届けた鍊山は、服とパソコンに付着した灰を払い、黒服を従えてその場を後にした…

- 茨城県 -

静岡で化身使い3人が無残な死を遂げたのと同じ頃、茨城県では嘗ての王者・帝国学園と地元の高豪、倫堂学院が戦っていた。

大伝「うがあああ！必殺タクティクス、『デスキャノン』！！」

ゴール前で帝国学園DF・大野 伝助が豪快なフリーキックを放つた。帝国学園が誇る2トップ、テクニシャン御厨とポストプレイヤー寺門による猛攻に耐えかねた、倫堂のDFがスライディングをしたのが原因だった。焦るDFが行ったスライディングタックルは寺門の足を刈り、帝国がフリーキックのチャンスを得たのだ。

キックの必殺タクティクスの威力を試したい…という大伝の希望で、彼がキッカーを務めたのだが、コントロールなど関係無い、文句無しのパワーだ。

大伝のシュートは倫堂の壁となった選手を弾き飛ばし、あっと言つ間にゴールネットに突き刺さった。

「ゴール！！帝国学園、これで実に6点目！駄目押しの追加点が倫堂ゴールを揺らし、快調のまま一回戦を突破しましたあ！！」

「いいぞー大伝、お前は帝国の太めの男子の希望の星だ！！」

「きゃー、大野君かつこいいー！！」

大伝「うがー！！」

茨城県まではるばる応援に来た帝国のクラスメートに手を振る大伝。そんな彼を後目に、ベンチで試合を見守っていた佐久間が鬼道に話し掛けた。

佐久間「鬼道、どうやら真・帝国も一回戦を突破したようだぞ。」

鬼道「真・帝国が！？」

試合に勝利した喜びも束の間、鬼道の表情が曇った。

あの愛媛での一件以来、不動を含めた真・帝国学園のメンバーは全員地元の病院に入院していた筈のだが、ある日突然、全員が忽然と姿を消した。不気味なことに、病室に付けられたネームプレートも外され、ベンチメンバーも含めた16人全員が…ある日を境になくなってしまったのだ。

エイリア事件が解決したが、まだ真・帝国の件は終わっていない。何かしらの動きがあるとは思っていたが、まさか彼らもこの大会に参加していたとは。

佐久間「すまない鬼道…俺があんな奴に従ったばかりに、みんなに迷惑を掛けて…」

まだ佐久間の足は、完全に治っていない。一応ボールは蹴れるのだが、念のため一回戦は一軍から外れて、マネージャーと共に記録係を務めていたのだ。

彼の代わりに、3年生のFW・御厨 麗一（みくりや れいいち）が一軍入りしていた。

鬼道「気にするな。それよりお前は、早く足を治すことに専念するんだ。寺門や源田、土門達と一緒にプレー出来るように…」

不動に、影山。彼らのせいで、佐久間と源田は心に深い傷を負った。彼らは今でも、自分達が犯した罪に縛られ続けているのだ。

もし、勝ち続けるうちに真・帝国と当たることがあるなら。彼らの仇を取りたい。

そして、影山の呪縛から解放されたい。懐かしき赤いマントをはためかせ、鬼道は電光掲示板に表示された帝国学園のチームエンブレムを見つめた。

- 福岡県 -

「『真・キラードライブ』!!」

万能坂中のFW・千御泥 絢（ちみどろ けん）の殺人回転シュートがキーパーに襲い掛かる。万能坂中には元々サッカー部は無かったのだが、エイリアン事件以降全国各地で起こっている超次元サッカーブームに乗じて、サッカー部が設立されたのだ。

そして今日が、記念すべき万能坂中初の公式戦なのだが…後半戦終了間際。得点は、9 - 0で万能坂が負けている。

この千御泥のシュートが、万能坂の最後の攻撃。

せめて1点でも取れば良いが…

千御泥と相対する敵のGKは、頭にバンダナを巻いている。彼は両手に赤い氣を溜め、顔の前でクロスさせると…前に大きく飛び出し、交差させた両手を展開して、右手をボールに突き出した。

「『ゴッドハンド…X』!!」

それは、千御泥がテレビの中継で見た、雷門中GK・円堂 守の必殺技に酷似していた。彼の『ゴッドハンド』と違うのは、技のモーションと、燃えるような真つ赤である点だろう。赤き神の手は、『キラードライブ』を受け止めると、しっかり手の中に収めた。

「点はやらない…僕がゴールを守る限り!」

敗北のホイッスルを聞きながら、千御泥ら万能坂イレブンはピッチに倒れ込んだ。初戦敗退。それも、大量得点差で。

千御泥「この悔しさ、忘れねえぞ…あと10年したら、絶対強豪って呼ばれるくらい強くなつてやる…!」

万能坂中VS天龍学園

前半 0 - 3

後半 0 - 6

トータル 0 - 9

勝利：天龍学園

「じいちゃん！」

殆どGK技を使わず、万能坂を下した天龍学園のキーパーは、ベンチに座る監督と思しき初老の男性に走り寄った。

「いつになったら『あいつ』と戦えるの？」

「焦るな、もうじきだ。勝ち続ければ必ず出会える。必ず奴は頂点を目指して勝ち上がってくる。」

青い帽子が印象的なその老人は、晴れ渡る福岡の空を見上げ、呟いた。

「守……」

円堂 守によく似た外見、よく似た技を使うキーパーと、一風変わった青キャップの老人。

福岡県立天龍学園。

彼らもまた、全国の頂点を目指し戦う猛者の一角。

次々と姿を現すライバル達。

果たして雷門中と戦うことになる次なる相手は一体……

一回戦終了。

勝ち残ったチームは、あと512。

第16話 一回戦を終えて(前書き)

日常パート。若干暗めです。

第16話 一回戦を終えて

フットボールフェスティバル一回戦。傘美野に辛勝した雷門をはじめ、帝国や桜咲木といったライバル達も二回戦へと駒を進めた。少年達を実験台に新システムの開発を行うなど、主催側の中学サッカー協会が不穏な動きを見せるが…まだ円堂達は、この大会に隠された思惑を知る由もなく。来るべき二回戦に向けて、練習に励んでいた。

* * *

「『稲妻ステップ』!!」

栃木FCの司令塔・宇都宮 雷都（うつのみや らいと）の軽快なステップに合わせて、落雷が魁皇学院の選手を蹴散らしていく。多くのチームが勝者と敗者に分断される中、魁皇学院中学VS栃木FCの試合も佳境を迎えていた。

宇都宮「有り得ねえ…栃木の星が、一回戦で負けるなんて！絶対有り得ねえんだよ!!」

サラサラのストレートヘアを振り乱し、端正な顔を歪ませた宇都宮が魁皇ゴールに迫る。

彼ら栃木FCは、フットボールフロンティアと同時期に行われたクラブチームの大会でベスト16入りを果たしている。それも、優勝候補の一角である明紋FCを破つての快挙だ。相手さえ良ければ、準々決勝進出も狙えたかもしれない。彼らを破った石ノ森SCは準優勝のチームである。

そのチーム相手にPKまで食らいついた栃木FCが。負けようとしている。たかが中学校のサッカー部如きに。

宇都宮「小山！」

宇都宮のキラーパスが、栃木FCのFW・小山に繋がる。

小山 遊（おやま ゆう）。栃木県小山市出身の中学2年生。繊細なボールタッチと精度の高いループシュートが自慢のFWだ。彼とコンビを組む栃木 市（とちぎ いち）も、小山とアイコンタクトを交わしてゴール前に走り込んだ。

小山「食らえ、我が栃木FCの必殺シュート……」

ボールを蹴り上げ、栃木と小山がそれを挟み込む。

栃木県を彷彿する緑色の閃光がボールを包み、小山達が勢い良く蹴り飛ばした。

「『』だぶるじえい、V2『』！！」

緑色のエネルギーが渦を巻く。まるでハリケーンのようにピッチを荒らし回る敵のシュートに、小坂ら魁皇学院の守備陣は太刀打ち出来ない。

小坂「行ったぞ、三原田！」

残すはキーパーただ1人。

魁皇学院のGK・三原田 コウジロウ（みはらだ こうじろう）は、右手の拳に熱く輝く焰を灯し、ボールを思い切り殴りつけた。

三原田の背後には百獣の王、ライオンのオーラが浮かび上がっており、波打つ心臓から供給される真っ赤な氣が三原田の拳を介してボ

ールに力を注ぎ込む。

三原田「『ライオン・ハート』!!!」

ドクン、ドクンと……心臓の鼓動に合わせて気がボールに注入され、一気にそれを弾き飛ばした。ライオンの鬣の如き雄々しい髪を逆立て、顔に青いペイントを施した三原田の拳が、ボールを前線に撃ち出す。

三原田「行け、てっぺい!」

三原田 隼の超カウンター!。ピッチ上を這うように進むボールを、誰も止められない。自分とボールの距離を一瞬にして埋めた三原田に感謝しつつ、隼がボールをトラップしながら攻撃に転じる。

「行かせるかよ!!!」

DFの足利 尊士(あしかが たかし)、佐野 和泉(さの いずみ)が止めに入る。

隼「『韋駄天ダッシュ』!!!」

フルスピードで、しかしボールは手放さず。

一陣の風が、栃木FCの2人の間を吹き抜ける。間髪入れずに風圧が巻き起こり、2人のDFを吹き飛ばした。

宇都宮「止める!」

赤いキャプテンマークを巻いた腕を振りながら、残ったDFに指示を出す。

だが隼には既にゴールを決めるビジョンが浮かんでおり、DFが必殺技を使ってくることもしっかり把握していた。

「『ヘルズマウンテン改』!!」

チーム1の巨漢、岩舟 山（いわふね やま）が、巨大な山を呼び起こしてゴール前を覆い隠した。

攻め倦ねる隼の背後にはもう1人：葛生 原人（くずう はらんど）が忍び寄っている。

葛生「ククク…『真・ホネブーメラン』!!」

骨で出来たブーメランが隼に襲い掛かる。

隼の足元にあるボールを奪い取り、使用者の所へ帰るために。

隼「甘いぜ!」

だが隼は目の前にある巨大な山肌にボールをぶつけ、跳ね返って空中に浮かんだそれを受け取るべく飛び上がった。結果的にブーメランは隼に当たることなく、山にぶつかって碎け散ってしまった。

そして滞空したその不安定な体勢から、水色のオーラをその身に纏い、ハヤブサの形をしたモンスターを呼び出した。

その場にいた誰もが空を見上げると、巨大なハヤブサが翼を広げ、ピッチに向かって滑空してくるではないか。

囀りながら隼の真上に飛んでくるハヤブサと、隼のオーバーヘッドキックが重なった。

隼「『ファルコンドライブ』!!」

とてつもない回転力と、ハヤブサのパワーが合体し、強力な必殺シユートが繰り出された。

岩舟山の如き巨山を瞬く間に突き崩したボールは風圧で瓦礫を撒き散らしながら突き進んでゆく。

GKの日光 照宮（にっこう てるみや）の顔にも飛礫は飛んできた。

日光「『華厳の滝』!!」

華麗に右手を振ると、突然ゴール前を覆うように巨大な滝が現れた。和の静けさ、大自然の雄大さを醸し出し、『ファルコンドライブ』を迎え撃つが…ボールの回転力で滝を抉られ、一瞬にして失点を許してしまった。

実況「隼 轍平、ハットトリックで勝利だ!!」

強豪クラブを破った興奮から、魁皇イレブンが勝利の立役者である隼に駆け寄る。

ブラジルをイメージしたカナリア色のユニフォームが緑の海に沈む中、小坂達は隼の活躍を褒め称えた。

馬田「やったね、てっぺい君!」

三郷「これで完全復活…もう怖いもの無しだな!」

同じ2年生の2人に肩車された隼だが、降ろしてもらおうと急に真面目な表情を作って2人を見回した。

隼「いや…全国には俺より、もっと強い奴がいる筈だ。此処から始まるんだ…俺達の、『全国への挑戦』が!!」

円堂「…凄い。」

此処は、雷門中サッカー部の部室。円堂達は音無のパソコンを利用して、昨日行われた魁皇学院中VS栃木FCの試合を見ていた。最初は悪ふざけしながら見ていた1年生達も、画面の中で繰り広げられる凄まじいプレーの数々に目を奪われていった。

隼 轍平。

フットボールフェスティバルの開会式後に円堂達が出会った少年。まさかこれほどの実力とは…

ドリブルテクニクに、スピード。鮮やかなプレイングでピッチを舞うファンタジスタ。

ネットで調べた所によると、今年のフットボールフロンティア関東地区予選でもかなり活躍したらしい。

準決勝で帝国学園と戦い敢え無く敗退したが、その実力の高さは影山も恐れた程だったとか。

円堂「隼か…早くあいつと戦いたいぜ！勝ち続ければいつかは会えるよな!？」

風丸「慌てるなよ。まだ二回戦も始まってないんだぜ？まずは目の前の相手を倒すことに集中しないと…」

そう。昨日行われた一回戦で、大会参加チーム1024のうち半分が姿を消した。

勝ち残るのは、より強い力を持ったチームのみ。

たとえ雷門であつても、気を抜けば足元を掬われる。魁皇学院と戦う前にまだ見ぬ強敵と出会って散る可能性もあるのだ。そうならないためにも、今は特訓を重ねるしかない。来るべき二回戦に備えて。

円堂「あ、そうか。でも二回戦の相手ってどこなんだっけ？」

夏末「確か今日の5時に発表になる筈よ。」

円堂「5時か…よし、じゃあ何処と当たっても勝てるように練習しようぜ！」

「「「おー!!」「」」

早速グラウンドに飛び出して行く仲間達。

昨日の疲れがまだ残っているであろうに、誰もそんなことは顔に出さない。

円堂に続いて、ピッチに散らばって行った。

- 帝丹中 -

「なあ、昨日お前を商店街で見たって奴がいるんだけど。何してた訳？」

都立帝丹中学校の校舎裏。

普段誰も近寄らないその空間は、空気が淀んでいて、如何にも不良が溜まっていそうな吹き溜まりとなっていた。

その湿った地面に両膝を着きながら、沢渡 秋は何人かのクラスメイトに囲まれていた。

「な、何って…特に何も。」
「とぼけんじゃねえよ！」

学ランの前をはだけ、だらしなく下に着た赤いシャツを露出させた体格の良い少年が吠える。Ｔシャツにはアルファベットの『G』が描かれており、彼が怒鳴る度に自己主張するように揺れた。

「昨日さ、お前が綺麗な女連れて歩いてるのを見たんだと。なあおび太？」

赤シャツが後ろを振り返ると、彼に同調するように眼鏡を掛けた少年が頷いた。

「ああ。めっちゃ楽しそうに歩いてたじゃんか。普段俺らと遊ぶ時はあんな顔しねーのにさ。」

のび太と呼ばれた少年がシュウに近づく。

彼は野比 のび太といい、帝丹中内でも素行の悪い不良グループの1人だった。

「（ああ、百合香さんに連れられて散歩に行った時か…）」

昨日、傘美野と雷門の試合を見届けた後、百合香と一緒に稲妻町をぶらりと歩いてきたのだ。

特に何をしたという訳ではないが、それを野比に見られたという訳か。

「どうなんだよ、おい。腐敗シュウの癖に女連れて何処で遊んでたんだよ。」

野比がシュウの胸倉を掴んで強く揺さぶる。

ぐらぐら揺れるせいで気持ちが悪くなり、シュウは顔をしかめた。

「そいつさ、案外裏で何やってるかわかんないよ？この前も避難訓練の時、どさくさに紛れて私の胸掴んだし。」

不良グループの紅一点・源 静香が気怠そうに言う。

彼女の右手はずっと携帯電話を操作しており、時折軽快なメロディと共にシュウの顔を照らしていた。

「マジかよこの変態野郎！」

「ご、誤解ですよ。あなた様のような汚物になんか、頼まれたって触れませんよ…。」

更に野比が揺さぶってくるので、つい苦し紛れに言ってしまった。全くの誤解だ。あれは掴んだのではなくて、触れてしまっただけ。第一、階段で将棋倒しになった時に向こうから押し付けてきたのではないか。

「汚物はてめえだろボケ！」

口は災いの元、とはよく言ったものだ。

汚物という言葉にキレた源の蹴りが顎に炸裂する。

目から火花が散りばめ、目眩を起こしたシュウは再びその場に倒れ込んだ。

「おい、顔はやめときな。」

更に暴力を振るおうとする源を手で制し、また新たなクラスメート

が現れた。
学級委員の出木杉 英才だ。

「野比と骨川は後ろから押さえる。剛田は足持って動けなくしとけ。」

骨川と呼ばれた一風変わった髪型の少年が野比の隣に立ち、シユウの左腕を押さえる。続いて、剛田と呼ばれた先程の赤シャツが両足を掴んだ。

「よし。源、思いつ切りやりな。」

「ええ、ありがとう出木杉さん。」

源の拳がシユウの鳩尾にヒットする。吐き気が込み上げてきて、シユウが呻き声を上げた。

「死ね変態！」

源は主に腹を狙って拳を振るった。必死に体を擦って抵抗するのだが、野比が右腕、骨川が左腕を押さえているため身を守ることが出来ない。その内、野比がシユウの膝裏を突いてバランスを崩させ、シユウは湿った地面に盛大に倒れ込んだ。

いつの間にか、体を押さえ込む必要が無くなったために男子3人も暴力に参加してきた。

出木杉はそんな虐げる者と虐げられる者を涼しげな表情で見下ろしている。

次第に込み上げてくる嫌悪感。蹴られている胃袋の中で、何かが暴れているような気さえする。

「う…うえっ…！」

そしてとうとう、酸味を帯びた胃液と共に…シユウは腹に溜まっていたものを吐き出した。

消化しきれなかった給食のメニューが零れ出る。

ふりかけの代わりにチヨークの粉を散りばめられたご飯と、雑巾の絞り汁の掛かった唐揚げと、味噌汁ならぬママレモン汁となった汁物が地面を汚す。

「バカ、きたねーよ害虫野郎！」

顔を横に向けていたためシユウ自身の服は汚れなかったが、彼の吐瀉物は顔の近くに立っていた骨川の靴に掛かった。

「そのくらいにしときな。誰か来たら面倒だ。」

出木杉の指示で、野比達がシユウから離れた。

「あーあ、フランス製の靴が汚れちゃったよ。…おい腐敗シユウ、明日弁償金2万持って来いよ。」

靴に掛かった吐瀉物をシユウのズボンの裾で拭きながら、骨川が彼の頭を地面に押し付ける。

「2万なんて持ってないよ…！」

「だから、明日まで待ってやるって言ってたんだよ！金用意する時間作ってやったんだ、有り難く思えバーカ！」

元々キツネっぽい目を釣り上げながら、苦々しげに骨川が吐き捨て

た。
やがて出木杉を先頭に不良グループが去っていき、後には体を『く』の字に曲げたシユウだけが残された。

「あーあ…」

ごろんと仰向けになり、鼠色の空を見上げる。
悲しくて、悔しい。

中学に入って間もなく、シユウは出木杉率いる不良グループに目を付けられ、陰湿ないじめを受けていた。

体への暴力は日常茶飯事。

教科書や筆箱といった身の回りの品を隠されたり捨てられるのも、最早当たり前になっていた。

「僕、なんのために生きてるのかな…」

目にいっぱい涙を溜めて。雨の降りそうな曇り空に語り掛ける。

あの人は、今何してるのだろう…？

家族も友達もいないシユウの、たった1人の支え。

見野 百合香は、何をしてるのだろうか。

シユウが彼女の顔を思い浮かべていると、突然ポケットに入っていた携帯電話が震えた。サッカー協会からだ。

シユウは嗚咽と涙を堪え、深呼吸してから電話を耳に当てた。

「もしもし。沢渡です。」

シユウ君？これから来てほしいんだけど、時間あるかな。

サッカー協会資料課の職員・中目 栞（なかめ しおり）だ。彼女は死んだシユウの姉と同期で、よくシユウに資料の整理を手伝わせていた。

「…ええ。大丈夫ですよ。」

本当？じゃあこれから協会に来てくれる？フットボールフェスティバルの組み合わせを作んなきゃいけないんだあ…

電話の向こうで、栞が泣きそうな声を上げる。

泣かないで、とシユウは心の中で栞に語り掛けた。

フットボールフェスティバルにはトーナメント表は存在しない。一回戦が終わるごとに対戦カードを組み直し、戦う相手を完全なランダムにしているのだ。対戦相手の決め方は協会に保存された過去の実績やチームレベルを参考にするので、資料課の人員はそれらのデータを検索するために重労働を強いられている。

只でさえ人数が少ないのに、256もの組み合わせを作らねばならない彼女の苦労を思うと、手伝わぬ訳にはいかなかった。いじめを受け、半ば放心状態にあったとしても。

「わかりました。直ぐに伺います。」

さんきゅ。待ってるからね（*^ ^*）

通話が途絶え、栞の声が聞こえなくなる。

こんな格好じゃとても会えない、と…シユウは汚れた服を着替えるために一度家に向かった。

- 帝丹高校 -

観覧車が、見える。

5時間目が終わって、6時間目の古典が始まる前の休憩時間。見野百合香は頬杖をつきながら、窓の外に映る観覧車を眺めていた。彼女が見ている観覧車は、稲妻町に今年出来た国内有数の巨大なものだ。

百合香の住む米花町と、稲妻町の町境にある都立帝丹高校。その3階の窓際の席からも、稲妻町が誇る巨大な観覧車ははつきりと視認出来た。

今年作られたばかりだというのに、もう鉄塔に並ぶ稲妻町のシンボルとして知名度が上がっている。

「（良いなあ、私もシユウ君と乗りたいな…）」

何故か2人ずつしか乗れないその観覧車は、親子、友達、恋人同士、教師と生徒、上司と部下、師匠と弟子など…様々なペアで賑わっている。

中には、刑事と犯人という危険な組み合わせさえあった。最近では、雷門中出身のモデルのカミツレが、東京大江戸国際空港イメージガールのフウロと一緒に乗りに来たことで話題になった。

「ユリ、なーにぼんやりしてるの？」

ぼんやり観覧車を見ていると、突然後ろから抱きつかれた。

舞姫 華夜（まいひめ かよ）。

百合香とは幼稚園の頃からの親友である少女だ。

「観覧車見てたの。いつか乗りたいな、ってね。」

「ふーん…」

舞姫は曖昧に相槌を入れ、机の上に開いたままになっている携帯電話を覗き込んだ。

「あー確かシユウ君だっけ？ユリが面倒見てる子って…」

携帯電話の画面には、仏頂面で問題集と向き合うシユウの横顔が映っている。

「そっだよ。私の弟分なんだ。」

「不細工じゃないけどイケメンでもないし、何だかパツとしない顔よね、一回会ったことあるけど愛想も素っ気も無くて感じ悪いし。『ザ・根暗！』って感じ？」

「あら、私には結構優しいよ。あんなに私のこと慕ってくれるとね、どんなに根暗でも愛着が湧いちゃうんだよ。」

「ユリって昔から変なの好きだもんね…」

変なのとは失礼な言い方だ。

百合香は不満そうに頬を膨らませてみせた。

家族を失い、自分もとある事件に巻き込まれて入院したシユウと出会って、はや2ヶ月。

その暗い性格故に友達もいない彼を守ろうと誓ってから、2ヶ月が経過した。

知り合いの紹介で彼と出会った百合香は、心が壊れたようなシユウの瞳を見て、「救ってあげたい」という庇護欲を覚え…その日からずっと、彼と行動を共にしているのだ。

「せっかく美人なのに、付き合ってるのが根暗じゃ勿体無いね…」
「付き合ってる訳じゃないもん。シユウ君は騙されやすいし傷つきやすいから、私が守ってあげてるの。一応彼の保護者なんだ。」

幸せそうな表情で舞姫を見返す百合香。

だが、保護者を名乗ってはいるものの、その保護する対象が今、学校でいじめを受けていることも、彼の秘めたる過去も…百合香はまだ知らない。

- サッカー協会 -

汚れた制服を洗濯機に放り込み、シャワーを浴びたシユウはサッカー協会の資料室を訪れた。

深呼吸をしてドアを開けると、俯いていた栞がパツと顔を上げた。

「あ、シユウ君いらっしやい さーさーこっちに座って…」

嬉しそうな顔で横にずれると、先程自分が座っていた椅子をポンポン叩いてシユウを呼ぶ。

「はい。失礼します。」

シユウが栞に勧められた椅子に座ると、彼女は不思議そうにシユウの首筋に顔を近づけた。

「んー？なんか良い匂いがするね〜」

「ああ、ちよつと家でお風呂に入ってきたので。」

まさか「クラスメートから暴力を振るわれた拳げ匂ゲロ吐いちゃいました」なんて言える訳がない。

シユウは曖昧に頷き、机の上のパソコンに目を移した。

「これですか？二回戦の組み合わせというのは…」

「そうなの〜あと160チームくらい作らなきゃいけない…」

「何時までに作り終えなければならぬのですか？」

「んーとね、5時に発表だから〜4時45分くらいかな…」

なんとあと一時間弱しかない。

「わかりました。早速手伝いましょう。」

「ありがとー！」

一見すると簡単な作業に見えるが、中々厄介である。

弱いチーム同士は実力が均等に、有名なチームにはそれ相応の相手を用意しなくてはならない。

あまり実力差があり過ぎると観客も冷めてしまうし、客引きにも影響する。

「特に雷門中は全国のサッカーファンが注目するからね〜、一回戦は隣町対決で傘美野を選んだけど、二回戦からはそれなりのチームを用意しないとね。」

柔の悩みの種は雷門中らしい。弱いチームだと興醒めするし、万が一強いチームを当てて敗退すると、雷門を目標にしているライバル

達の志気にも関わる。

シユウは彼女の言葉を聞きながら、せつせとチームのデータに目を通した。

『5秒先の預言者』こと隼 轍平擁する埼玉県私立魁皇学院中学。陰陽師の血を引く少年達の集う京都府立陰陽寺中学。

世界のスター選手を集めたJF学園。
今年のFF全国大会でベスト4まで登り詰めた、沖縄県立狩火庵中学。

日本で2番目に強いとされる、選手層の厚さが自慢の石ノ森SC。

そして…

炎のストライカー豪炎寺 修也を味方に引き入れた、静岡の強豪・木戸川清修中学。

「木戸川かあ…良いところに目をつけたね でも出来れば木戸川と雷門は決勝リーグで当たって欲しいな…」

「決勝リーグ…ですか。」

「うん、雷門帝国木戸川白恋明紋で戦ったら見物だと思うよー」

「それは楽しそうですね。雷門で共に戦った、鬼道や豪炎寺、吹雪に一之瀬との勝負が見られるのですから…」

それはそれで面白いと思う。だが、他のチームも台頭してきている今、そのドリームマッチは望めそうにない気がする。

「でもさ、私らが組み合わせ作っても、どうせ『ジョーカー』さんが好き勝手に組み替えちゃうんでしょ？」

半ば投げ遣りに、栞と同じ資料課の小門 珠美（こかど たまみ）が呟いた。

「ま、まあまあタマちゃんそんな怒らないでよお…」

「ジョーカー…?」

「そっか、シユウ君は知らないんだね、『ジョーカー』のこと…」

ジョーカーというのは、フットボールフェスティバルの管理人だ。ルール違反を犯したチームや選手を処分する、謂わば『陰の処刑人』である。違反者を処罰する他、ジョーカーの意志で自由に対戦カードを組み替えることが出来る。

サッカー協会の正規職員なら殆どがその存在を知っているが、正体を知る者は協会上層部の中でもほんの一握りしかないという。故にその正体を探ろうとする者もいるのだが、ジョーカーに関する情報は殆ど伏せられており、性別も年齢も、属性さえも不明であった。

「あーあ、こんな面倒なことするなら、ジョーカーに組み合わせ作らせて休みたいよ…」

尚もぶつぶつ文句を言う珠美を余所に、シユウは近くにあったレポート用紙を引き寄せた。

「（こいつは…）」

とあるチームの資料だ。

最近起こった事件の代表格であり、メディアを賑わせていたイレブン。

副キャプテンの青い髪の少女があまりにもスタイルが良く、ネットで話題になったことも記憶に新しい。

「ねえ、栞さん。」

「んー？どうしたのー？」

「このチーム、雷門の次の対戦相手にしたいのですが。駄目ですかね？」

「どれどれ…」

栞がシュウの差し出した資料を覗き込む。

「うんうん！良いんじゃないかな。話題作りになるしね」

組み合わせ次第では当日の観客の動員数やグッズの売上にも関わるので結構気を遣うのだが、シュウが選んだこのチームなら企業もファンも雑誌社も満足しそうだ。

「（雷門中：果たして今のあなた方に倒せる相手だろうか：次の試合、楽しみにしてるよ。）」

栞に褒められ、照れくさそうに微笑みながら…シュウは眼鏡の奥の目を光らせた。

雷門サッカー部の監視役を任された身として、彼らの力量を計るには申し分ない相手である。

一回戦を突破出来たのが偶然か必然か：それを確かめるに相応しい。

シュウの思惑を知る者は、他に誰一人いない。

こうして、雷門中の二回戦の相手が決まった。

第16話までの主な登場チーム（前書き）

全く執筆しないのは寂しいので、本編は更新しない代わりにおまけを書いてみました。

第16話までの主な登場チーム

ダークエンペラーズ

エイリア石を持ち逃げした研崎の切り札で、事実上エイリア事件の最後の敵。

メンバーは雷門イレブンとバックアップチームで構成されており、全員がエイリア石の力で能力が各段に上がっている。

圧倒的な力で雷門を追い詰めるが、円堂の逆洗脳によってエイリア石を破壊され、正気を取り戻した。

風丸 一郎太（かぜまる いちろうた）

中学2年生。風属性。ポジションはFW。

エイリア学園『ザ・ジェネシス』との最初の試合で負傷退場し、稲妻総合病院に入院していた。

強くなっていく敵に付いていけず、力を求めた結果研崎に唆され、エイリア石に手を出してしまう。

手にした力に溺れ、嘗ての仲間だった円堂達に対して危険なプレーを行うことも厭わない。

リベロからGKに戻った円堂と1対1の勝負を行い、彼の仲間とサッカーを愛する真っ直ぐな気持ちに心を打たれ、正気に戻った。

必殺技は『スピードフォース（スキル）』『真・疾風ダッシュ』『ダークペガサス』。

西垣 守（にしがき まもる）

中学2年生。火属性。ポジションはDF。

一之瀬と土門、木野のアメリカ時代の幼馴染みで、木戸川清修中のメンバー。

木戸川がエイリア学園に襲撃されてからは入院していたが、ダークエンペラーズの頭数が足りなかつたので、研崎が仕方無くエイリア石を与えた。

「フェニックスはもう飛べない！」は名言。

余談だが、円堂と下の名前が被っている。

必殺技は『ディフェンスフォース』『スピニングカットV2』『ダークペガサス』。

時雨坂SC

東京都のジュニアサッカークラブ。都内有数の実力派で、毎年この中から数名は帝国学園に入学しサッカー部に入っている。

雷門中サッカー部の新メンバー・多摩野 五郎が在籍していたが、いじめを理由に辞めてしまった。

汐崎 怜央（しおざき れお）

中学1年生。風属性。ポジションはFW。

元時雨坂SCのメンバーで、五郎のチームメイト。彼を『駄目五郎』と呼びいじめていた。元々サッカーに熱心ではなく、実力はあるものの本気でプレーすることは少なかった。そのため中学校進学後は帰宅部を選んだ。

必殺技は『ウインドブラスト』。

今田 基樹（いまだ もとぎ）

中学1年生。林属性。ポジションはGK。
汐崎とつるんで五郎をいじめていた。彼もまたサッカーに熱心ではなく、中学校進学後は帰宅部を選択した。

稲妻キッカーズ

東京都のジュニアサッカークラブ。

雷門中のFW・染岡 竜吾が所属していた。

稲妻KFC

稲妻町子供フットボールクラブの略称。稲妻町内でもトップクラスのチームで、元イナズマイレブンの会田が監督をしている。

まだ小学生ながらも円堂と特訓しているお陰でかなり力を付けており、子供だからといって侮れない。

如月 まこ（きさらぎ まこ）

小学6年生。林属性。ポジションはFW。

稲妻KFCのキャプテンで、唯一の女子。紅一点ながらも男子に引けを取らない実力を誇り、キック力はチーム1である。
来年雷門中に入学予定。

会田 カ（あいだ ちから）

54歳。山属性。稲妻KFCの監督。

元イナズマイレブンの1人で、雷門中の卒業生。今は子供達にサッカーを教えている。

D Fなのに強力な必殺シュートを知っているらしく、染岡に『ドラゴンクラッシュ』、五郎に『コロドラシュート』を伝授した。

五ツ葉KSC

南東京で猛威を振るうチーム。稲妻KFCをもねじ伏せる実力を持つ。

『宇都宮 虎丸』という強力なストライカーがいるらしい。

尾刈斗中学校

東京都の公立中学。呪いや催眠術を使った幻術サッカーを得意とする。

豪炎寺正式入部後の雷門の最初の対戦相手であり、催眠術を駆使した戦法で超次元サッカーと普通次元サッカーの違いを見せつけた。フットボールフェスティバル開催を前に雷門中との再試合に臨むが、染岡&シャドウの新たな2トップに翻弄され惜敗した。

デモニックパーティー

尾刈斗中学の必殺タクティクス。一定の隊列と素早いパス回しによって相手に幻覚を見せ、精神を崩壊させることでチームワークをズタズタに引き裂く催眠戦法。

ゴーストロック

尾刈斗中学の必殺タクティクス。地木流監督の呪文で敵の頭をゴワンゴワンにすることで催眠状態に陥らせる戦術。

この催眠術を受けた相手は金縛りと同じ状態になり、呪文を止めるまで身動きが取れなくなる。

幽谷 博之（ゆうこく ひろゆき）

中学1年生。陰属性。ポジションはFW。

尾刈斗中サッカー部のキャプテン。

必殺タクテイクス『デモニックパーティー』を発動する際は隊列の中心を成し、対戦相手に幻覚を見せつつゴールに攻め込む。猛特訓の末に自分だけの必殺シュートを編み出すが、円堂の前には歯が立たなかった。

雷門との練習試合終盤、諦めた味方の誰もが足を止める中、最後までシュートに立ち向かうガッツを見せる。

必殺技は『スカル・ザ・ブレードV2』『ファントムシュート』『神隠し』。

須加 守（すが まもる）

中学2年生。山属性。ポジションはDF。

サッカー部の新加入者。雷門中とエイリア学園の激戦を観るうちに感化され、サッカー部に入部した。

初心者ながらもロングシュートの飛距離はチーム1で、その能力を買われてスタメンに抜擢された。

必殺技は『ディフェンスプラス（スキル）』。

鉦 十三（なた じゅうぞう）

中学2年生。風属性。ポジションはGK。

ホッケーマスクを被った不気味な男。前回の対戦時と同じく、催眠術を応用した必殺技を使用する。

『歪む空間』を超える必殺技『捻れる空間』で空間をねじ曲げてシ

ヤドウ達を苦戦させたが、合体必殺技の前に敗れる。

最期はTPを切らしたのか、最下級必殺技の『キラーブレード』を発動してシユートに特攻し、敢え無く散った。

必殺技は『真・キラーブレード』『真・歪む空間』『ケルビムクロ1V2』『捻れる空間』。

地木流 灰人（じきる はいと）

28歳。陰属性。尾刈斗中サッカー部監督。

普段は穏やかだが、感情が高ぶると激情態と呼ばれる荒々しい性格になる。

倫堂学院中学校

茨城県の私立中学。地元では昔からサッカー部が強いことで有名な古豪で、練習試合も積極的に行っている。

1年前の練習試合では桜咲木の鳴神に翻弄され、今大会では帝国学園に6失点を許し惜敗した。

鎌瀬FC

フットボールフェスティバルの参加チームの中でも優勝候補の一角とされているが、王牙学園と戦い全員負傷で棄権に追い込まれてしまった。

全国同時開催の今大会で、試合開始後10分で真っ先にリタイアした。

傘美野中学校

稲妻町の隣町にある公立中学。サッカー部は今年同好会から正式な部活動になったばかりのかなり新しいチームで、まだメンバーのレベルも低い。

元々は稲妻KFCからグラウンドを取り上げる悪党だったが、雷門中に負けたことで改心。真面目に練習に取り組むようになったという過去がある。エイリア学園『ジェミニストーム』に学校を破壊されてから猛特訓を積み、主要メンバーを欠いた雷門を追い詰めるまでに成長した。

フットボールフェスティバル一回戦で雷門中と戦い、油断した雷門から1点奪うが、流れを掴んだ雷門に逆転されてしまった。

ハイド・アンド・シーク

傘美野中学の必殺タクティクス。イギリスのサッカーチーム『ナイツオブクイーン』のタクティクス『無敵の槍』をモチーフにしている。

二人一組のグループを4つ作り、それぞれが体から発する気を利用してボールの出所を隠しながら敵陣に突入する戦術。気で作ったオラのの中にボールを隠し、相手を攪乱する様は正に『ハイド・アンド・シーク（隠れん坊）』である。

4組のうち一組は必ずボールを持っているため、全てのグループを一度に攻撃されると機能しなくなるのが弱点。

ザ・カーブ

傘美野中学の必殺タクティクス。フリーキック時に発動することが出来る。

ボールに強い回転を掛けることで蹴った方向とは反対側にシュートを叩き込む。

一応FW陣は全員使用可能だが、水口が一番成功率が高い。

出前 洋（いでまえ よう）

中学1年生。雷属性。ポジションはFW。

サッカーが大好きで、生垣と共にサッカー同好会設立に尽力した。その働きを認められ、1年生ながらもキャプテンを務めている。

シャドウと対を成す光のストライカーで、習得する技も彼と酷似している。GP切れを起こしても勝利に貪欲であり、傘美野中を勝たせることに人一倍熱心な男。

しかしまだ実力不足故に、シュートチャンスを生かすきれないという欠点もある。

実家は蕎麦・うどんの美味しい「麵処いでまえ」を経営しており、休日は出前でいつも走り回っている。

必殺技は『真・シャイントルネード』『シャインタックル』『シャイングランド』。

生垣 冗（いけがき じょう）

中学3年生。火属性。ポジションはGK。

出前と共に傘美野中にサッカー同好会を作った初期メンバーの1人。唯一の3年生で本来ならば受験生だが、受験勉強そっこのだけでボールを追い掛けている。

どんなピンチの時でもギャグを言って雰囲気や和らげるムードメーカーで、下級生達からの信頼も厚い。

会田や一番街シリーズ、稲妻KFCとの特訓の末、自身の必殺技を左右両回転に対応出来るようにパワーアップさせた。

抜群のセービング能力で傘美野ゴールを守り、土壇場で新たな必殺技を編み出すなど健闘したが、雷門には後一步及ばなかった。

必殺技は『キーパープラス（スキル）』『真・トルネードキャッチ』『トルネードファンングV3』『バーニングキャッチ』。

安永 英嗣（やすなが ひでつぐ）

中学1年生。風属性。ポジションはFW。

出前とは小学校時代からの親友で、良き相談役。

元々小学校の時はテニスをしていたのだが、手首を痛めて辞めてしまい、出前の誘いを受けてサッカー同好会に入会した。

クールな性格で冷静沈着だが、生垣の引退には涙を流した。

必殺技は『真・ダイナマイトシュート』。

水口 精司（みずぐち せいじ）

中学2年生。林属性。ポジションはFW。

正確無比なプレーが持ち味で、『サイボーグ』の異名を持つ。フリーキックの精度の高さはチーム1で、『ザ・カーブ』を使って雷門から1点を奪った。

必殺技は『スナイパー（スキル）』『ダイナマイトシュート改』。

貴崎^{きさき}

34歳。山属性。傘美野中サッカー部の監督で国語教師。最初は受け持ちの部活動がなかったためにサッカー同好会の顧問をさせられていたに過ぎなかったが、次第に出前達に影響され真剣にサッカー部を指導するようになった。

指導者としてはまだ未熟なため、会田に監督としての技能を学んでいる。

貴崎 勇二（きざき ゆうじ）

4歳。火属性。

傘美野中サッカー部監督の1人息子。父親の影響でサッカーを始めた。

10年後、サッカー管理組織『フィフスセクター』のメンバーとして、雷門中に襲い掛かる。

一番街サリーズ

稲妻町商店街の大人達で結成されたチーム。町内のサッカー大会ではいつも優勝している。キャプテンは居酒屋『金閣寺』の女将。エイリア学園に学校を破壊され、落ち込んでいた傘美野中サッカー部を特訓し勇気づけた。

如月 沙理奈（きさらぎ さりな）

32歳。風属性。ポジションはFW。

居酒屋『金閣寺』の女将で一番街サリーズを纏める女性。娘は稲妻KFCのキャプテンである如月 まこ。

母子揃ってキャプテンでFWを務め、チームを引っ張っている。おまけに誰に対しても物怖じしない性格で怖いもの知らず。血は争えない。

20歳の時にまこを産んだが、相手の男に逃げられたため、女手一つでまこを育てている。

必殺技は『お色気up!（スキル）』。

三河屋 三郎（みかわや さぶろう）

26歳。火属性。ポジションはFW。

一番街サリーズの点取り屋。20代後半にして髪の毛を殆ど失っている。豪快かつ面倒見が良い性格で、酒を売りながらお得意さんと話し込むこともしばしば。

「ちわー、三河屋でーす！」の快活な声でみんなを元気にする。

酒の配達に行ったかと思えば金閣寺で飲んでいることが度々ある。

稲妻KFCや会田と一緒に傘美野中の練習に付き合い、『ダイナマイトシュート』を伝授した。

必殺技は『ダイナマイトシュート』。

清明院大学附属中学校

神奈川県私立中学。神奈川県内全域から優秀な選手を集めたエリート校であり、香川監督の指導の下、統率されたサッカーを得意とする。

サッカー協会と繋がり深いチームで、優遇される故に協会には絶対服従の体制をとっている。

『化身使い』と呼ばれる謎の選手を3人擁する。

フットボールフェスティバル一回戦で桜咲木中と戦い、協会からの指示で彼らを完膚無きまでに叩きのめすが、バーニングフェーズが発動した桜咲木イレブンに倒された。

神崎 士郎（かんざき しろう）

中学3年生。林属性。ポジションはMF。

サッカー部のキャプテンにして、氣のエネルギーを具現化することが出来る『化身使い』の1人。

シスコンと厨二病をこじらせた残念なイケメン。

司令塔だが如何せん発言力が無く、技も使用していない。

化身も発動したもののシユートを放つ直前で妨害されたため、不遇感は否めない。

最後は化身を使う負荷に耐えきれず、青白い炎に包まれて灰化した。

*総統オーディン

神崎の化身。黄金に輝いており、不死鳥を擬人化したような姿をしている。

神崎によつて発動されるが、大した出番もなく消滅する。

必殺技は『エターナルカオス』。

仲村 創（なかむら はじめ）

中学3年生。風属性。ポジションはFW。

感情的で短気な性格。サッカー協会に心酔しており、協会の指示ならば相手を痛めつけることも厭わない。

サッカー協会によつて選ばれた化身使いの1人であり、化身の力を使つて暴れる快感に酔いしれている節がある。

試合終了後、化身を使う負荷に体が耐えきれず、神崎共々身悶えしながら灰化した。

必殺技は『サイコアクセル』、『スラッシュダガーV3』。

*機械兵サイコロゲ

仲村の化身。コロギのような姿に、機械で武装した不気味な姿をしている。

連携技発動の際にはバイクに変形し、仲村を乗せながら相手選手を蹴散らす。

必殺技は『デッドエンド』。

東條 悟（とうじょう さとる）

中学2年生。風属性。ポジションはGK。

英雄になることに固執する少年。神崎、仲村と同じく化身を使うことが出来る。

協会からの指示には従順であるものの、英雄になるために従っているに過ぎず、他2人のように忠誠を誓っている訳ではない。

化身の力でゴールを守るが、覚醒した出雲の前に敗北。

神崎らが灰化したのを見て恐れをなし命乞いをするが、やはり自分も灰になってしまった…。

必殺技は『デストクロウ』。

*氷獣デストワイルダー

東條の化身。白銀の虎のような姿をしている。

氷を操ることが出来、東條との連携プレーでゴールを守る他、自分の意志で敵を攻撃する。

必殺技は『クリスタルブレイク』。

香川 英行（かがわ ひでゆき）

37歳。林属性。清明院大学附属中学校の専任監督。

組織的なプレーを好み、集団戦術を選手に教え込んだ。

サッカー協会から推薦され清明院大学附属中の監督に就任した経緯があるため、協会に忠誠を誓っている。

知的な人物だが神崎らが協会から粛清されることを黙認しており、彼らが死んでも何も感じない冷血な男。

古墳中学校

関東地方にある公立中学。

フットボールフロンティア関東地区予選では堅実な守備で1点を守りきるチームとして知られている。

フットボールフェスティバル一回戦で兵庫県の不祥寺中と戦い、呆気なく負けてしまった。

埴輪 宇一（はなわ ういち）

中学2年生。火属性。ポジションはGK。

古墳中のキャプテン。

遠井1人に殆ど何も出来ずに2桁の失点を許した。

中里 貴（なかざと たか）

中学2年生。山属性。ポジションはDF。

『ストーンプリズン』で進路を阻もうとするが、炎ヶ原に突破されてしまう。

必殺技は『ストーンプリズン』。

沢田 千早花（さわだ ちさか）

中学2年生。山属性。古墳中のマネージャー。

密かに埴輪と付き合っている。

栃木FC

正式名称は栃木FCジュニアユース。クラブチームの大会でベスト16入りを果たす強豪だが、隼1人に翻弄されていたため実際はそれほど強くはないと思われる。

これでも栃木県内トップレベルの強さを誇っているらしいが、今回中学校に敗退した為に栃木県のレベルの低さが露呈してしまった。強豪国ブラジルを意識した黄色いユニフォームが特徴的。

宇都宮 雷都（うつのみや らいと）

中学3年生。雷属性。ポジションはMF。

栃木県宇都宮市出身。

栃木FCの司令塔。端正な顔立ちで女子からの人気も高い。

雷が苦手だったが、トラウマを克服したことで強力な雷属性の技を習得した。

クールな雰囲気を持つが、エモンガやパチリスが好きだったり、スーパーモデルのカミツレのファンだったり、意外な一面がある。

今回はチームプレーに徹したため自らシュートを決めることは無かったが、栃木県内全域の電力の20%を借りて放つ大技『電気魂』でんきたまという必殺シュートを持つ。

名前の元ネタは宇都宮市と、宇都宮市の別名から。

必殺技は『オフエンスフォース（スキル）』『稲妻ステップ』『電気魂』。

小山 遊（おやま ゆう）

中学2年生。林属性。ポジションはFW。

栃木県小山市出身。

繊細なボールタッチと精度の高いループシュートが自慢の点取り屋。休日になると地元の小山ゆうえんちで遊び歩いているが、実は小山市が大嫌い。

名前の元ネタは小山市と、小山遊園地から。必殺技は『シュートプラス』『だぶるじえいV2』。

栃木 市（とちぎ いち）

中学1年生。風属性。ポジションはFW。

栃木県栃木市出身。

1年生ながらもスタメンに抜擢される実力者。小山とのコンビネーションプレーは完璧。

名前の元ネタは栃木市から。

必殺技は『だぶるじえいV2』。

日光 照宮（にっこう てるみや）

中学3年生。風属性。ポジションはGK。

栃木県日光市出身。

休日になると日光東照宮に足を運ぶ。

栃木FCが一回戦で敗退したのはこいつがザル過ぎたせい。

名前の元ネタは日光市と、日光東照宮から。

必殺技は『キーパープラス（スキル）』『華蔵の滝』。

万能坂中学校

群馬県の公立中学。元々サッカー部は無かったが、エイリア事件以降各地で起こった超次元サッカーブームに影響されてサッカー部が

設立された。

記念すべき初陣で福岡県に出向き、全く無名の天龍学園と戦うが、

9-0で敗北した。

10年後、ファイブスセクターに支配されたチームとして雷門と戦うことになる。

千御泥 絢（ちみどろ けん）

中学3年生。火属性。ポジションはFW。

万能坂中のキャプテン。公式戦初出場のチームながら、せめて一勝はしようと意気揚々と福岡県に向かったが、コトアール擬きのチームにフルボッコにされた。

この悔しさをいつまでも忘れず、強豪と呼ばれるくらい強くなることを誓い、後輩にその夢を託す。だが彼の願いも虚しく、10年後の万能坂は腐敗した管理サッカーを受け入れたチームになっていた…
必殺技は『真・キラードライブ』。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2086s/>

イナズマイレブン X PROJECT NOAH

2011年10月13日01時50分発行